
LuLu ~風の軌跡~ ?幻の天空竜

篠原勇

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「ルル～風の軌跡～ ?幻の天空竜

【Zコード】

Z8337F

【作者名】

篠原勇

【あらすじ】

二人乗りの小型飛空船『エア・ライド』で世界中を駆け巡る何でも屋の少女ルルカと、相棒のおしゃべりネズミのこにゃく。仕事もなく、万年金欠病の彼女たちだが、街でゴロツキたちに絡まっていた苦労人ジャーナリスト、アドル＝レイナーズを助けたことから状況が一変する。

成り行きで彼から、『一緒にビッグスクープを探してほしい』といふ依頼を受けたルルカたち。

久し振りの仕事……だが格安の依頼料。

完全にやる気ゼロ状態で適当に仕事を進めていたが、いつの間に
やら『天空竜』を研究する偏屈考古学者と、彼の研究を付け狙う空
賊団との抗争に巻き込まれ……。

その1

「ぎやああああああああつ　！！
ひつ……人殺しいいいいいいつ　！！」

閑静な街中に、緊迫感に満ちた大絶叫が響く。

およそ事件や騒動などとは無縁の、小さな小さな山間の街の大通りに、突然出来上がった黒い人ばかりの山。

その中心部には、ぽっかりと空間が空き、騒動の渦中の人物と思われる二人の人間が取り囲まれていた。

一人は、男。

どういうわけか、真昼間だというのに、道のど真ん中に大の字になつて倒れ込んでいる。

そして……もう一人は、少女。

一見まだあどけなさの残る、『ぐぐぐ普通の少女なのであるが、倒れた男の側に佇む彼女の右手には、その姿とは不似合いの『凶器』が握られていた。

「だつ……誰が人殺しよつ　！　失礼なこと言わないでよね、おつさん！」

いきなり見ず知らずの人間に『人殺し』呼ばわりされ、少女は額に青筋を浮かべながら、自分を取り囲んだ群衆に向かつて怒鳴り返

す。

しかし、

「バ……バ力野郎つ！ 白昼堂々こんな大衆の前で人をぶつた斬つておいて、誤魔化せると思つてんじやねえよ！」

「だから、違うってのー！ よく考えてみなさいー！ こんな清楚可憐な美少女が人を殺せると思う？」

「（えつ、美女？！）？」

「あんたは引っ込んでて！ いま面倒なことになつてるんだから

「（何だよ……美女なんてどけに元もいねえじゃん）」

「ほほほ……。あとでちよっと話しあふよしぬうか」

な、何一人で喋ってるんだ？

「げつ……！ ち……ちよつと待ちなさいってばー！」

『さあああああああああああああ』

徐に、凶器を無防備にぶら下げつつ群衆に歩み寄る少女。

つい先程起こったばかりの惨劇を目の当たりにしていた人々は恐れ慄き、一斉に後ずさつた。

その2

遡ること、ほんの数分前……。

それは、突然の出来事であった。

「く……食い逃げだ　　つ……」

切迫した叫び声が街中に響くとともに、一軒の小さなレストランから人相の悪い小太り中年男が飛び出してくる。

店の外に出ると同時に、迷うことなく猛疾走。

その体型からは想像もできないような俊敏な動きで、大通りを行き交う人ゴミの間を縫うように走り抜け、みるみるうちに店から遠ざかって行つた。

そんな男に少し遅れて、数人のエプロン姿の従業員たちが憤怒の形相を浮かべながら飛び出してくるが……時既に遅し。

「ああ～っははははははははははははは～！
あばよ、間抜けな店員ども～！ 安っぽい味だったが、なかなかうまかつたぜ～！」

食い逃げ男の背中は既に通りの遙か遠く。

とてもではないがむり追い付く」とは出来ないだろ。

神経を逆なでするよつた捨て台詞だけが遠く響いた。

「クソがあ　　つ　　ーー！」

「戻つて来やがれ、このブタ野郎　ーー！」

「おめーが食つたのは、一番安い山菜定食だ　！　安っぽくて当たり前だろ　ーー！」

耳を劈かんばかりの怒号が轟く。

しかし、まんまと食ひ逃げを許してしまつたレストランの従業員たちは、結局はただガツクリと頃垂れて、逃げ行く男の後ろ姿を見送ることしか出来なかつた。

「……ついに出たわね」

大通りの騒ぎを聞きつけ……小さなオープンカフェでくつろいでいた少女はニヤリとほくそ笑んだ。

山間の平和な街で相次いで発生する凶悪な食ひ逃げ事件。

噂を聞き付け、犯人を捕まえんと張り込むこと三日。

ついに……たつた今、その犯人が姿を現したのだ。

三日間ずっと同じ店で、しかも朝からジュース一杯のみで一日中張り込んでいたため店員からは嫌な目で見られっぱなしであつたが、少女はいちいちそんなことは気にしなかつた。

大慌てで勘定をすませると、勢い勇んで颯爽と大通りの中央へと歩み出る。

「（なあ……、やつぱやめといった方がいいんじゃないのか？
ビビせまた骨折り損のくたびれ儲けになるだけだぜ）」

すると……。

少女のすぐ耳元で、周りの人間には聞こえないような小さな囁き声が届く。

口調は大人びているが、声の質はまだ子供のものだった。

…しかし、声の主の姿はどこにも見当たらぬ。

「分かんないわよ。もしかしたら大物賞金首なのかもしれないじ
ゃん」

姿なき声の主に返答する少女。

端から見れば完全に独り言。

周囲から奇異の視線が集まるが、今の少女の視界には食い逃げ男の姿しか入っていない。

「（そつかなあ……。大物賞金首は食い逃げなんてショボイことしないと思うんだけどなあ……）」

「いいの。ほら、来たわよ」

通りを行き交う人々は、少女が左手に携える『それ』の存在に気づくやいなや、関わり合いになるのは『めんと言わんばかりに彼女の周りを大きく避けて通り始める。

少女と、迫り来る食い逃げ男とを遮るものは何もなくなつた。

食い逃げ男は走りながら小首を傾げる。

人々が群がる大通りに、突然ぽつかりと空間が空いたのだ。

「お？お？！おおお！！

何だ、何だあ？！おめえら、この俺様のために道を空けてくれたつてのかあ！！？

だあ～はつはつはつはつは～！！

ついにこの『ただ食い雑食王』ゲリー様の名声も天下に轟いてき

たつてわけかあ　！！

有頂天になつて疾走しながら高笑いを上げ始める食い逃げ男。

しかし、そこで彼は気付く。

一人だけ、ぽっかり空いた空間の中に身動き一つせず佇む一人の少女の姿に。

「オラア、そこの小娘！道をあけやがれ　！！　天下のグリー様のお通りだあ　！！！」

しかし、少女の姿が間近に迫つて来た時、よつやく男は彼女が放つ異彩に気付いた。

左手に……刀　？！！

気付いた時には既に手遅れ。

彼はもう完全に少女の刀の間合いに入つていたのである。

男が刀の間合いに入つたと判断した後の少女の動きは、実に俊敏なものであった。

右手を刀の柄に掛け、どっしりと腰を落として低く構える。

刹那、目を見張るようなスピードでその刀が抜き放たれた。

一体、その光景を見ていた何人の者が少女の剣筋を目に映すことができたであろう。

恐るべき速さの居合抜きであった。

「ぐ……えつ……」

手こじたえは、十分。

苦悶の呻きを漏らし……走る勢いそのままに、男は一、二歩たらうを踏んで、少女の後方に前のめりに倒れ込んだ。

せん

抜き放つたときの超スピードとは対照的に、今度はゆっくりと刀を鞘に收めると、少女は倒れた食い逃げ男の方を振り返る。

「あいつ？」

気付けば通りを行く人々は足を止め、少女と倒れた食い逃げ男の周りに群がり、呆気にとられたような表情や、慄きの表情で少女の方を見つめていた。

「（これら注目集めちまたみたいだな）」

「……だね。まあいいじゃんか」

見事獲物を仕留め上機嫌な少女は、ざわつき始める周囲にも気にすることなく呑氣に咳いた。

しかし

「ぎやあああああああああつ ! !
ひつ……人殺しいいいいいいつ
！」

こうして……時間は元に戻る。

「だから！私は人殺しじゃない、つつつてんでしょ
ちょっとは人の話を聞きなさいっての！」

「ひいいいいいいいいい」

「……」ち来んなー！！

何とか誤解を解こうと少女はがなり立てるが、脅える群集は一向に聞く耳持たない。

歩み寄りつとすればするをめど、捕まれば一巻の終わりとばかりに勢いよく後ずさつて行く。

「だあああああああ、むづつ……！」面倒臭いわねつ……」

業を煮やした少女は頭をボリボリ搔きむしると、逃げ惑う群集の一人の胸倉を素早く引っ掴んだ。

そして、その眼前に刀を突き付ける。

「に……逃げて！早く逃げて！！」

「おい、役人はまだか！ 誰か早く役人を呼んでくれ！」

ますます大きくなる、周囲の騒ぎと混乱。

「落ち着いて、何もしないっての」

そんな群集などまるつきり無視し、先程とは打って変わって、彼らを落ち着けようと、少女は今度はやんわりした口調で語り掛けた。

「ほら、よく見て。この刀」

「え……？」

捕えられた男はしばらくギュッと刃を固く閉じてガタガタと体を震わせていたが、いつまで経っても少女が襲つて来ないと気付くと、恐る恐る刃を開けた。

そして、言われるがままに刃の前に突き付けられた刀をまじまじと見つめる。

「あ……あれ……？ 刃がない……」

「……何だつて？」

男の呆けた呟きが聞こえたのか……周りで騒いでいた群集たちの視線も、少女の持つ刀の刀身に集まつた。

少女が手にする刀の、本来なら鋭利な形状をしているはずの刃部は丸く潰れていた。

こんな刀ではよっぽど強く叩き付けないかぎり、人は殺せない。

しかし、少女のか細い腕では、そんなことは常識的に考えて到底

不可能である。

その証拠に、少女の一撃をくらった男は倒れたままピクピクと体を痙攣させていた。

「ね？……もつとも、打撲か骨折くらいしてるとかもしれないけどね」

ようやく誤解を解くことを出来た少女は再び刀を収めると、安堵の息をつきつつ、未だどよめいている群衆に向けてパチッとウインクして見せた。

その4

夕暮れ色に染まる空。

山間の街の日没は早い。

眼下には、既に一面朱色の世界が広がっていた。

「あ～～～…………」

そんな景色を見つめつつ、狭い機内に大きな……大きな溜め息が漏れた。

食い逃げの男を倒した、あの後……少女は群集の中の誰かが呼んで来たらしい街の役人に必要以上に念入りに事情を説明し、失神した食い逃げ男を引き渡した。

「ご協力ありがとうございました。それでは、こちらが報奨金の一万リードになります」

「うつわ、安っ！『冗談でしょ？』

役人の言葉と、受け取った報奨金の額に少女は愕然とする。

驚愕の表情を浮かべるとともに、あからさまに不満げな声が漏れ

た。

「いえ、一万リードです」

しかし、明らかに御堅い面構えをしている役人の言葉は変わらない。

表情一つ変えることなく、きつぱりと言い放たれた。

「……そんなもんなの？ これでも結構頑張ったのよ？」

「E級賞金首ゲリー＝ジョーンズ。

犯歴は食い逃げばかりで十二件。被害総額は七六一リード……。賞金首としては最下級クラスですね。懸賞金が掛けられたのが不思議なほどの軽犯罪者です。正直、最低額の一萬リードでも報奨金を支払うのは高いと思われます」

手元の手配書と捜査資料をパラパラとめくりつつ、役人は淡々とした口調で言葉を並べていく。

要するに、正真正銘ただの小物だつたわけである。

「そ……そんなあ……」

役人の言葉に完膚なきまでに叩きのめされた少女は、ガックリと肩を落とした。

「等級によつて懸賞金の上限は決められていますし、どちらにせよ増額は望めませんね。

重犯罪の増え続けている近年では、食い逃げくらいの軽犯罪はこ

の程度の額にしかなりません。どうか」理解下さい」

人間世界の統治機関である世界政府によつて定められた、犯罪者の階級制度。

罪種や犯罪の凶悪性によつて階級は五段階に分けられ、上位階級になるにつれてその首に掛けられた懸賞金の額は上がるといつ。

最高位のA級ともなれば、その懸賞金の額はウン千万にもウン億にもなるらしい。

そんな事実を知つていただけに、少女の落胆も大きかつた。

「どうせ狙われるのであれば、もっと上級の賞金首を狙られてみては？」

こんな田舎町にはそつそないかもしませんが、少し大きな街へいけば、D級……まれにC級の賞金首だつて潜んでいます。懸賞金を稼がれるんでしたらその方が確実ですよ。危険度は増えますが、その分報奨金の額もグンと上がりますし。役所まで一緒に来ていただければ、最新の指名手配リストを差し上げますよ」

「おあいにく様。私、賞金稼ぎじゃないの」

役人の言葉に、よつやく諦めのついた少女は受け取つた報奨金を財布に収めつつあつさりと背を向けた。

「何でも屋、ルルカ＝シエル。

犯罪者を相手にするような血生臭い争い事よりも、もっと庶民的なお悩み解決事を引き受ける方が好きなの。

役所でも手を焼くような困り事があつたら、何でも引き受けけるか

「さ、いつでも連絡してね

「はああああああ～～～～～。宛がハズれちゃつたなあ……」

狭い機内にこぼれ落ちる、大きな……大きな溜め息。

確かに……諦めはついていた。

ついてはいたが、二二二日間の行動を振り返ってみると、やはり後悔の念だけが胸の中に蟠る。

操縦桿を氣だるげに操るルルカから出て来るのは愚痴と溜め息ばかりであった。

「あ～あ、所詮噂話なんて宛にならないわね。

それにも、一万リードはないわよね。一万リードは三日も張り込んで、あんだけ苦労したつてのに……」

「何を落ち込んでんだ。だから最初に言つたじやねーか。食い逃げなんてショボイことするヤツが、大物賞金首なわけがね一つでよ。

やっぱり、やめときやよかつたのに……」

すると、意氣消沈で落ち込むルルカの耳元で、またあの子供の声が聞こえた。

今度はちゃんと姿がある。

ルルカの右肩にひょここんと乗つているそれは……小さく白い、も

「もこした毛の塊。

彼女の相棒で、おそらく世界で唯一人語を操ることができるネズミの『こんにゃく』（ルルカ命名）である。

機内で一人つきりの今はちゃんと姿を現しているが、人前では、『喋ることがバレたら、サークス団に売り飛ばされる！』と勝手に思い込み、ルルカの着ている白いパークーのフードの中に隠れている。

ただ、普段姿を隠していることに安心しているのか、彼は人前でも平気でルルカに話し掛ける。

そんな彼に対して、ルルカもバカ正直に受け答えしているため、独り言を喋っているように勘違いされることも多かった。

「だつて、しうがないじゃん。仕事は来ないし、お金はないし

……」

「だからつて、たまたま通りがかりで耳にしただけの食い逃げなんて捕まえて、がつたり賞金がもらえるわけねーじゃんか。もうちつとよく考えてから行動しろよな。行き当たりばったりにもほどがあるぜ」

「んああつ　？！」

宛がハズれたせいでルルカの機嫌はことん悪かった。

「文句ばかり言つてるんだつたら、ここから命綱なしのスカイダイビングにでも挑戦してみる！？　あの一万リードがなかつた

ら、『フライド・チキン』の燃料だつて補給出来なかつたんだからね！

大体あんた、いつも横槍入れてばかりだけど、たまには仕事をする私の身にもなつてみてよね！」

ギロリッ、と鋭い眼光一閃。

ひいつ、と小さく悲鳴を上げ、こんなやくはサツとフードの中に身を隠した。

……十五年前。

世界政府の科学者たちよつて起こされた科学技術の飛躍的発展『技術革新』によつて航空技術は劇的に発達した。

それまで地を這うことしか知らず、『空の国』に住まう者たちを羨むことしか出来なかつた人々は、ずつと悲願であつた大空を羽ばたく手段を手に入れた。

小型飛空船『エア・ライド』の発明に始まり、より大型の『エア・シップ』、戦闘用の『エア・バスター』、大型戦闘艦『バトル・シップ』と、次々に新しい飛空船が開発され、空の交通網は大いに賑わいを見せるようになつた。

先程ルルカが口にした『フライド・チキン』というのは、彼女が十五の誕生日に母親に買ってもらい、現在操縦している自身のエア・

「ライドにつけた愛称である。

『――ワトツリが空を飛ぶなんて、ステキじゃない！』

……と、彼女はフライド・チキンとは『空飛ぶ――ワトツリ』とこう意味であると思い込んでいた。

「ででで……でもよ……、ルルカは賞金稼ぎなんかじゃないだろ？」

剣だつて護身用程度に教わったもんだし……。

危険犯してまで楽に儲けるより、地道に本業でコツコツ稼いでいつた方が建設的だよ」

「でも先立つ物は必要よ。お金がなきゃ人探しだってできやしないわ」

ビビりながらも指摘することにやくに、依然として機嫌の悪いルルカはふうっと頬を膨らませた。

ただ、態度には怒りを滲ませてはいたが、ルルカは心のどこかで彼の指摘を冷静に受け止めていた。

確かに、こんにゃくの言つこと、もっともある。

彼女の剣は、自分自身を……そして、ほかの誰かを守るために教わつたものだ。

人を傷付けるため……ましてや金儲けの道具にするために教わつたものではない。

そのことはよく分かっていたが、彼女にはやらなければならぬことがある。

そのためには、何はともあれ最低限のお金が必要なのである。

だが……大空に飛び上がってから始めた何でも屋の仕事はなかなか来ない。来たとしても、格安の依頼ばかり……。

思うようにはいかない現状に、彼女も葛藤と苛立ちを感じざるを得ないでいた。

「あ……、見えて来たわよ。今日までの辺りにしまじょうつか」

夕焼け色に染まる窓の外、眼下に小さな川が流れているのに気付き、ルルカはとりあえず怒りを鎮め、ゆっくりとフライド・チキンを降下させ始める。

「はあ～～～。今日も今日とてサバイバル生活か……」

「……文句言わないでよね。私だってたまにはあったかいベッドで寝てみたいわよ」

一人の口から揃つて大きな、大きな溜め息が漏れた。

宿に泊まる持ち合せなど、もちろんあるわけがない。

今夜は……いや、今夜も野宿である。

肌身に刺さるような、冷たい風が肩を震わせる。

夕暮れ時ともなると、昼間の陽気はすっかり身を潜め、周囲には次第に肌寒い空気が立ち込め始めていた。

標高が高い山間の、しかも水辺となると、その寒さも尠更だつた。

「あ～あ、結局今日も野宿かあ……」

河原の少しだけ大きな石の上で丸くなり咳くじらにしゃべの口調は無気力そのものだつた。

寒さにめげるだけでなく、素足で川の中に入り水を汲むルルカの姿を、どうでもよきやうにこもんやりと眺めている。

「そ……外で寝るよつまだマシでしょ！」

そんな彼をよそに、ガタガタと身を震わせながら声を荒げるルルカ。

水中に浸かる両足の感覚は既にない。水を汲み終え一刻も早く陸に戻らうとするが、足がいふことを聞かず、全身を紅潮させ悶えていた。

「くつそー！この文明社会の中、なんだつておれたちはこんな過酷なサバイバル生活を強いられなきやなんないんだ？」

「お……お金がないんだから……。我慢してよね……！
大体、あんたは何にもしてないでしょーが！」

ようやく……どうにか陸に戻ることが出来たルルカは、愚痴ばかりこぼすこんにゃくに目をくれることもなく、タオルで足を乱暴に拭い始めた。

真っ赤になつた足は完全に悴み、しばらく温めてからでないと歩くこともままならないだろう。

それでも仕方がない。朝夕の食事の準備、片付けや洗面等には水が必要不可欠なのである。必要最小限の量は確保しておかなければならぬ。

先程の街で買うという選択肢もあつたのだが、エア・ライドの燃料補給や数日分の保存食を優先し買つていたら、手持ちのお金は一気に足りてしまつた。

幸い、この辺りの川はまだ文明に汚されることなく、清い状態を保つてゐる。水は透通つてゐるし、魚も住んでゐる。飲料水として十分に利用できるだらう。

「あれ？」

……と、足を温めながらぼんやりと川の流れを眺めていたルルカの視界の片隅で、不意に何かがきらりと輝いた。

視線の焦点をそちらに集めると、川岸の、先程ルルカが上がつた場所で、キラキラと小さく淡い輝きを放つ物が映つているのが見え

た。

手を伸ばし、水の中に突っ込んでそれを拾い上げるルルカ。

「へえ～、何これ！ キレイな石～！」

思わず声が漏れた。

上流の山の方から流れ着いて来たのか、ルルカが拾った小さな石はエメラルド色の淡い輝きを放つ、半透明の何とも珍しい石だった。それが夕焼け空の光を反射し、思わずうつとうと見とれてしまつほどの美しさを醸し出している。

「ねえ～！ 見て見て、こんなにやぐ～！ キレイだと思わない？」

「キレイ？！ キレイだって……」

興奮気味に問い合わせるルルカの声を聞いた途端、ずっとダレていたこににゃぐが、やおら勢いよく身を起こした。

そして、目をカツと見開いてキヨロキヨロと周囲を見回し始める。

「何だ何だ、こんな森の中に絶世の美女が現れたってのか？！ どこだ？！ どこにいるんだ、スイートマイハイー……」

「……んなわけないでしちゃうが。石よ、石。ほら～！」

一人で盛り上がるこににゃぐに呆れた視線を送りつつ、ルルカは

田邊に拾つた石を見せつけた。

途端、

「…………」

驚愕の表情を浮かべるとともに、絶句する。「…………」

ルルカの持つ石を見つめたまま、まるで自分が石にでもなったかのようだ。ピクとも動かなくなる。

「ビ……ビうしたの？」

突然、明らかに様子のおかしくなったことにやく見て、心配げに問い合わせるルルカ。

そんな彼女をよそい、こんなにやくはやがて口口口口と石の上でふら付き始めると、ガツクリとその場に崩れ落ちた。

「はああああああああ～～～」

何だよ何だよ……。美女じゃねーじゃん。ただの『ノリ』じゃん。

大袈裟な言い方してくれちゃって……。

お前、一体ビームでおれをガツカリさせりゃ気が済むんだよ……

「あ……あつやつ……。そりや悪かったわね」

勝手に落ち込む「ん」「やく」、
ルルカはヒクヒクと頬を引き攣ら
せた。

「でも、本当にキレイな石ね～。こんな石、見たことがないわ……。

もしかして……新種の宝石の原石が何かだつたりして――」

「……はあ。おめでたいヤツ

「……何ですって？」

「二、二也、おのれの、おおどじい、一、ひとつたん

新種の宝石ゲットおめでとう！」

「ふん……どうだか。

うわっ

「売り捌くつつつても、さつきの街に宝石店なんてありやしねえ

ぞ。

「宝石店があるよ! こんな都会に行くと、せめて飛ばねえといふ」

だ……誰か　　つ……

「そ……それもそうね……。燃料費を稼ぐためにも、また近くの街で仕事を探さないとね……」

た……た……たす……助けつ……

「……夢の一獲千金までの道のりは遠いな」

「ふう……。だ……誰か……！」

「……ん？ こんなちくへ、いま何か言った？」

「いや、聞つてねえぞ」

「だ……誰か……助けてくれ　　つ　　ー！」

『助けて　？』

はつきりと聞き取れたその言葉に声をハモらせ、一人揃つて顔を見合わせる。

弾かれたように声が聞こえた川の方を振り返ると、対岸との調度中央付近で、勢いよくしぶく白い水飛沫。

そして……水飛沫の中で両手をバタバタさせてもがく、一人の男の姿。

「た……助けてくれー！　ぼつ……僕は泳げないんだーー！」

「げえっ　ー！」

よつやく異変に気付いたルルカは思わず声を上げた。

「何だよ、こんな寒いのに水泳なんかして。変わったヤツだなー」

「馬鹿ね！　あれば溺れてる、っていうのよー」

呑気に呴く「んにゃく」対して、声を荒げる。

一体どういうわけで、こんな山奥の川で人が溺れているのか分か

らないが、今はそれどころではない。

川の中央付近の水深はかなり深い。溺れている男性の身長は判然としないが、少なくとも彼の足が着くような深さではないのだろう。

激しく手足をバタつかせながら、必死で顔を水の上に上げようとしている。

水温の低さは彼女自身も体感済みだ。

さりに、川の流れはかなり早いときでいる。じりじりしているうちに、男性の体力はどんどん奪われているだらけし、その体もみるみるうちに下流へと流されて行く。

「い……急いでフライド・チキンに戻るわよー！」

口調に緊迫感を漲らせながら立ち上がるルルカ。

……が、猝んだ足はあるでいつことを聞かず、盛大にその場にズッコケてしまった。

幸い、フライド・チキンを停めていたのは、川岸からほど近い林の中だった。

本当は川辺に停めることができれば一番よかつたのだが、川辺に敷き詰められた大小様々な砂利にそれを阻まれたのだ。

ルルカは未だ言つことを聞かない足を引きずりつつ、どうにかフライド・チキンまでたどり着く。

コクピットに飛び乗ると同時に、即座にエンジンを始動。

機体全体が、緩やかな振動とともに徐々に熱気を帯び始めた。

そして、

「行くわよ……！」

静かな気合とともに、一気に操縦桿を倒す。

次の瞬間、轟音、暴風とともにフライド・チキンは大空へ舞い上がりつた。

朱の中に次第に闇色の混じり始めた空を、風切り音とともに疾走する。

そして、あつといつ間に先程の川へ。

「おい、いねえぞ」

「流されたのよ。ビルに行つたのかな……」

しかし、先程の男性の姿は既にビルにもなかつた。

ルルカは川の流れとともに、フライド・チキンを下流へ向ける。

最初に男性に気付いてから、こうして戻つてくるまでに、時間的にはほんの数分しか経っていないが、川の流れはかなり早い。

既にかなり下流の方まで流されてしまつてゐるおそれがある。

それに、男性が一体どこから、ビルのくらゐ流されて来たのかは定かではないが、既に力尽き、沈んでしまつたという可能性だつてあるのだ。

フライド・チキンの高さを水面近くまで上げ、川底まで注意深く見回すルルカ。

仮に沈んでいたとしても、この短時間で引き上げることが出来れば、まだ助かる可能性はあるはずだ。

「ほんにこやく……あんたもちゃんと探してよ。美女じゃないからつて、知らんぷりしないでよね」

「わ……分かってるよ！ われだって、ふざけていいとさせつけないときの分別くらうつくわい！」

「そう。安心したわ。

……つて、あれ ？」

不意に……、川を下りながらルルカは周囲の異変に気付いた。

水の流れる音が次第に大きくなつてきてているのだ。

……と同時に、胸の中に蟠る、激烈な嫌な予感。

「も……もしかして……」

青ざめた表情を浮かべつつ、視線を前方へと向けるルルカ。

「な……何だよ……？　何だつてんだよ……？
いきなり変な声出すなよな……」

突然変わったルルカの口調に、不安げに表情を歪ませるこんにゃく。

どうやら、彼も認めたくはないその異変に気付きつつあるらしい。

ほんのちょっとと今までのせせらぎの音が、徐々に……轟々とした爆音へと変貌していくのだ。

そして、彼女たちの予想していた光景が……最悪の光景が眼前に広がっていた。

川はそれ以上先には延びてはいなかつた。

その代わり……川の終りに待ち受けていたのは、何もない、宙。

大量の水が荒々しく飛び散り、空に舞つていく。

『たつ……滝だあ　　つ　　!』

二人の口から揃つて上がる、大絶叫。

そして……このときになつてようやく見付けることが出来た。

滝の直前で白く上がる水飛沫、そしてその中にいる先程の男性の姿を。

「ル……ルルカ　！」

「分かつてる　！」

下流へ向かつて一直線にフライド・チキンを飛ばすルルカ。

滝壺に呑まれてしまつたら、もう完全にアウト。

男性の姿は未だ水面上にはあるが、滝壺との距離を考えればもう時間はない。

発見できたのは本当にギリギリのことだったといつていいだろう。

加速する翼が鋭い音を上げながら空を切る。

川の終焉は、もつ日前。

フライド・チキンの飛行速度と、川の流れる速度。

双方を考えても、男性が滝壺に落ちるまでに間に合つかどうかは本当に紙一重だ。

ルルカは前傾に身を乗り出して、フライド・チキンの速度を更に上げる。

当初豆粒程度にしか見えなかつた男性との距離が、みるみるうちに縮まっていく。

迫り来るエア・ライドの影に気付いたのか、男性も最後の力を振り絞つて水上の手をバタつかせ始めた。

もうあとほんの数メートル。

機体を傾けつつ、翼が水面に接着せんばかりに高度を下げるとともに、ルルカはハッチを勢いよく開く。

ベルトを外し、機体の外に身を乗り出して、すぐ目前まで迫った男性に思い切り手を伸ばした。

「くうつ……！」

しかし……もうあとほんの少し、届かない。ただでさえ安定して

いない機体の上から、必死でバタつかせる粗手の手を掴むのはまさ
に至難の業だつた。

だが、ルルカは諦めない。

どうにか男性の手を掴もうと、ピンと伸ばし切つた指先にまで神
経を集中させる。

幾度も繰り返される錯交。

そして……どうにかその手が、水中でもがき回る男性の手に触れ
た。

あと少しだ。

しかし、

「…………っ……！」

声なき叫び声が上がる。

ほんの一瞬……遅かった。

大量に飛び散る水飛沫とともに男の体が宙を舞つた。

「お……お……落ちたぞっ！ もうダメだあつ！」

「まだよつ！」

ルルカは素早くハッチを閉じると、フライド・チキンを流れ落ちる滝と水平に急降下させる。

かなり大きな滝だつた。滝壺からは、かなりの高さがある。

このまま落ちて滝壺に呑まれたら間違いなく命はないだろうが、この高さはむしろ好都合だつた。

急下降するフライド・チキンはあつという間に落下する男性を追い抜き、その落下先に先回りする。

そして、機体を水面と水平に立て直すとともに手元のスイッチを操作し素早く後部ハッチを開いた。

次の瞬間、

どん！

間髪置かずに機体全体を震わせる大きな衝撃。それと同時に高度がガクンと落ちた。

危うくバランスを崩し、機体が転覆しそうになるのを、必死で操縦桿を操作どうにか堪えるルルカ。

降下したフライド・チキンの腹部が、水面に触れた。滝から流れ落ちる水の急激な勢いに身を任せ、フライド・チキンは再び連なり始めた川を下り始める。

「はあ……はあ……はあ……」

極度の緊張感と集中力を酷使したルルカは、肩で息を切らせつつ、こんなにやべと顔を見合させた。

一体どうなったのか……ここまで必死で駆け抜け、半ば放心状態にある彼女たちは、現状をすぐには理解できないでいた。

しかし……。

「い……いててて……」

後部座席から届く、弱々しい男性の声。

瞬間、顔を見合せたままの二人の表情がパッと輝いた。

「や……やつたな、おこー。」

「う……うそ……。よかつた……」

ようやく安堵したルルカから全身の力が抜け、そのままズルリとシートにずり落ちる。

「うわあ、ギャリギリのところで聞こ合つたようである。

「いやー、はつはつはつはつはつは。
助かったよ。どうもありがと」

既にどつぶりと日の落ちた空の下、川辺で起こした焚火を囲み、
ルルカの向かい側で全身タオルに包まれた男性は、炎で身を温めながら呑気に笑い声を漏らした。

そのケロリとした表情は、つい先程まで溺れて死にかけていた者の表情とはとても思えない。

あの冷たい水の中を、大声を上げながら流され続け、既にかなりの体力を消耗しているはずなのに……である。

「なあーんか……思いの外ピンピンしてるわね」

「（あんだけ流されてたから、もっと弱り切つてると思つてたのになあ……）」

そんな男性を前にしてルルカと二人しゃくは困惑氣味に顔を見合させた。

救助したら、とにかく真っ先に街へ戻つて病院に連れて行かなれば……と考えていただけに、思い切り肩すかしを喰らう形になってしまった。街へ戻る手間が省けたのはよかつたが、ここまで元気な男の姿を見たら返つて戻つてしまつ。

「ええ。昔から体の丈夫さだけには自信があるんです。あ、でも

ただ単に丈夫なだけで、決して体を動かすのが得意だというわけではないんですが……」

そんなルル力たちの胸中をよそに、悪びれもせずに飄々とした様子で語る男。確かに、一見して殺しても死にそうにない強かさ……。というか図々しさを持ち合わせていそうだな……とルル力は思った。この調子だと、もしあの滝から落ちていっても死んでいなかつたかもしれない。

そう考えたら自分の行動はとんでもない徒労だったのではないか……。という考えが一瞬脳裏に浮かぶが、そう思ふと今日一日の疲れが一気にドッと溢れ出そうな気がしたので、ルル力は深く考えるのをやめることにした。

「ふーん、そう。ま……いいわ。

ところで、おっさん。一体何だつてこんな人里離れた山中の川に流されてたわけ？

「お……おっさん……。しつ、失礼な！ 僕はこれでもまだ25歳ですよ！」

「あー、はいはい。分かった分かった。悪かったわよ、おにーさん。

……そういえば、まだ聞いてなかつたけど、名前何ていつの？

「そりゃ……まだ名乗つていなかつたね」

言われて、男は思い出したかのように焚火の側に干していた鞆の中をゴソゴソと探し始め、そこから何かを取り出してルル力に差し

出した。

眉をひそめるルルカ。

びしょびしょに濡れた小さい紙片。そこに何か文字のようなものが書かれていた。

「インクが滲んでて全然読めないんだけど」

「名刺交換は社会人としての嗜みだから、一応ね。

僕の名前はアドル＝レイナーズ。ここから少し離れたル　トリアという街の新聞社でジャーナリストをやっているんだ」

「へえ～。ジャーナリストねえ」

ルルカはあまり興味もなさそうに氣のない声を漏らした。

アドルと名乗った男を改めてマジマジと眺めてみる。

線の細い華奢な体付き、色白の肌、やさ顔に掛けた丸メガネがやけによく似合っている。確かにペンやカメラを持たせたら様になるかもしね。ジャーナリストと言われたら彼によく似合いそうな職業である。

「私はルルカ＝シエル。何でも屋よ」

「ほつ……何でも屋ですか」

聞いてアドルは目を丸くした。その反応から察するに、どうやらルルカがアドルの素性を聞いて思い描いたときのものとは全く真逆

のイメージを抱いたらしい。

「もしかして空師団の方ですか？」

「ううん、フリーの何でも屋よ」

アドルの問い掛けに、ルルカはやんわりと首を横に振った。

空師団……とは、言つてみれば空で起こつた様々な困り事、厄介事を組織ぐるみで請け負い、商売とする何でも屋、ギルドのようなものである。

エア・ライドの操縦と簡単なテストに合格すれば出来れば誰にでも入ることの出来る組織であり、確かに需要も多く仕事を安定しているため、世間一般で何でも屋といえば、まずこの空師団を思い浮かべるだろう。

だが、世界各地に支部を持つ空師団は細かい規則や活動範囲に縛りがあり、その行動が大きく制約されてしまつという面もあるので、どちらかといえば自由気ままに空を飛びながら仕事をしたい……といつ氣持ちの強いルルカは属していなかつた。

「へえ、フリーの……」

珍しいものを見たかのように声を漏らすアドル。空師団が空軍や空賊と並び、空の一大勢力として君臨する今の時代、確かにルルカのようなフリーの何でも屋ということのは珍しいかもしれない。

やおらアドルはキヨロキヨロと周囲を見渡し始める。そして田代とく保食や溜め置きの水等のサバイバル・セットを発見した。

「そりゃ……だから宿に泊まるお金がないほど貧乏なのか」

「あん？！何ですか？」

「いえ、組織に捕らわれることなく自分の信念の下に行動してらして」立派だと言つたのです

「…………」

ボソリ……ヒアドルが口にした咳きをルルカは聞き逃せなかつたが、無駄にキリッとした表情を浮かべ、アドルは真っ向からそれを否定した。その自信満々な態度を前に、ルルカは閉口せざるを得なかつた。

「（なあ～んか胡散臭そうな兄ちゃんだな……）」

フードの中から「ソシッヒルルカに耳打ちをする」としゃべ。

何だか面倒臭そうな人物と関わり合になつてしまつたなあ……
と思うと、先程押し殺したはずの今田一田の疲れが再びドッと吹き出しへきやうであった。

「あ、そうだ！そりいえばルルカさん、お食事はもうお済みですか？よろしかつたら、助けていただいたお礼に夕食でも御馳走したいんですけど……」

「ほつ、本当？！」

突然の、思いがけないアドルの提案。

瞬間、吹き出しそうになつた疲れのことなどすっかり忘れて、両の瞳をぱいぱい輝かせ始めるルルカ。

忘れてしまいそうになつてはいたが、仮にもこからは彼を助けた命の恩人なのである。本来それくらいのお礼をされてもおかしくないはずだ。

「だつたらお勧めのレストランがあるんだけど……」

田をキラキラとさせながら、何でも屋を始めてから密かに作成し続けていた『一度は行つてみたい三ツ星レストランガイド』のページをめぐり始めるルルカ。

お礼をしてくれる……といつのなら、どうせなら自分では絶対に行くことのできない高級レストランを選んだ方がいいに決まっている。この機会を逃したら、もしかしたら一生行くことが出来ないかもしれませんのだ。

少し……というか、大分厚かましいような気もしたが、何せこちらは命の恩人なのだ。ちょっとくらい強欲に出てもバチは当たらないはずである。

「いじやとばかりにたかる気だな……」

超一流の高級レストランばかりが記されているノートのページを、すっかり浮かれ気分でめぐるルルカの姿を見て、こんなやくはあきれ顔で呟いた。

「なあ～んだよ、お嬢ちゃん。別に客として来なくても、あんたのことはちや～んともてなしてやるわ」と思つてたのによ～！」

「そうですよ～！あなたはこの店の……いや、この商店街の英雄なんですから～！」

「もちろんお代なんていらないよ。心配しなくとも、あんたには『あの野郎』が食つた山菜定食みたいな安っぽい飯は出さないからさ～！料理長特製のディナーを、た～んと食つて行ってくれ～！」

「…………」

ルルカは不機嫌だつた。

仏頂面で、淡々とこのレストラン最高級ディナー『川魚定食DXセット』を口に運ぶ。

一体何がDXなのかといふと……普通の定食ならばレイクトラウトのフリットが三つしか入つていないが、DXには倍の六つ入つてゐる、さらにデザートには『料理長手作りの男プリン』、おまけに食後にはサービスの『料理長自家製ほうじ茶』までついて来る。

『これでDXと言わずに何と言つ～～』

……とは、一人分の定食を運んで来たとき、ここに料理長が力の

限り叫んでいた台詞である。

「いや……よかつたですね、ルルカさん！ 川で財布を流されていたことに気付いたときにはどうしようかと思いましたが……。タダでこんなに豪勢な食事にありつけたなんて、ラッキーとしか言いようがありませんよ！」

……ところで、ルルカさん。この店の店員たちと親しきようですが……面識があまりなんですか？」

「……別に」

無駄にテンションを上げているアドルに冷めた視線を送りつつ、ルルカは素っ気なく答えた。

黙々とナイフとフォークを動かし続ける。

「……」

「……」

.....」

しかし、ついに耐え切れずテーブルに突つ伏して頭を掻き筆り始めた。

こんなはずではなかつた。

途中でエア・ライドが不調さえ起らなければ……アドルの財布
が流されてさえいなれば、今頃きっと超一流レストランの最高級
ディナーを口にしているはずだったのだ。

アドルを助けるため、あの短時間で猛疾走したフライド・チキンの機体には予想以上の負担が掛かっていたらしい。

エンジンから黒い煙が上がっていることに気が付き、昼間の街まで
どつにか戻つて来たときには、既に街唯一のエア・ライドショッピ
ングセンターを下りすほどの中になっていた。

修理が出来なければ、超一流レストランのある街まで飛ぶことは
出来ない……と、泣く泣くこの街のレストランで手を打つと腹を
括つたのはいいが……。

適当な店を見付けて入ろうとしたまさにその直前、夕食を奢つて
くれるはずのアドルがいきなり、

『さ……財布が……！　ぼ……僕のなけなしのお金が入った財
布がないっ……』

などと騒ぎ出したのである。

どつやらずつとズボンのポケットの中に入れていたらしきのだが
……あの激流に揉まれたのでは流されていて当然である。気付くの
が遅すぎた。

ルルカもどうにか絞り出しきれば多少のお金はあつたのだが、
エア・ライドの修理のことを考えれば、とてもではないが夕食代に
回すことなど出来ない。

そんなわけで、一人と一匹して大通りのど真ん中で完全に途方に
暮れていたといふ……いきなりどこかの店の従業員と思しき男性に
声を掛けられた。

その男性というのが、昼間ルルカが捕まえた食い逃げ犯の被害に
あつたレストランの従業員で、多くを語らずして事情を察してくれ、

店に招いてくれた……というわけである。

九死に一生……という気分であつたが、腹の中が完全に超高級レストランのティナーを食べるモードにセッティングされていたルルカは、すぐには気持ちを切り替えることが出来なかつた。

「うん……美味しい！ 特にこのフリットなんて最高ですよ！ タダで食べる食事はどんなに安い食材でも美味しく感じてしまつから不思議ですよね」

「……ちょっと黙つて食べてくれない？ そんなに騒がれたんじゃない、折角の美味しい料理も全然味わえないわよドチクシヨー」

人の氣も知らずに大はしゃぎで定食を貪るアドルにこめかみを引き攣らせるルルカ。

「おっと、これは失礼しました。一口ぶりにまともな食事についたもので、つい……」

「…………」

「ここに来るまでに何となく予想はついていたが、どうやら彼もかなり貧乏なようである。

エア・ライドも使わず、一人でこんな山間の街にまでやって來たのだというのだから、それも納得である。

これでは最初から期待する方が馬鹿らしかつた……と、ルルカは大きな、大きな溜め息をつきつつ、再びナイフとフォークを動かし始める。

「ところで、ルルカさん。僕がいつしてないお金をまたこうじてまでルルカさんをお食事に誘ったのは、お礼……というのももちろんですが、実はもう一つお願いがあるからなんです」

「お願いい？」

突然のアドルの発言にナイフとフォークを動かす手を止め、あからさまに胡散臭いものを見る目をしてアドルを見つめるルルカ。

命の恩人に対しても願い……というのも随分厚かましいなあ、と一瞬思つたが……。

すぐに違つと分かつた。

「ええ。実はですね、僕がこうしてルートリアからこんな山中で田舎村まで来たのは理由があるからなんです」

「ち……ちょっと、そんな大きな声で……！　お店の人こっち睨んでるじゃん！」

アドルの無神経な発言にルルカは慌てて店員たちの顔を窺うが、彼はお構いなしに話を続ける。

「これを見て下さい」

言つてテーブルの上に取り出したのは、一枚の写真。

これまた名刺と同様びしょびしょ濡れてしまつてゐるが、今度は一体何なんか判別することが出来た。

写真一面に写された、白一色。

雲を写したものである。

しかし……。

「……何これ？」

「僕が十日ほど前に撮影した『大皇雲』の写真です」

「いや……そりゃ見れば分かるけどさ……。だから何なの？」

「ここをよく見て下さ」

写真の一辺を指差すアドル。一面白一色の写真に特別注視すべき点はないように思われたが……。

ルルカは眉間に皺を寄せつつ、写真に顔を近付ける。

「何か影になってるわね」

「ええ、そうなんです！」

「だから何？」

「えええええっ　！？　ルルカさん、まだ分からないんです
か　！？」

ひくつ……

やたら仰々しく声を上げるアドル。本人にそのつもりはないのだろうが、まるで小馬鹿にしたようなそのリアクションに、ルルカの額にくつきりと一筋の青筋が浮かんだ。

どうやら彼には、人に氣を使ったり、空氣を読んだりする神経はないらしい。

まさに『無神経人間』……といつていいだろ？　自覚がなさそつなのが厄介なところである。

「世界最大種の大雲『大皇雲』といえば人の手が及ばぬ遙か天空の果てに位置する神聖不可侵の領域……。

数々の伝承、伝説が残り、多くの謎を秘めた未知の世界です。

その大皇雲の中に垣間見える、謎の影……。

果たして、その影の正体は何なのか……大皇雲の中に、一体何が隠されているのか……。

いいですか　？　僕はジャーナリストです。

もしもこの影の正体を突き止めることができれば、またにビッグスクープになると思いませんか　？』

「ふ、ふうん……」

やたら熱弁を振つアドルに対し、ルルカは写真を見つめながら氣のない声を漏らした。

「……要するに、あなたのお願ひって、この影の正体を突き止め
るのを手伝つてほしいわけね？何でも屋である私への仕事依頼
として」

「その通りですー！」

ようやく理解したルルカに、アドルは満足げに頷いた。

「僕に扱えるエア・ライドさえあれば、こんなお願ひをしなくて
もよかつたんですが……。

うちの会社にもちゃんと取材用のエア・ライドがあるんですけど、
どうも僕のワイルドな操縦にエア・ライドの方が耐えられなかつた
のか、ここ一週間で三機も壊してしまつて……社長から搭乗禁止処
分を喰らつてしまつたんです」

「…………」

「（お……おこ、フライド・チキンが故障したのって、ここつの
せいなんじや……）」「

「そ……たすがにそんなことはない、って信じたいけど……」

慌てて耳打ちする間にやぐれ、極力冷静を装いつつ返すルルカ。

機械と極端に相性の悪い人間はたまにいるが、アドルが乗つてい
たのはフライド・チキンの後部座席。いくらなんでもエンジンにま
では干渉できないはずである。

……どちらにせよ、フライド・チキンが不調を起こしたのはアド
ルを助けるためだったのだから、彼のせいで故障したと言えなくも

なかつたが。

「ですが、エア・ライドが無ければまともに取材活動も出来ません！ 今日少しでも大皇雲に近付こうと山登りの最中、うっかり足を滑らせて川に流されてしまつて、改めてそのことを痛感しました」

「げつ！ ……ってことは、あんた山の方から流されて来たつてわけ？！」

「ええ、そうですが？」

「一体どんだけ流されて來たのよ……。普通の人だつたら完全に死んでるわよ？」

「（…………）いつはやつぱり滝から落ちても死んでなかつたかもしれねえな」

「……助けたのは大失敗だつたわね」

「え、何か言いましたか？」

「う……ううん、何でもない！」

「……で、何だつけ？」

「はい。ですので、お願ひです！ 僕と一緒に田舎してほしいんです。

大皇雲の連なりによつて出来る未知の領域、『白嶺海』を……」

「あ……そだつたわね。」

うへん、ビツじみつかな……」

ルルカは頭を悩ませる。

確かに面白そうである。

面白そうではあるが、アドルと一緒にいたらとにかく疲労が溜まつてしまふ。

それに、アドルが支払う報酬にはあまり期待できそうにない。

正直言つて、この依頼、得より損の方が大きいであろうことは明白である。

しかし……。

アドルのバックには会社がある。それがいくらロートル会社だつたとしても、一個人に支払うだけの一端の財産はあるはずである。

仕事に成功して本当にビッグスクープを得ることが出来れば、それこそ一攫千金も夢ではない。

ルルカはニンマリと意地悪げにほくそ笑んだ。

「……よっしゃ！　いいわ。その依頼、引き受けてあげるー！」

閉店時間が近付つつあるのか、店員たちは厨房の掃除を始めている。

店内に残された客はルルカとアドル以外には見当たらないが、店員たちは一人を急かすような様子もない。

一人でお茶を啜りつつ、まつたりとした時間を過ごす。

「……てかわ、その写真一体どこで撮ったの？」

「あ、これですか？　これは先日、夕焼け島トワイライト・アイランドへ慰安旅行に行つたときに撮ったものです。エア・シップに乗つているときに、たまたま上空に大皇雲が現れたんで、珍しいものだし、つい……ね」

「ふうん

一瞬ルルカは、普段からカメラを持ち歩くなんて見掛けによらず仕事熱心なんだな」と感心するが、よくよく考えてみれば旅行にカメラを持つて行くのは当たり前のことである。

一瞬でも感心して撮をした……と考えを改める。

「ところで、ルルカさん

「ん、なに？」

「ルルカさんは一体なぜ何でも屋になつたんですか？」

突然の何氣ない質問に、ルルカはキヨトンとした表情を浮かべた。

思い返してみれば、依頼人から改めてそんなことを聞かれるのは初めてである。

確かに、自由主義集団である空師団のテンペスター一員というのならともかく、こんな年端もいかない少女がフリーで何でも屋をしているとなれば、何かワケありなんだろ？と理由を聞きたくなるだろ？

ルルカはポリポリと後ろ頭を掻きながら、

「あー……、うん。基本的に親が放任主義だつたから、早く一人立ちしたかった……つていうのもあるんだけど……。ちょっと人探しをするために……ね」

「人探し……ですか」

「うん」

椅子にもたれ掛り、ルルカは遠い目をして宙を仰ぐ。

「実はね……お父さんを探してるんだ」

追憶の中に父の……そして家族の顔が浮かんだ。

「私がすうじく小さい時にいなくなつちゃつたんだよね……。

それまでは私と、お父さん、お母さん、それから弟の家族四人で普通に暮らしてたんだけど、ある日突然……本当にいきなり、ね。一体どうしていなくなつちゃつたのかは分からんんだ。小さいときのことだつたから、その当時の記憶も曖昧だしね……。

あ、でも母さんと離婚したんじゃないっていうのは確かよ。母さんも必死でお父さんのことを探し回ってるんだから。

だけど母さんも、近所の人も、誰もお父さんがいなくなつた理由を知つてゐる人はいないみたい……。

どこに行つちゃつたのか、手がかりだつて何もなかつたんだけど……でもやつぱり大切な家族だし、この世界のどこかにいるんだつて思つたら、居ても立つてもいられなくなつちゃつて……ね」

「それで、何でも屋をしながら世界中を探してらつしゃる……と
ういわけですか」

「そ。だから活動範囲に縛りがある空師団テンペスターには所属してないつて
わけ。分かつてくれた？」

「ええ……」

ずっと黙つてルルカの話に耳を傾けていたアドルは、深く、深く頷いた。

「いや～、立派です！　お若いのにそんなに固い決意と志を持つてらつしやるだなんて……。

そうだ！　今回の報酬は、新聞の尋ね人欄にお父さんのことを

掲載する…… ここに何のせがいがこいつ
？

「現金以外は許さん ！—！」

『ルルカはもうお姉ちゃんなんだから、ちやんと
ひと手てあげなきゃいけないんだよ』

最後に父と交わした言葉は……そんな会話だった。

あれは……もう何年前の出来事だっただろ？

十年以上前のことか……、数日前か……はたまた夢の中での出来
事であったか……。

記憶がさつきしてこなかつた。

心が……。

体が……。

その出来事について触れることを頑なに拒んでいた。

ただほんきりと覚えていたことは、自分の腕の中で震える小さな男の子の存在と……、田の前に佇む男の、蛇のように邪悪に歪んだ笑みだけである。

そっちへ行っちゃダメ！

あのときは自分は、やつ叫んでいたのだろうか。

いや……もしかしたら、恐怖に声を出すことを邪魔され、叫ぶことなど出来なかつたかもしれない。

いつの間にか自分の側から遠く離れてしまっていた男の子の前に、あの蛇のような笑みを浮かべた男が立ち塞がつていた。

その左手に……ギラコと鈍い輝きを放つ凶刃を携えて。

気が付いたときには、何も考へず、ただひたすら必死になつて走つていた。

男の子を助けようと、無我夢中になつて手を伸ばす。

たが……その手が届くことはなかつた。

代わりに赤い飛沫が舞い、伸ばした手に降り注ぐ。

その体が宙に舞い、まるで映画のワンシーンをスローモーションで見ているかのように、ゆっくり……ゆっくりと、自分の田の前に落ち、転がる。

男の子の体から吹き出した赤い飛沫が、自分の体にも纏わり付いた。

どんなに声をかけても……どんなに泣き叫んでも……どんなに搖り動かしても……男の子の固く閉じられた両の瞳はもう決して開くことはなかつた。

ただ……ただ、冷たい感触だけが手の中に残された。

そして……男は今度は自分の田の前に立ち塞がつた。

男が湛える邪悪な笑みは、今度は間違なく自分に向けられていく

た。

男と目が合ひつ。

鋭い殺意を湛えた眼光に見据えられ、体中が凍り付く。

まるで蛇に睨まれた蛙の「」とく、極限の恐怖に支配された体はピクリとも動かなかつた。

振りかざされた凶刃が、眼前に迫り来る。

そのとき、意識はダークアウトしていた……。

その12

「はあつ……はあつ……はあつ……」

激しい動悸とともにルルカの意識は覚醒した。

全身に嫌な汗を搔き、服がグッショリと濡れている。

鼓動が高鳴っていた。

胸の奥がいつもよりずっと早いペースでドクン……ドクンと脈打つていて分かった。

「…………」

それでも、窓に掛けた遮光カバーの隙間から挿す僅かな月明かりに安心感を覚え、現実に引き戻されると、少しだけ落ち着きが戻ってきた。

シートから身を起こしつつ、額の汗を拭い去る。

ふう……と大きく息をつきつつ、遮光カバーを開け放つと、夜空には満天の星空が広がり、おぼろげな光がルルカの顔を青白く照らした。

「だ……大丈夫か、ルルカ？ 汗びつしょりだぜ……」

不意に、枕元で寝ていたはずのこんなにやぐの声が届く。

「ひやり起しちゃつたらしー。

「うん……、大丈夫。ちょっと……怖い夢を見ちゃつただけだか
ら。

「めんね、起しちゃつて……」

「……またあの夢か？」

「…………」

心配げに問い合わせる人にやぐ。

ルルカは静かに目を伏せた。

あのとき体験した、どんな悪夢よりも辛辣な現実。

それは十年以上経つた今でさえ決してルルカを解き放つことなく、
その心を束縛し続けている。

決して忘れるひとの出来ない……いや、忘れてはならない追憶。

そして……今でもはっきりと覚えている、遠い日の父との約束。

一つが折り重なつて度々ルルカの夢の中に現れた。

その度いつも、深い……深い罪悪感と、自分自身に対する嫌悪感

に見舞われる……。

しかし……いつまでも暗い過去に捕われ続けて、後ろめたい気持
ちにばかりなつてなどいられない。

ルルカは心配するこゝにやぐに向けてパッと明るい表情をつくつ
てみせた。

「あ～いじょうぶだつて！ 多分ちよつと疲れてただけだか
ら。

ほり、今日一日ずっとバタバタしてたじやない

「う～ん……。まあ確かに近年稀に見る荒ただしさだったな……」

「でしょ？ だから変な夢なんて見ひちゃつたのよ。
さ、くだらないこと気にしないで、もひつ寝ましょ！ 時間が
もつたないわ。

明日から仕事も始まるんだし、今日はしつかり休んでおかないと
ね」

言いながらルルカはシートに倒れ込み、何事もなかつたかのよう
に再びその瞳を閉じた。

：

遠い日の、忌まわしき現実。

あの日から……今日まで、ルルカは気丈に生きてきた。
決して弱みは見せないよ!……涙など見せなによ!に、心に強く
誓つて、大空を駆け巡つて來た。

でなければ、過去を乗り越えることなど出来ない……と。

父を見付け出し、再会することなど出来ない……と。

しかし……

「父さん……、ユーマ……」

再び深い眠りの中に落ちたルルカの頬に、無意識の中で一筋の雲
がこぼれ落ちた。

その1

あの雲の中には、悠久の都が存在する。

あの雲の中には、空の女神リーアノンの使いである巨大な竜が棲息している。

大皇雲には、古くから様々な伝説、伝承が語り継がれてきた。

地上から完全に隔離された、遙か天空に悠然と浮かぶ雲、『大皇雲』。

世界最大種の大雲である。

この大空に存在するどんな雲より高い天に浮かび、どんな雲よりも大きく、分厚い雲。

一つでさえ一国の領土に比肩するのではないかといつほど大きいのに、広いこの世界には、大皇雲が繋がり、重なり合つて出来る大領域がある。

全世界に七か所存在するといわれる、大皇雲の連なりによつて出来る不動の空域『白嶺海』。

開拓者たちによつて初めて白嶺海が発見されたとき、その圧倒的な広さを見て、ある冒険者が言つた一言が今でも残されている。

『大空に白い海が広がつてゐる』

……と。

あまりに高く、決して人が足を踏み入れることの出来ない未開の地。

その中に一体何が隠されているのか……。

技術革新によつて大空へと羽ばたく術を手に入れた人々は、躍起になつてそれを探ろうとした。

しかし、初めて白嶺海の探索に出発したエア・シップは、その空域に進入した途端、圧倒的な質量をもつ巨大な雲の塊に押し潰され、敢え無く木端微塵に大破してしまつた。

彼らは無断で空の女神の聖域に踏み入るつとし、その逆鱗に触れた。

だから、命を落とした。

あそこへ、人間は近付くことは出来ない……。

白嶺海は地上の人間たちから神聖、不可侵の領域とされ、大いに畏怖され、同時に敬われた。

そして……冒険者たちの間で密かに囁かれる、伝説がある。

未だ何者にも確認されたことがない、第八の白嶺海が存在する……と。

白嶺海の中で最も大きく……最も高い場所にあるとされるもの。

それこそが、空の聖域『蒼雲宮』。

空の女神が住まつとされるその神聖な領域の存在を知る者は少ない。

その2

山間の町の日の入りは予想以上に早かつた。

遮光カバーの隙間から差し込んで来る強い日差しのせいで、ルルカたちはいつもより早く目を覚ましていた。

結局宿に泊まるお金もなかつたルルカたちは、町外れに停めていたフライド・チキンの中で眠りに就いた。

思えば何でも屋を始めてから、宿に泊まつた回数よりもフライド・チキンの中で眠つた回数の方が多いかもしない。

おかげでシートの上で眠ることにもすっかり慣れ、途中で目が覚めてしまつたもののぐっすり眠ることが出来た。

「おつはよ、アドル。

昨日はちゃんと眠れた？」

いつものように保存食で朝食の準備をしていくと、少し遅れて起床したアドルが眠気眼をこすりつつ近付いて来るのに気付き、声を掛けるルルカ。

まだ世間一般的な起床時間には少し早い。どうやら彼も山間の早い日の入りと強い日差しのせいで、早めに目が覚めてしまつたらしい。

「ええ……。おはよっ」やれこます、ルルカさん。

念のため野外テントを持って来ていく正解でしたよ……。

いや……、本当に流されてなくてよかったです

欠伸を噛み殺しつつアドルは言つた。

基本的にエア・ライドは一人乗りの造りになつていて、後部座席で彼を寝かせる……という選択肢もあつたのだが、不慣れな人間には固いシートの上で眠るのはキツイだろうし、いくら前後部の座席が隔離されているとはいっても、男女が同じ機体の中で眠りに就くのも少し抵抗がある……。

だから、調度アドルも簡易テントを持つていたようだし、彼はその中で眠つてもらうこととした。どうやらアドルも最初からそのつもりだつたらしいが。

「それにしても……ルルカさんは本当にたくましいですね」

朝食を準備するルルカの隣にちょこんと腰を下ろし、感心したようにはぐくアドル。

近頃では男はもちろんのこと、若い女の子でも料理が出来ないという子が多いらしいが、そんな時分、限られた保存食で日々とサバイバル料理をするのだから、アドルが感嘆の声を漏らすのも無理もないことだらう。

「そう？ ま……この年で一人立ちじよつと思つたら、色々知つとかないと生きていけないしね」

保存食で作ったベイクドハムとチーズのサンドwichと、野菜シチュー。

それぞれを皿に盛り付けてアドルに差し出すルルカ。

「うーん……美味しそうなニオイだ！
死ぬほどお腹が空いていると、多少美味しくない料理でも美味しい感じしてしまうから不思議ですよね！」

「やつぱ返せ！」

「じ……冗談ですよ、冗談！ 勘弁してあげて下さい！」
「……そうだ！ 今度ルルカさんのことを僕の新聞で紹介してあげますよ！」

今どきこんなサバイバル生活を送る少女なんて珍しいですからね」

「た……頼むからそれは勘弁してちょうだい」

もしもスクープが掴めなかつたら、おそらくそのネタで誤魔化す氣だらう。

本当に、抜け目がない……というか、図々しい……というか、転んでもただでは起きそうにない性格をしている。

怒りもすっかり失せたルルカは思い切り脱力した。

「……ま、いいわ。『飯食べてフライド・チキンのエンジン直したら、早速出発よ。
そんなネタ使われたら、たまんないわ。さつさとビッグスクープ見付けに行きましょ』

その3

アドルから受けた依頼の内容は、とどのつまりは取り敢えず大皇雲に近付きたい……といったものである。

ただ自分で近付くことは出来ないからルルカのエア・ライドで大皇雲を搜索、接近してもらい、調査をしたいらしい。

期限は三日。報酬は一日当たり五、リード。

正直言つて、ルルカにとっては楽な依頼だった。

彼がビッグスクープを得ることが出来るかどうかは置いておいて、大皇雲さえ見付けることが出来れば報酬は発生するのだから。

しかし、大皇雲はそこら辺に浮いていて、いつでも見られるようなものではない。先日アドルが言っていた通り、本当に珍しいものの領域である白嶺海を目指した方が手っ取り早い。

だから、どこにあるのかも分からぬ大皇雲を探すよりも、不動の領域である白嶺海を目指した方が手っ取り早い。

全世界に七か所存在すると言われる白嶺海は、不動の領域であるがため、その場所も明確に特定されている。

ただ、もちろん白嶺海の中に入る……などという大それたことは出来ない、といふか不可能である。

その空域に進入すれば、圧倒的な質量をもつ雲塊に機体が押し潰

され、粉々になってしまったことは先人たちが経験済みだ。

だから、とりあえず白嶺海の下までやつて来たら、適時にその周辺をグルグル飛び回つてみるつもりである。

白嶺海はとにかく広い。とてもではないが、一町三町でその範囲を掌握できるものではない。

だが期限である三日間目いつぱい飛び続ければ、スクープは発見できなくともさすがにアドルも納得するだらう。

「ひつして晴れて依頼終了……といつわけである。

ただ、ビッグスクープがなかつたときの代わりのネタとして自分のサバイバル生活のことを載せられることだけは断固阻止しなければならないが。

「うーん……やっぱり空は気持ちいいわね　！」

蒼天の下、フライド・チキンを操縦するルルカは上機嫌に呟いた。

久し振りのまともな仕事依頼。しかも内容は楽勝。

報酬は安いが、仕事内容には見合つだけのものである。

さりに、期限である三日分の宿泊代、飲食代、さらにもフライド・チキンの整備代は、死闘の末相手持ちといつことで話をまとめた。

これで心おきなく空の旅を満喫できるといつものである。

話がまとまつたとき、アドルは泣いていたが。

「でもよ、よかつたな。フライド・チキンの故障も大したことないでよ」

フードの中からこわいながらひょこっと顔を出してくる。

アドルが側にいるときは、ずっと姿を隠していたから、こうして面と向かってまもとに会話をするのは何だか少し振りのよくな気がした。

後部座席にはアドルが座っているが、伝声管を繋がない限りこちらの会話が届くことはないから、こうしてフライド・チキンを操縦している間は気兼ねなく彼とも会話をすることが出来る。

「うん、そうね。こうして直せたのも、ひとえに私の整備技術の賜物ね！」

ルルカが上機嫌だったのは、お金なしでフライド・チキンを直すことができたから……というのもあった。

朝食後、町のエア・ライドショップまで行き、エンジンの不調を伝えたのだが、どうやら単純な整備不良が原因だったようで、大した故障ではないことが判明した。

だから、これまでずっと一人でエア・ライドでの旅を続け来て、ルルカも機体やエンジン周りの簡単な整備くらいは自分でも出来るようになつていて、修理道具だけ借りてどうにか自力で直すことができた。

もちろん修理代は掛かっていない。もしも発生していたときは修理代はアドルにせびるつもりであったが。

「H場のおっちゃんが、まめに整備しねーからHンジン不調起こしたりするんだって言つたぞ」

「う……うそこわね！ ジれからはちゃんとすみつけば

「ほんとかなあ。ルルカ、飽きっぽいからなあ。果たしていつまで続くことやら……」

「失礼ね。仕事と生活に関わることなんだから、ちゃんと続けていくわよ」

『ルルカさん。今からジンを田指すんですか？』

すると、不意に伝声管を通して後部座席のアドルの声が伝わってきた。こんなにやくは慌てて声を潜める。

「あ、やうじえまだちゃんと説明してなかつたわね。

取り敢えず、ここから一番近くにある北の白領海を田指して飛んでるんだけど……。その前に一回『ターミナル』へ寄りひとつ思つてるわ

『ターミナルへ？』

「そ。これから二日間一文無しで旅なんて出来ないでしょ？
大きな街へ行くのもありだけど、ちょっとでも早く白領海へ行こうと思つたら、空を飛び続けて行つた方がいいかなって思つてね」

『なるほど。確かにそれもやうですね。
でもそつなると、ターミナルへ寄る用件とこののは……』

「え。アドルにお金を下ろしてもいいだため」

『……ですよね』

伝声筒からアドルの涙交じりの声が響いた。

その4

雲一つない晴天の空の下を、フライド・チキンは快調に飛び続ける。

眼下にはしばらくは長閑な街並みが広がっていたが、やがてそこを通り過ぎると殺風景な荒野が現れ始めてきた。

荒野一帯に広がる、大小様々なクレーターや、エア・バスター、バトル・シップの無残な残骸の数々。

一年前に終結を迎えたヴァングレイド戦争の遺物である。

この世界では幾度となく凄惨な争いが繰り返され続けてきた。

最初の戦争が起ったのは……いつだつたらうか。確かそれは時すら忘れるほど大昔の出来事だった。

この世界の歴史は……血塗られた戦い、憎しみ深き戦争の歴史である。

世界には、ルルカたち人間のほかにも、同じような知的生物が存在していた。

人間とは似て非なる、異形の姿を持つ者……『亜人』。

古くには人間と亜人の両種族は争うことなく共生の道を歩んで来ていたらしいのだが、所詮は異種族。最初から相容れることなど出来なかつた。

小さな諍いは、やがて大きな争いへ。

人間と亜人は長きに渡り争いを繰り返してきた。

それは何十年にも、何百年にも及んだ。

ある戦いでは人間が有利に戦局を進め、またある戦いでは亜人が勝利を收め……。

果たして、この戦いが本当に終焉を迎えることなどあるのだろうか……。

あるいは、どちらかの種族が滅びるまで戦いは繰り返され続けるのかもしれない。

人間国家と亜人国家の調度中間付近に位置する領域『ヴァングレイド』で起こつた、もう何度目になるのか数えるのも馬鹿らしくな

る戦争は、一年前によつやく終焉を迎えた。

終焉……といつても、一時的に休戦しただけで、完全に両種族の
諍いが消えたというわけではない。

本当に……本当にたくさんさんの尊い命が失われた。

家や故郷をなくした者……家族を亡くした者……そして、命を失
った者……。

悲しい思いをした人々はたくさんいる。

それは人間だけに限らず、亜人もまた然りであった。

今でも両種族間の差別感情は残り、深い憎しみは募り続けている。

戦争を知らぬ者……真の平和の意味を知っている者など、この世
界には存在しないのかもしだれない……。

「はああああ～……。

たまにはこんなまつたりタイムも必要よね～……」

運ばれてきたアイス・カフェオレをストローで啜りつつ、リラックスマードのルルカはフウ～シと大きく息をつく。

喫茶店内には空調から流れ出る冷気がほどよく立ち込めてくる。

所々に設置された観葉植物の緑が旅に疲れた目に潤いを与える、優美でしつとりとしたクラシックBGMが心に安らぎを与えてくれた。

カラ～ン……というグラスと氷がぶつかり合ひ涼しげな音が耳に心地よく響く。

「（よく言つぜ……。）これが基本おれたちの日常じゃねーか。昨日の暁までずう～……つと喫茶店でダラダラしてたのを、もう忘れたってのか？）」

すっかりだらけているルルカに、じと～っとした視線を送りつつ、こんにゃくは呟いた。

しかし、かく言つ彼もテーブルの隅っこで必死になつてチーズを頬張つっている。

人目に触れる危険を冒してまでこんにゃくが人前に姿を現すのは、大好物のチーズを食べるときか、大好きな美女を眺めるときのどちらかのみ。

口では悪態を付きながらも、大好物のチーズを口に運ぶその表情は上機嫌である」と明らかであった。

「あら、あれは仕事中よ。食い逃げ犯を捕まえるために張り込んでたんだもん。

これは休憩中。全然心の安らぎ度が違うわよ」

「（……ものは言い様だな。

……てかさ、ルルカ。こここの勘定だけよ、まさかあのに ちやんに任せようだなんて考えてねーだろうな……？）」

「あつれー？ 昨日そういう話になつたじやん。まさかここんにやく、聞いてなかつたの？」

「（聞いてたけど……やつぱお前がめつゝよ）」

「失礼ね。たかだかカフェオレ一杯とチーズ一切れ頼んだだけで、そこまで言わないでよね。本当にがめつかつたら、こここのメニュー端から端まで頼んでるわよ」

「（……やるなよ。頼むから）」

「分かつてゐつて。それくらいの常識あるわよ。食べ切れないし。それよりも……つふふふふふ、今日の晩御飯が楽しみね～」

言いながらルルカは、昨日栄を挟んでおいた『一度は行ってみたい三ツ星レストランガイド』を再びめぐり始める。

昨日は結局フライド・チキンが不調を起こしたのと、アドルが財

布を落としたせいで超一流レストランの高級ディナーは涙を呑む結果となつてしまつたが、今日はその失敗要素を全てクリアしている。ルルカと超一レストランとの間を阻む物は何もないはずである。

妄想を膨らませ、じゅるりと口元の涎を拭い去るルルカ。

しかし、そのとおり

ଶ୍ରୀମତୀ ପାତ୍ନୀ କଣ୍ଠାରୀ ମହିଳା ପରିଷଦ

ルルカが一気に吐き出したカフュオレを全身に浴びた」んじゃくは、すっかり茶ねずみになってしまっていた。

突然、店外から響いた、空を裂くような鋭い大高音。

一体何が起こったのか……店外では、戸惑い悲鳴を上げている者、我先に逃げようとする者、じつた返していた人々は完全にパニック状態に陥っていた。

そんな店の外の様子を見て、喫茶店内の客たちも次第に戸惑い、ざわめき始めている。

しかし……一人はそれどころではなかつた。

「あ……あ……。わ……私のカフェオレが……」

何てことしてくれんのよ！ もつたいないじゃない……！」

「バカやろーっ！！ それはおれの台詞だつづーの……
どうしてくれんだ！ おれの最大のチャームポイントの純白ボ
ディが、すっかり茶こけちまつたじゃねーか……！」

大声でケンカを始めるルルカとこんにゃく。

こんにゃくもいつもは見せないような怒号を張り上げるが、店内の客たちが騒然として外の様子に注目していたおかげで、大声を上げる彼の存在にも気付かれなかつたようである。

「だあーっ、もうしようがないわね！

おねーさん！ ちょっとおしほりもう一個持つて来てくれな
い？」

大声を張り上げて、近くにいたウェイトレスのお姉さんを呼ぶる
ルルカ。

しかし、ウェイトレスお姉さんからの反応はない。ただただ愕然

として、外で起じた異常事態の状況に驚愕しているだけである。

「このときになつて、一人はよつやく店外での異変に気付くことが出来た。

「……また食い逃げでも現れたのかな？」

「だつたら無視よ。無視。関わつても、また徒労に終わるだけだわ」

「ま、明らかにそんな様子じゃなさそうだけどな」

「……せっぽうよね」

ふう……と大きく一息。

ルルカは刀を携え席を立つた。

「行くのか？」

「当然！ トラブルあるとこで儲け話あり、ってね！」

「また徒労に終わらそな気がブンブンするんだけど……」

「こんにやくの皮肉は聞こえない振りをしつつ、ルルカは戸惑うウエイトレスの一人に向かつて、先程より大きな声を出して大きく手を上げた。

「おねえさん、お勘定！ 私の連れに付けといてね！」

ターミナル内はまさに騒然としていた。

パニックに陥り逃げ惑う人々が、圧倒的な人波となつて押し寄せて来る。

そんな人海のうねりをどうにか避けつつ、ルルカは彼らの進行方向とは逆方向……騒ぎの中心へと向かつた。

一体何が起こっているのか……。人海が視覚を遮り、悲鳴や叫び声に耳を塞がれ、状況はまるで把握できなかつた。

しかし、人々の悲鳴、叫び声に混じり聞こえる先程の大高音だけはハッキリと、進めば進むほど次第に大きく、大きくなつてルルカの耳に届いてくる。

やがて、人海が収束を見せ始めた頃、全く不鮮明であつた状況がようやく明らかになつた。

そこには、ターミナルに常駐している空軍兵士が三人いた。

三人とも緊迫感を漲らせ、各々手にした銃剣ペイオネットを構えている。

そして……彼らの目の前には、騒ぎの原因と思われる、金色の翼

を持つ巨大な生物。

「（なんだあーー！あいつは？ー）」

「飛竜鳥！亜人世界にしか棲息していないはずの鳥だわー！」

ルルカは声を上げた。

全身を着飾つた金色の羽、頭に生えた竜を彷彿とさせるよつな一本の角、そして少し広げただけで目の前にいる三人の空兵を易々とを呑みこんでしまうのではないかといつほど大きな両翼。

飛竜鳥。

間違いなく、亜人世界にしか棲息していないはずの鳥である。

おそらく群れからはぐれ彷徨つた結果、人間世界の……こんなところにまで迷い込んでしまったのだろう。

かなり興奮状態にあるのか……。飛竜鳥は鋭い鳴き声を上げながら、その巨大な両翼をいっぱいに広げて、自分を取り囲む空兵たちを威嚇している。

緊張感を漲らせた空兵たちは、まさに構えた銃の引き金を引かん

としていた。

「やめてつー！」

咄嗟だつた。

状況を整理するよりも先に体が動いていた。

ルルカは全速力で両者の側まで駆け付けると、飛竜鳥を庇つようにその間に割つて入る。

「そ……そこをどきなさいー！」

突然の、思わぬ妨害。

空兵の一人が戸惑いの声を上げる。しかし、その手に構えた銃剣の銃口は決して下ろさない。

「一体何故そんな生き物を庇つんだ？！」

「飛竜鳥は人に危害を加えるような鳥じゃないわー！ 本来大人しい生き物のはずよ。何も殺すことないじゃないー！」

ルルカは必死で声を張り上げる。

いくら亜人世界の生物だからといって、人畜無害な生き物をむやみやたらに殺していいはずがない。それはただの殺戮行為だ。そんな行為を、黙つて見過ごすことなどルルカには出来なかつた。

しかし……空兵たちはまるで耳を貸す様子はない。

「確かにそうかもしないな……。だが、その巨体。翼を広げただけで施設内の人間を傷付ける恐れがある。動き回れば、誰かが命を落とす可能性も危ぶまれるんだ。傷付けるな……。というのは無理な話だ。

それにな……」

そこで空兵は一寸言葉を切り、鋭い……憎しみすらこじりつた視線で飛竜鳥を睨み付けた。

「そいつは汚らわしい亜人どもと同じ空気を吸っているんだ。そんな生き物が我々と同じ空気を共有することなど……絶対に許されん！」

亜人に対する……徹底的な嫌悪感。

「ここつ……」

ギリ……とルルカは奥歯を噛み締めた。理不尽な主張に、次第に沸々と怒りが込み上げて来る。

確かに……戦争に直接携わっていた彼らにとって、亜人は忌むべき敵。敵意があつて当然である。

しかし……だからといって飛竜鳥にまでその敵意の眼差しを向けるのはお門違いのはずだ。

「（ややや……やめとけって、ルルカ！ 空兵相手じゃ色々な意味で分が悪過ぎるよー）」

フードの中から、怒り心頭のルルカを必死で宥めるにゃんにゃく。

刀に手を掛けようとしていたルルカはハツとする。

彼の言つ通り、下手にここで抵抗してしまえば、悪者になるのは完全にルルカの方である。おそらく逃げ惑っていた人々も思考も、この空兵たちと同じものだらう。

こんにゃくの一言のおかげでルルカも幾分か冷静さを取り戻すことが出来た。

刀に伸ばそうとしていた拳をギュッと握り締め、ゆっくりとその手を下ろす。

そのとき、

突然、周囲に吹き荒れる暴風。

天高く咆哮を上げ、飛竜鳥はその巨大な翼を大きく前後に動かし始めた。

飛び立つつもりだ。

側にいたルルカも、そして三人の空兵たちも、飛竜鳥の翼が生み出す旋風に耐えられず、膝を付き、必死で側の柱にしがみつく。

「や……早くどきなさい！ そいつが動き回れば、君も危険だぞ！」

ますます口調を荒げ声を上げる空兵。

しかし、ルルカは聞き入れるつもりなどない。

業を煮やした、一番年長で上位階級者と思われる空兵が手を上げた。

「止むを得ん……。撃てつー！」

旋風に耐え、引き金に指を掛ける空兵たち。

刹那、

たんつー！

ルルカは風に乗り、壁際のガラス窓の方へと飛んだ。

手にした刀を、抜き放ちざまに鋭く一閃。

ハハハ！

ガラスが碎ける高い音とともに暴風が吹きすさび、周囲を引っかき回した。

飛竜鳥の翼から生み出される旋風よりも激しい暴風に弄ばれ、空兵たちは銃剣を手放し地を転がり回る。

「今よ！逃げなさい！」

必死で声を張り上げるルルカ。

その言葉の意味を理解しているはずはないが……恋しい空へと通ずる道を発見した飛竜鳥は、ガラス窓から開けられた大穴から、大空へと飛び立つて行つた。

「な……何てことを……」

呆気にとられた様子で呟く空兵たち。

突然のルルカの行動に彼らはまるで対応することが出来ず、ただただ茫然として、飛び去る飛竜鳥の背中を眺めるばかりであった。

「よつしゃ！ それじゃ私たちもひととど逃げるわよ！」

刀を収めるや、猛ダッシュでその場から走り出すルルカ。

「のまま」にいたのでは、後始末が面倒臭い。空兵に捕まり散々説教されたあげく、ガラス窓の修理代だって支払う羽目になるだろつ。

ようやく仕事をゲットして収入を得られそうだといふのに、それでは全ての苦労が水の泡……最悪赤字である。

途中、先程の喫茶店の前を通り、アドルが困り顔でレジの清算しているところだった。

「アドル、行くわよ！」

「えつ？えつ？！ええええつ！！」

全く事情を把握していないアドルは突然の事態にただ戸惑うばかりであったが、置いて行かれるのは御免とばかりに、訳も分からぬまま空兵に追い掛けられるルルカの背に続いた。

『いやあ～感激だなあ！まさかこの田で本物の飛竜鳥見ることが出来るなんて……これは一生の思い出になりますよー。』

伝声管から興奮気味のアドルの声と、カメラのシャッターを切りまくる音が聞こえて来る。

蒼天の下、悠然とその金色の両翼を広げて大空を羽ばたく飛竜鳥の姿は、確かに彼の興奮ぶりも頷けるほど壮大で幻想的であつた。

大急ぎでフライド・チキンに戻り、ターミナルから脱出したルルたちは、逃げた飛竜鳥の後を追い、その少し後方を飛ぶ。

追手は来ていないようだが、飛竜鳥がとりあえず人里離れた場所まで……そして亜人世界の方向までちゃんと飛んで行くまで心配で放つておくことが出来なかつた。

「どう？ これで一個スクープが出来たんじゃない？」

伝声管の向こう側ですっかり上機嫌のアドルに対して問い合わせるルルカ。

『ええ！ もし仮に白嶺海でスクープがゲット出来なくとも、これでサバイバル少女の生活記を載せなくとも済みそうですよ』

嬉々として声を弾ませながらアドルに、ひくつ……とルルカは頬を引き攣らせた。冗談で言っているものとばかり思っていたが、どうやら完全に本気だつたらしく。

『ですが、ルル力さん。一体どうして僕たちまで逃げなければならなかつたんです？ とりあえず何も考えずに着いて来ちゃいましたけど……。空兵だって何やら後を追つて来ていたみたいですし……』

「ん~……。その辺は話したら少し長くなるから、また今度ね」

ルルカは伝声管の向こう側に適当な返答をする。

よくよく考えてみれば、あの場に残っていたのでは説教どころでは済まなかつただろう。

空兵たちの邪魔をした行為は下手をすれば公務執行妨害罪に該当するだらうし、ターミナルのガラスを破つたのは完全に器物損壊罪である。

そして、もしもお金を下ろしたアドルが間に合わずにあの喫茶店の勘定を払つていなかつたら食い逃げまで成立してしまつ。

やはりあの場合は『逃げる』という選択肢が最善の判断だつた。アドルが少しでも遅れていいたら、完全に置いて行かざるを得ない状況だつたが。

……どちらにせよ、あのターミナルには自分の間近付くことせぬ出来ないだらう。

「それにしてもよ……おいルルカ。いくらなんでも無茶しそぎだよ。空兵に歯向かつなんて命知らずもこいとこだぜ」

ルルカとアドルとの会話が途切れたことを確認して、フードの中から一ヨキツとことにやぐが這い出でた。

何もしていないはずであるのに、その表情には氣疲れからか若干の疲労の色が窺える。

「だつて、しょうがないじゃん。あのまんまじや、あの飛竜鳥は間違いなく殺されたんだもん」

そんなこにやくの忠告に対し、ルルカは脹れたようにブイッシュをつぼに向いた。

「だからつて、そんなに体張ることかよ。

同じ人間だつたら、ターミナルにいた人たちの命を守るために仕方ない……つていうあの空兵たちの考え方だつて分からなくもないんだけどなあ……」

難しい表情を浮かべて呴くこにやく。

おそらく、あの空兵たちはもちろん、ターミナルで逃げ惑つていた人々のほとんどが、こにやくと同じ考え方だつただろう。

大人しいとはいえ、あの巨体。しかも本来ならば人間世界に現れるはずのないイレギュラー因子、未知の不安要素を取り除こうとする考え方は必然だつたのかもしれない。

しかし、それでも……

「命の重さに差なんてないの。同じ人間を守るためとはいっても、それ以外の生物を殺して当然だなんて考え方……絶対に間違つてゐるわ。

……例えそれが亜人相手だったとしてもね」

去り行く飛竜鳥の姿を見送りつつ、遠い目をして呴くルルカ。

その脳裏には、あの日の……あの悪夢の中の光景が、ぼんやりと……おぼろげにフラッシュバックしていた。

この世界の歴史は、憎しみ深き闘争の積み重ねにより、時を刻み続けてきた。

知を有する『賢き者』人間と、力を有する者『強き者』亜人。

全く異なる色を持つ両種族が争いを起こすのは、あるいは必然だつたのかもしれない。

時すら忘れるほどの昔……両種族は互いに互いの欠点を補い合いながら助け合い、支え合って、ともに長い道のりを歩んできたらしい。

人間は亜人に『知恵』を与え、亜人は人間に『力』を貸し、両種族は絶妙なバランスを保ちながら共生していた。

そのときには諍いなど何もなく、両者が種族間の差異を疎んじることなどまるでなかつたのだ。

しかし、平和な時間は、時の流れとともにあっさりと崩れ落ちる

こととなる。

『知力』に長ける人間の進化は早く、次第に亜人の力を借りずとも、自らの欠点を補う術を見付けるようになつたのだ。

そして、欠点を補う程度に身に付けただけであつた人間の『力』は、あつという間に亜人のそれに比肩するようになる。

小さな諍いはこのときから始まつた。

亜人の中には言葉を操ることもできない知能の低い種族も多い。

進化し、強大な『力』を身に付けた人間たちは、いつの間にか亜人たちを劣等種として位置付けるようになり、次第に彼らを奴隸のように酷使するようになつたのだ。

そして、亜人たちもまた人間の力がいづれ自分たちにとつて驚異になると考へ、力付くでそれを捩じ伏せようとした。

小さな諍いが、大きな争いへ変わるのにさして時間はかからなかつた。

人間と、亜人。

両種族の……この世界の、長い……長い闘争の歴史は、こうして幕を開けることとなつたのである。

時の流れとともに両種族の憎しみの炎はより大きく燃え上がり、戦火は時を経るごとに激しくなつていつた。

「この戦争は必然だつた」

激しい憎しみと、差別感情に狂つた者が戦火の中残した、両種族の争いを象徴するかのような言葉が、皮肉にも全く相反する両種族間で唯一の共通の意識となつてゐる。

争いを知らぬ人間など、この地上には存在しないのかもしぬない。

「ふんふんふん、ふんふんふん」

街の大通りを歩くルルカの足取りは軽かつた。

群れから逸れた飛竜鳥が、亜人世界方向へ飛び去るのをきつちりと見届けた後、フライド・チキンは一直線に北の白嶺海へ……は向かわず、少し寄り道をしていた。

沿岸海園都市『レー・ヴェル』。

海を望む港街であるこの街は、大都会……とはいかないまでも、かなり大きな都市で、観光地としてもその名を馳せている。

海岸線は美しくアーチを描き、碧く透通る海はどこまでも広がり、昔ながらの帆船が悠然と泳ぐ……。

斜面に家々を敷き詰めるように建設された街は、細かく入り組んだ路地の多く、そんな街の大通りは旅行者など行き交う人々で賑わいを見せていた。

この街にルルカたちが立ち寄ったのは……もちろん、観光をするためなどではない。

ここにルルカが『一度は行ってみたい三ツ星レストランガイド』にチェックを付けていた高級レストラン『ブランディーノ』がある

からである。今晚の夕食を食べるために、わざわざ寄り道をしたのだ。

公私混同も甚だしかつたが、折角うまく契約をまとめることが出たのだ。これを利用しない手はない。

「随分機嫌がよさそうですね、ルルカさん」

スキップ交じりの軽い足取りで大通りを行くルルカの後ろを、ちよこちよことついて来るアドル。

まだ日は高く、レストラン『ブランティーノ』が開店する時間には少し早い。

そんなわけで二人は夕食まで街を散策してみることにした。

北の白嶺海へ到着しないうちに契約一日目が終わり、おまけに寄り道までしているというのに、アドルは怒つたり文句を言つたりする様子もなかつた。貴重な飛竜鳥の写真をゲットすることが出来て、心に少しだけ余裕が生まれたのだろう。

ちょっとだけ寄り道を……というルルカの申し出を、快く承諾してくれた。

「うん。まあちょっと色々あってね~」

今夜の夕食のことを想像して、すっかり上機嫌のルルカ。

「この名産といったら、言つまでもなく海産物。

海鮮パスタに、アリーチのマリネ、魚介類をトマトやオリーブなどともに白ワインで煮込んだアクアパッツァなど……美味しいものも食べたいものも山ほどある。

想像しただけで口元に溢れ出る涎を抑えることが出来なかつた。

しかし……、彼女の機嫌がいいのは、何も夕食のことを考えているからだけではなかつた。

キラリ……と、ポケットの隙間から、淡いエメラルド色の光が零れる。

アドルを助けたあの日、山間の川の中で発見したあの石である。

あの日はバタバタしてしまつたせいで、すっかり石のことを忘れていたのだが、この石がもし本当に未知の宝石の原石ならば……きっと相当な高値がつくはずだ。

高ぶる期待を抑えきることができず、ルルカの足取りは自然と軽やかに、そして口元は完全にニヤけてしまつていた。

これだけ大きな街であれば、宝石店の一軒や二軒あるはずである。

夕食までの間、街を散策してみる……といつのは名前で、ルルカは折角の観光名所にも目もくれず、宝石店を探して街中を徘徊していた。

やがて、ルルカの視界の遙か向こう側に、『Jewel Shop』の名を掲げた看板が映る。

「あつたあつた……

ね～え、アドル。ちょっとあそこの宝石店に寄つてもいい？」

「宝石店……ですか」

急に猫なで声になるルルカに、アドルは警戒心を剥き出しにして、あからさまに胡散臭いものを見るジト～とした視線を送る。

「まつ……まさか、宝石まで僕にせびる気じゃないでしょうね……？」

「んなことしないって。アドルはお店の外で待つてくれればいいからつー！」

「そ……そですか……？ それなら別に構いませんけど

「んふふふふ～、よっしゃー！ それじゃ行って来るわー！ 適当にその辺で待つててね」

ルンルン気分で、スキップ混じりに宝石店の方へと走り出すルルカ。

「（お）ルルカ……。あの石いりがほとんどに宝石だつたら、もうあの兄ちゃんにたかるの血肅しろよ～？」

「わ～かつてるって　」

こんなにやくの言葉も、浮かれ気分のルルカの右耳から入つて左耳から抜けて行く。もはや彼女の視界には宝石店しか入つていなかつた。

しかしそのとき、

「待ちやがれ、このクソじじい　！…」

「素直に待つ者などあるかっ、このボケビもめ　！…」

大通りの反対側から、怒声ともとれる叫び声が響いた。

間髪置かず、宝石店の向こう側からこちらに向かつて猛然と走つて来る一人の老人と、何やら彼を追い掛けるように一人の男が姿を現す。

「何か騒ぎのようですね……」

後方から、物珍しげな口調で呟くアドルの声が聞こえる。

「（……おい、ルルカ）」

「……無視よ、無視。私の行く道は輝かしい未来に向かつて一直

線に進行中なのよ

「んにゃぐが何かを言わんとして問い合わせてくるが、ルルカは両手で耳を塞ぎ、さらに老人たちから思い切り視線も背ける。

もし今ここで厄介事に関わってしまったら……宝石店どころかずっと切望していた高級レストランにも行けなくなつてしまつかもしれない。

おまけに、またまた徒労に終わる可能性も大である。

しかし……。

そんな彼女の懸念をよそに、老人たちは大通りの人ごみを掻き分け、掻き分け、一直線にルルカたちの方へと向かつて来る。

「無視、無視……」

両者の距離が十メートルを切る。

「ちよつと、別のお店を探そつか」

激烈に嫌な予感を覚え、反転しかけたそのとき

「お……おい、そこの娘！ ちよいとこのわしを助けい！」

背後からグイッ、と思い切り腕を掴まれた。

「ああああああああつ……もう嘘でしょ……」

「一体何故にこんなことになってしまったのか……。」

嘆きの叫び声を上げつつ振り返ると、予想通り……そこには息を切らせつゝ駆け付け必死の形相を浮かべる老人の姿。

「ち……ちよっと、何よじいさん！ いきなり出て来て、私の輝かしい未来への懸け橋をぶち壊そとしないでよね！」

「ええい、緊急事態なんじゃ！ 四の五の言つとらんで早う助けんか！…」

「んなこと知らないわよ！ 勝手にやつてちょうだい！」

何とかその手を振りほどくとするが、ルルカの腕を掴むその力は予想外に強い。

「だああああああああ、もうひとつ！ ちょっと放しなさいってば！ みんなこいつ見てんじやん！」

「か……か弱い老人が暴漢に襲われようとしておるんじゃ！ 普通は黙つて助けるもんじやろう！ お主には慈悲の心はないのか！？」

「ないわ、そんなもん！ 持つてもお腹も財布も膨れないじやん！…」

「三万リード！…」

「任された！」

瞬間、ルルカはバレリーナもびっくりの軽やかなターンで反転した。

もしもあの石が本物の宝石であれば、三万リードなど完全にただのはした金にすぎないのだが……それでも、悲しき貧乏症。ルルカは即座に、敏感に目の前に吊り下げられた報酬に食い付いてしまった。

「ち……ちよつと待つてくださいよ、ルルカさん！」

すると、その光景を見ていたアドルが息急き切つて駆け付けて来る。

「そんなどこの馬の骨とも知れない老人の依頼を引き受けるなんて……。

僕の依頼はどうなるんですか？ダブルブッキングなんてプロ失格ですよ！」

どうやら一連の状況はちゃんと把握しているらしい。自分の依頼そっちのけで別の依頼を受けたルルカに向かつて猛抗議する。

こんなときに自分のことしか考えていないアドルの人間性の底も知れている。

しかし、

「黙れ貧乏人！」

ルルカの人間性の底はもつと知れていた。

「（うわあ、人間の根底が見えたな……）」

フードの中で、事の様子を傍観していたこんにゃくも呆れた様子で呟いた。

「はあ……はあ……。や……やつと追い付いたぜ……。全く、なんて機敏なじいさんだ」

老人に少し遅れ……彼を追い掛けていた二人の男も、ルルカたちの側までやって来る。

よくよく間近で見てみると、一人とも身なりは粗暴、人相はかなり悪い。

そして、何より……腰に堂々と挿した凶悪なナイフが、この二人がただの一般市民でないことを物語っていた。

「ル……ル……ルルルル力さん……。
」「……こいつら……、空賊ですよ……」

「分かつてるわよ」

背後でガタガタと震えた声を漏らすアドルに、ルルカは冷静に素っ気なく返す。

二人の男の片方の頭には漆黒のバンダナ、もう片方は目にアイパッチ、そしてそのどちらにも『死』を象徴する髑髏のマークが施されていた。

どこからどう見ても、見紛うことなく典型的な空賊スタイルである。

一体何故この老人が空賊などに追い掛けられているのか……。

それは分からぬが、老人からの依頼はこの二人の空賊から彼を守るということ。詳しい事情にルルカは首を突っ込む気はなかつた。

事情が判然とせずとも、普通に考えれば非力な老人を追い掛け回す空賊の方が完全に悪いに決まつてゐる。叩きのめしてもどこからも文句は出ないだろう。

「ああん！？ 何なんだ、おめえらはよ？」

濁つた目付きで、老人の前に立ちはだかつたルルカを睨み付ける二人の空賊たち。

「ひいっ！」

その迫力に完全に氣圧され、アドルは情けない声を上げて近くの外灯の影に引つ込んでしまつた。男としては少し情けないが、普通の一般人なら至極当選の反応である。

対して……ルルカは身じろぎもしない。

「おうおう。そこどけよ、ねーちゃん。俺たちや、そっちのじいさん用があるんだ。怪我したくねえだろ？」

「ふうん。怪我するくらいで許してもらえるんだ？ あんたたち、空賊のクセに結構優しいのね。

……つと。じゃなくて、見掛け通り『生温い』って言つた方がいいのかしら？」

「な……なんだと、てめえ……」

ちょっと脅しただけで素直に引くものと思っていたのだろう。予想外の反撃に遭い、バンダナの方の空賊がブチ切れる。

「（あ……おおおおおこ、ルルカ……。ちょっと発言には気を付けた方が……）」

無法者の空賊に対しても大胆不敵すぎる反論をするルルカを、どうにか止めようとするにやぐ。

しかし、老人を守るところ依頼は受諾済み。今さら引くわけにはいかない。

「度胸だけは大したものじゃねえか……。そこまで言つからうほ死ぬ覚悟出来てんだろ？」「

「え？ 誰もそこまで言つてないじやん。あちやー、見た目も三流だけど頭の中身もやつぱり空っぽみたいね」「

「て……てんめええ……一 らせかやがつて……ぶつ殺してやる……」

完全にルルカの挑発に乗り、額に青筋を浮かべながらこき立つてナイフを引き抜こうとするバンダナの空賊。

「（ほら、言わん！）ちやない……」

絶叫するヒトモヒ、ヒコヒヤハはフードの奥深くに隠れ込んだ。

しかし、カウンターで居合い抜きでもかましてやろうと思つていたルルカは、刀の柄に手を掛け、狙い通りに襲い掛かつて来た空賊に対して臨戦態勢に構える。

しかし……完全に頭に血が上ったバンダナの空賊を、もつ片方のアイパッチの方の空賊が制した。

「待て待て。こんな小娘のペースに乗せられるな。
……おい娘。お前、そのじいさんの血縁者や知り合いといったわけでもなさそうだが……。

見ず知らずの老人のために、命の危険を犯してまで俺たち空賊に歯向かうということは……少なくとも腕にかなりの覚えがあるな？
一体何者だ？」

冷静な口調で問い合わせる。どうやらバンダナの空賊よりは多少頭が回るらしい。もつとも、空賊の脳みそのことなどルルカにとつてはどうでもいいことだったが。

そんなことよりも……アイパッチの空賊の問い合わせに、やつと聞いてくれましたかと言わんばかりに、ルルカは得意顔で大きく胸を張つた。

「よくぞ聞いて……じゃなかつた！
えと……。
『ほんつ……。

困っている人がいれば、大空から風に舞い颯爽と現れる！

悪し奴かしれは
正義の刃で迅速華麗に成敗する
！

流離の美少女何でも屋ルルカ＝シエルとは、私の「J」とな！

彼は今回の私の大事なクライアントなの。悪いけど助太刀させて
もらうわよ！さあ、往生なさい！」

朗々たる口調で言い放ちながら、鞘に収めたままの刀の切っ先をビシッと空賊たちに向かって突き付けた。

決まつた。

一度は言つてみたかつたが、なかなか使ひどころがなかつた決め

台詞。

言い切った自分に、思わずうつとりしてしまうルルカ。

空賊たちも、しばらく呆気こじられたような様子でその姿を見つめていた。

しかし、

堰を切つたように一斉に大笑いし始める。

一体何故彼らがこんなにも大爆笑しているのか……自己満足に浸っていたルルカは怪訝な表情を浮かべる。

しかし、すぐにそれが嘲りの笑いであるということを理解した。

「……何よ。私、そんなにおもしろい」と言つたつもりないんだけど」

物静かな……いや、ドスの効いた口調で低く唸る。とつておきの決め台詞を嘲笑されたその表情は完全に憤怒の鬼の形相へと豹変している。

「（ル……ルルカ。落ち着けよ、な？ 相手も多分そんなに悪気があつて笑つたわけじゃないと思つぞ）」

じんにゅくはフードの中に隠れていたが、そこからでも彼女が放つピリオドとした殺氣を感じたらしい。必死で彼女を宥めようとする。

しかし、静かに激怒するルルカの様子に気付いていないのか……空賊たちは未だ込み上げてくる笑いを必死で堪えながら、

「……こいつ、俺たちのことはやつつけぬつまらじこちが
頭おかしいんぢやねえのか？」「はははははははは

ぶちつ！

大通りにルルカの神経がブチ切れる音が響いた。

「そ……そんなおもちゃみてえな刃に、御大層な決め台詞まで用意しちゃつてよつ！！」

ふちふちつ

「はあ……はあ……。頼むから正義の味方『じつけ』はよそでやつて
くんな。世間知らずのお嬢ちゃん」「

卷之三

その瞬間、ルルカの理性は完全に吹き飛んだ。

「お前うひーになおれええええええつ」

刀を抜き放つと同時に、恐るべき速さの踏み込みで男たちに襲い掛かっていく。

「げえつ
！」

ルルカの予想外のスピードに虚を突かれ、一瞬ではあるが完全に反応が遅れる空賊たち。

しかし、その一瞬が食えた肉食獣の「ごとく襲い掛かつてきたルルカの前では命取りになつた。

「どぐつ……！」

「がふつ……！」

「ぼきつ……！」

「ぐえつ……！」

まさに……一瞬の出来事だった。

ほとんど何の抵抗もできず、一人の空賊たちは瞬く間に難き倒されてしまった。

ルルカの刀には明らかに昨日の食い逃げを倒したときよりも力が込められていた。空賊たちは致命傷を負つたのか、倒れたままピクリとも動かない。

「さすがに死んではないだろ？」

「フーッ　！フーッ　！……恐れ入つたか　！！」

足元で死体のごとく転がる空賊たちを見下ろし、鼻息を荒げるルルカ。

「（ル……ルルカ、もういいだる……？　もう気が済んだら……？　頼むから落ち着いてくれよ。なつ　？　なつ　？）」

「フ……フンッ　！」

空賊たちが完全に機能停止したことを確認すると、ルルカは刀を荒々しく鞘に收め、大きく息をついて呼吸を整えた。

その12

「ななな……なんちゅう乱暴者じや……。」
「こりゃあ助けを求める相手を間違えたかのう……」

その姿が、あまりにも凶暴に見えたのだろう。老人はその身をガタガタと小刻みに震わせて完全に恐れ戦っていた。

散々自分を小馬鹿にしてくれた空賊を叩きのめし、少しスッキリしたルルカは営業スマイルを浮かべながら老人の方を振り返る。

「はい、おじいちゃん。ちゃんとあなたの身は守つてあげたわ。
これで……依頼達成ね」

「（ルルカ……笑顔が引き攣つってるぞ）」

極力にこやかな笑みを向けたつもりだったが、ひと暴れした後の顔の筋肉は完全に強張つてしまっていた。

ルルカが頬をヒクヒクさせながら浮かべる不気味な笑みを目の当たりにして、老人は空賊に襲われていたときよりも青い顔をして脅えている。

よくよく見れば、ずっと外灯の陰に隠れていたアドルまで何故か脅えていた。

「あ……あんたらねえ……」

「はつ……！」

「…………つむ、助かつたぞ。礼を言おつ……。
じゃが……報酬はまだやれんな。

依頼が達成されたわけではないからの」

「え、何言つてんの？　あんたを追い掛けた空賊はこの通り
…………」

「こつちだ！　見付けたぞ！！！」

ルルカが抗議の声を上げかけたそのとき、先程老人たちが駆けて
来たのと同じ方向から、またもや別の男たちが姿を現す。

身なり、顔付から判断して空賊たちの仲間だらう。しかし……今
度はその数十人以上。

「げつ　！　！」

「ほ……ほれ、何をしておる！　早う何とかせんか！」

思ひもよらぬ援軍の登場に、思わずルルカは声を上げるが、老人
はそんな彼女の背を押さんばかりの勢いで煽り始める。

しかし……ルルカ一人では到底どうにかなるような数ではない。

「だあああああああああああつ　！　！　もつ　！　！
何でこんなことになるのよド畜生つ　！　！　！」

こんな団体様が相手では三万リードでは安すぎる。

田の前にはもう数歩のところに宝石店が……一獲千金の夢が待つ

てこるところに……。

ルルカは頭を乱暴に搔き鳩巣、断腸の思いで老人の手を取つて走り出した。

「逃げるわよっ　！」

人生何でもかんでも全てはうまくはいかないもの……といつては悟っていたつもりだったが、それにしてもあんまりだった。

一体何故こうも思い通りにならないのか……ここまで来たら何か悪いものに憑かれているのではないかと疑いたくなる。

本当ならば今頃、宝石店で手にした大金とともに超一流レストラン『ブランディーノ』の一席で、最高級ディナーに舌鼓を打つているはずだったのに……。理想の未来と現実とのあまりに激しい落差に、ルルカは涙を呑まずにはいられなかつた。

執拗に追い掛けてくる空賊たちをどうにか撒き、ようやく一息吐いたときには既に日はとっぷりと落ち、周囲には薄暗い闇が蟠りつつあつた。

空賊たちの追尾は本当にしつこかつた。ルルカ一人であれば追手から逃げ切るのは造作もないことであったが、何せ老人とアドル、二人の足手まいを連れての逃走劇である。この街が細く入り組んだ路地の多い造りになつていなければ、とつぐの昔に捕まつっていたことだろう。

三人と一匹が逃げついた先は……一軒の、かなり古めかしいが大きな屋敷の中。老人の指示を受けてここまでたどり着いたのだが……。

「はあ……はあ……。どうにか撒いたわね……。
ねえ、おじいちゃん……。ここどこ？」

肩を大きく上下させながら、ルルカは隣に佇む老人に問い合わせる。

「『ジ』……と問われれば、その答えは『ワシの家』じゃ

「ず……随分大きなお屋敷ですね。ちょっと埃っぽくて汚いですけど」

やたら胸を張つて自慢げに答える老人に対し、アドルは素直に感嘆の声を漏らした。……言わなくてもいい本音まで漏れてしまつていたが。

「うむ。まあワシほどの偉大な研究者ともなれば、それに見合つべき屋敷に住んでいて当然じゃう」

「…………」

アドルの呟きは耳に届かなかつたようだ。代わりに自分のことをしつと『偉大』と言つてのける老人にルルカは目を細めるが、もういちいち突つ込むのも面倒臭かつたので、聞き流すことにした。そして老人が口にした『研究者』という言葉についても言及する気にはならなかつた。

「ここまで来ればもう安心じゃ。さて……走り回つて疲れたじやうひ。

奥に来なさい。せさやかなお礼に粗茶くらいは出してしんぜよ」

「あ……、それはいいわ。私たち、ほかに用事があるから。報酬だけいただいたら御暇させていただくわ」

老人はルルカたちを屋敷の奥へと招き、いれようとするが、片手でパタパタと火照った顔を仰ぎつつ、ルルカはその申し出をやんわりと断つた。

さすがに宝石店はもう閉まっているだろ？が、レストランの方は今から急いで戻ればまだ十分に間に合つはずである。

危うく今日も散々な一日になつてしまつといつであつたが、まだ取り返しづくはずだ。

ルルカの隣で、アドルも何やらウンウンと頷いていた。

「そうです、そうです。ルルカさんは僕の依頼を引き受けている最中なんです。こんなところで香氣に油を売つてている暇はないんです」

しかし、そんなルルカたちを老人は鋭い目付きで見据えた。

「残念じゃが……それは出来ん。外にはまだ追手がつるついていることじやう。お前さんたちがこの屋敷から出るところを見付かれば、ずっと隠し続けて来たワシの居場所がバレてしまう。お前さんたちにはほどぼりが冷めるまで……とりあえず最低でも今日一晩はこの屋敷で過ごしてもらひだ。

なあに、飯の心配ならすることはない。今日はこのワシ自ら久方ぶりに腕を振つて、ひとつおきの料理を作つてやる！」

「なつ……？」

突然の老人の申し出に、思わず絶句するルルカ。

「ふ……ふざけないでよねっ！……私たちは『ブランティーノ』の超高級ディナーを食べるためだけにこの街に来たのよ！……それを何が悲しくて老人が作る質素な粗食なんて食べなければならぬのよ……」

「そうですよ！……精進料理を出されたって記事に出来るようなことは何一つないんですよ！……」

ルルカとアドルは揃つて抗議の声を上げるが、老人は駄々つ子のようにブイッときっぽを向く。

「言うことが聞けんのなら報酬の三万リードはやらん！……それに……我が家の大居を跨いだ入場料一人五万リードもきっちり支払つてもうおつか」

「じゃ……じゃまつ……ー？」

「横暴よ、そんなのー！」

「ええい、やかましいー！」はワシの家じゃー！……ではワシがルールじゃー！」

……下らない言い合ひをしていりに、夜はどんどん更けていく。

レーヴェル上空。

地上五百メートルを超える空の中を、一機の船が悠然とたゆたっていた。

エア・ライドに比べたらかなり大きい。それに、機体のあちこちが鈍い輝きを放つ砲門で武装されている。

バトル・シップ。

空軍にしか所持の許されない、戦闘型大型エア・シップである。しかし……その機体に施されているのは、空軍のHンブレムなどではなく、不気味な髑髏のマーク。

「なにいつ！？ またフォウルのじじいを取り逃がしたというのか！」

機内に怒号が響き渡った。

バトル・シップの中には軍服姿の空兵などいににもいない。いるのは粗暴な身なりのゴロツキのような輩ばかり。

空賊船『バンティット号』。

それが、空のならず者たち……空賊たちが不法所持するこのバトル・シップの名前であった。

「も……申し訳ありませんでした、ボス！」

十人以上の空賊たちが一斉に頭を垂れる。その日の前には、空賊たちが『ボス』と崇める一人の中年男の姿。

厳めしい顔つきは周囲の者たちと大差ないが、一人だけやたらと煌びやかな衣装を身に纏い、小奇麗な姿をしているという点だけは決定的に違っていた。

「馬鹿者どもがつ！ あんな老いぼれ相手にいつまで手間取っているつもりだ！」

喚き散らしながら、一番近くにいた空賊の頭を殴り付ける中年男。拳を握り締めたまま、フーッ、フーッと鼻息を荒げ続ける。

「それに取り逃がしただけというならともかく、返り討ちにあつただと……？」

まさかあのじじいにやられた……などとこう冗談を言ひつゝもりじやないだろうな？」

「ヒ……とんでもない！ どこの馬の骨ともしけねえ刀使いの女剣士が突然割り込んで来やがつて……。こいつがとんでもなく凶暴なヤツで、俺たち一人の手に負えなくて……」

バンダナを身に付けた空賊が慌てて弁明する。女に負けた……と弁明するのは『恥』以外の何物でもなかつたが、失敗に対する『罰』を恐れるあまりに正常な思考を欠いた彼は、とにかく言い訳をするのに必死だった。

ほかの空賊たちも、緊迫した空氣の中でとにかく恩赦だけを強く

希い、必死で頭を下げ続ける。

しかし、

「ほひ……今の時世に刀使いの女剣士か。それは珍しい……」

ビクンッ！

突然背後から聞こえたしわがれた男の声に、空賊たちの方が跳ね上がる。

特に……バンダナとゴーグルを身に付けた一人の空賊は青い顔をしてガタガタとその身を振わせ始めた。

背後に迫る……圧倒的な恐怖と、絶望感。

次の瞬間、

ざんつ！

鋭い銀光が閃くと同時に、機内に舞う赤い血飛沫。

振り返る暇すらなく、「」といふ音を立てて、一人の体が地に転がった。

周囲に赤い水溜りが蟠るとともに、濃い血臭が漂い始める。

倒れた二人に既に息はない。

瞬きする間もなかつた。ほんの一瞬の……しかし、その場に色濃く焼き付けられた惨殺劇。

あつさうとその命を奪い取られた二人の側にいた空賊たちの表情からは完全に血の気が引いていた。

「役に立たない者は殺せばいい。一人がかりで女にすら敵わんのなら、こいつらにもはや利用価値などない」

ひょうひ、と空氣を斬り、手にした刃の血を振り払いながら、二人の空賊を斬り捨てたその男は言つた。

「お……おいおい、ミスター・ルードマン。一体何人殺せば気がすむんだ？」

このままではワシらの目的を達成する前につけの船員は全滅してしまうではないか……！」

「ククク……、それもそうだな。
まあ無能なこいつらでもこの船を動かすことだけは出来るからな。
必要最低限の数は生かしておいてやるつ……。
おい、お前たち。運がよかつたな」

中年男の震えながらの一言で、『ルードマン』と呼ばれた男はその手にした凶刃を静かに鞘の中に収めた。

どうにか首の皮一枚繋げることのでき、恐怖と絶望から解放され心の底から安堵する空賊たち。中には腰が碎け、その場にへたり込

む者までいた。

「ボ……ボス、あんなどんでもねえヤツを雇つちまつて……一体
どうするんですか ? !」

中年男の側に控えていた空賊が「ソシ」と耳打ちする。

しかし、中年男は強情さをその表情の前面に押し出し、卑屈な笑
みを浮かべる。

「ふ……ふんっ、何をビビッてるか !
ヤツは世界政府ですら捕獲を拱くほどの大賞金首だぞ……? 味方に
いれば何も怖いものなどない !

今のワシリには強大な力が必要なんだ。誰にも邪魔されることな
く、白雲の中に眠る『天空竜の秘宝』を手に入れるためには……な
ー」

「さて……フォウル＝グランバースの捕獲の方は私に任せてもら
おつか。このゴリラにも任せていたのではいつまで経っても計画が
先に進まん。

それに……その『刀使いの女剣士』というのがどうにも気に掛か
る」

空賊たちのやり取りに気付いているのか、いないのか……クルリ
と踵を返し、ルードマンは血臭蟠る船室を後にした。

そのままに……蛇のようにねじりとした陰湿な笑みを湛えながら。

「久方ぶりに……血湧き肉躍るような気分だよ」

その1

戦場には悲しみと憎しみだけが渦巻いている。

多くの人間が、嘆き……渴き、苦しんでいる。

『光』を持つことなくこの世に生を受けた父は、とにかく人の心情を読み取ることに敏感だった。

父は、多くの戦場を経験していた。

戦争を繰り返すこの世界で、数多の争いの中に巻き込まれる者はたくさんいたが、空兵たちを除いて自ら進んで戦地に行く物好きなどほとんどいなかった。

それでも、父は争いが起ころるたびにその戦地の中心へと足を運び続けた。

一体それは何故なのか……幼いころのルルカには父の行動は理解出来なかつたし、父もあまり多くは語ってくれなかつたが、ある日母が教えてくれた。

そこに救いを求めている人がいるから……だから父は戦地に赴いているのだ……と。

戦地は多くの渴きに満ちている。

両親を殺された幼い子ども。

街を焼かれ、行き場を失くした老夫婦。

部隊が全滅し、生きる意味を失った兵士。

絶望の中に取り残された人々がたくさんいる。

そんな多くの人々に対し、父は救いの手を差し伸べて来た。

それは人間に限らず……例えそれが亞人であっても同じような境遇にある者は一切差別することなく、父は分け隔てなく接してきた。

そんな父の行動を、非難する人間はたくさんいただろ？

手を差し伸べられた亞人たちも、人間から恩を受けることを頑なに拒み、中には自ら死を選ぶ者までいた。

しかし……それでも、父は戦地に足を運ぶことをやめなかつた。

父は生まれつき目が見えなかつた。

だからといつてそのことを苦にするようなことはなかつたし、むしろ父は自分が光を持たずに生まれてきたことを逆に感謝していたという。

『もしも私に光があれば、私もほかの多くの人間と同じように亞人に對して憎しみを抱いていただろう。

自分たちとは異なるその醜い姿を目の当たりにして、激しい憎悪を腹の中に煮え滾らせていたに違いない。

だが、私には何も見ることが出来ない。

人間の姿も、亞人の姿も私には分からぬ。

だから二つの種族の間に存在するちっぽけな差異なんてちつとも窺い知ることなんて出来ないんだ。

人間と亞人。どちらも同じ、理性のある生き物だ。

違うのは外見だけ。その中にある魂の色はどちらも同じなんだよ』

そんな父を慕い、ルルカたち家族が住む辺境の街アストルーズには多くの人々が集まつた。

戦地で父に命を救われた人間たちが……そして、中には父の行動に心打たれ、導かれた亞人たちも。

辺境にあるとはいっても、人間世界に亞人たちを招くなんて奇行以外の何物でもなかつたが、父の考え方に寛容した街の人たちは、父の元を訪れる亞人たちも寛容に受け入れ、アストルーズの街は戦争最中にして人間、亞人が比較的良好な関係を築く世界でも稀有な街となつていつた。

そんな父が『盲目の剣聖』……としてその名を世に知らしめてい

るところを知るのは、ルルカが父を探し始めて間もなくのことである。

細い月が深淵に落ちた闇の空に浮かぶ。

静寂に包まれた街の家々の明りは一つ……また一つと消え始め、周囲を照らすのは夜空から降り注ぐおぼろげな星と月の光のみ。

眠りに就いた街の外れで、その大きな屋敷はひつそりとした明りを灯していた。

「お主たちはすっかり巻き込んでしまったの?……。本当にすまん事をしてしもうたわい」

接客用の大広間で、約束通りの粗茶を注ぎながら言つたのは……この屋敷の主、フォウル＝グランバース。

しかし、謝罪の言葉とは裏腹にその口調も表情も全く悪びれてはいない。

「……もういいわよ。謝られたってどうしようもないんだし。でも……これだけは忘れないで。

今日ところはもう一度と戻つて来ないんだつていうことを……」

丸椅子の上で器用に三角座りをして、思いつきり未練たらたらの口調でボソリと呟くルルカ。

結局……壮絶な口論の末、意地でも自分の主張を曲げないフォウルの前に敗北を喫した彼女たちは、彼の屋敷で一晩明かすことになってしまった。

もう二つなつてしまつた以上、高級レストラン『ブランティーノ』に行くことは完全に不可能である。

よしんば行くことになつたとしても、それはアドルの依頼を終えた後。自腹では、とてもではないがそのお高い敷居を跨ぐことなど出来ない。

血を呑む思いで夕食に出されたフォウルお手製の、ひたすら薄味の精進料理をヤケクソ氣味に放り込み続けたが、ここまで来たことを思つとやはり諦め切れないのでいた。

「さて……と。夜もすっかり更けてしもつたな。

今日はもう疲れたじゃろう。茶を飲んだら、とりあえず一休みするにしよつ。……じゃが、お主たちももう立派な関係者じゃ。寝る前にワシが空賊に襲われていた理由だけは話しておかなければなるまいな」

お互に出会いから名前、職業等の簡単な自己紹介をした以外では大した話はしていない。

ここまで巻き込まれてしまつた以上、普通ならば詳しく事情を説明されなければ納得できないところなのであるが、ルルカも……そしてアドルも、あえてフォウルから事情を聞こうとはしなかつた。

「あ……！　いやいや、無理に事情は話さなくともいいわよ！　あなたから受けた依頼はあなたをあいつらから守る」と。それはもう終わつたから、詳しい事情説明は望んでないわ」

慌てて話題をすり替えようとするルルカ。

相手は空賊。首を突つ込めば間違いなく面倒なことになる。

ルルカとしては、アドルの依頼を受けているからには、これ以上フォウルの言う『関係者』になり、厄介事に巻き込まれるつもりなどなかつた。

それは暗黙のうちにアドルも悟っていたようだ、彼もここまで極力フォウルが襲われていた理由については触れようとしなかつたのだが……。

「うむ、そうか。実はわしはとある生物の研究をしておつてな……」

「げつ、何が何でも巻き込むつもりだ……」

しかし、そんなルルカたちの言葉を完全に無視して、問答無用で話し始めるフォウル。

この偏屈老人が、こうなつたら梃でも効かないことは玄関でのやり取りで承知済みである。

ルルカとアドル、それにフードの中のこにゃくは、げんなりと表情を浮かべて、仕方なしにフォウルの話に耳を傾けた。

「まずは……これを見てほしい」

ところ変わり……屋敷内のフォウルの『研究室』。

自称『考古学者』だというフォウルは、若かりし頃にこの広く雄大な『空』に魅せられ、今日まで数十年もの間その歴史について研究を続けて来たらしい。

広い間取りに所狭しと並べられた本棚には、数え切れないほどの文献が敷き詰められている。

そんな自身の研究室に嫌がるルルカたちを無理やり招き、彼が見せたのは一枚の絵だった。

ルルカたちは、目の前に突き付けられた絵を見て目を細める。

「なに、このラクガキ？」

「まるでどこの二流画家が描いたようなシユール極まりない絵ですね」

「……ワシが描いた。あの空に浮かびし聖域……白領海の中に棲まつとされる、伝説の生き物……『天空龍』の絵じや」

ルルカとアドルの失礼な一言にこめかみを引き攣らせ、撫然とした表情を浮かべるフォウル。

「…………」

室内に氣まづい空気が流れた。

「て……てんぐつゅつ……？」

そんな空氣をどうにかしようか、ルルカは話題を逸らすかのよう
に眉を顰める。

思い切り膨れつ面を浮かべるフォウルの表情を見るに、既に手遅
れのような気もしたが、その『天空竜』というのが聞いたことのな
い生物の名前だ……ということは本当だつたし、気になることも言
つていた。

この『天空竜』といつ生物が、『白嶺海』の中に棲んでい
る。

「はつはつはつは！ 何を言っているんですか、おじいさん。あんな大雲の中に生き物が棲んでいいわけないじゃありませんか」

しかし……せつかくルルカが立て直し掛けた空氣をぶち壊すかのように、やおら大声で笑い始めたのは……ほかでもない、無神経人間のアドルだつた。

どうやらフォウルの発言を、老人の戯言として程度にしか受け止めていないうららしい。

確かに普通の人間が聞いたのならば、そう受け止めるのも無理のからぬことであるが……。

「……あんた、おととい熱弁振るつてた自分の主張笑つてるわよ

「（いい加減な兄ちゃんだな……）」

再び空気がぶち壊されたことを詰るのも忘れ、他人事のように笑い続けるアドルを見て、ルルカとこんにやくは呆れたように声を漏らした。

確か、アドルから受けた依頼は、白嶺海の中に潜む謎の生物の影を探る……というものだったはずである。

自分のことは完全に棚に上げて、フォウルの言ひことなどまるで信じていないうだ。

彼がこんな調子では、まともに彼の依頼に付き合つてゐる「かりの方」が馬鹿らしくなつてくれる。

……といつても、まだ仕事らしい仕事は何もしていないが。

「学会でこれを発表したときには、お主と同じように、集まつていて多くの研究者たちに笑い飛ばされるだけじゃったがな……」

「おっほん、咳払いを一つして、フォウルは拗ねたように天空竜の絵を机の引き出しに戻した。

確かに学会の場でこんなラクガキを発表されたのでは、天空竜の存在の信憑性に関わらず、笑い飛ばされることは必至だろう。

しかし……フォウルは未だ彼の発言と老人の戯言としか捉えていないルルカたちに対して強い視線を向ける。

「じゃが……天空竜は間違いなく存在する」

「で……でも、おじいちゃん。そこまで自信を持つていうからには、何かこのトカゲ……じゃなかつた、天空竜がいるっていう証拠はあるの？」

困り顔でルルカは問い合わせた。

そこまで強く主張するからには、それなりの確証があるといつことなのだろうが……偏屈なこの老人のことである。

妄想か……はたまたただの思い込みだという可能性だつてある。

「うむ。よくぞ聞いてくれた」

しかし、待っていました……と言わんばかりに、フォウルは自信ありげな表情を浮かべ、絵をしまい込んだ大きな黒櫻の机の中をゴソゴソとあさり始めると、今度は大切に箱詰めされている何かを取り出した。

何かと覗き込むルルカたち。

興味深そうに食い付いてきた彼女たちを見て、フォウルはニヤリと小さくほくそ笑むと、やたら勿体ぶり……そして仰々しく、その箱の蓋を開け放った。

その瞬間、中から淡い光が漏れ始める。

ルルカたちは思わず息を呑んだ。

「これは……？」

箱の中に収められていたのは、まるでクリスタルのような輝きを放つ、石の欠片。

細長い両端には明らかに折れたような形跡があるし、ところどころひび割れをしているが、そんなことがまるで目に付かないくらいに、その石は美しかった。

「数年前、研究のために聖地ディエール＝ダーナの靈山へ発掘調査を行ったときに発見した……天空竜の化石じや」

「……」とばかりに血漫げに胸を張るフォウル。

ルルカとアドルは、箱の中のフォウルが『化石』だと主張するものをしげしげと眺め回す。

「確かに……ところの割れ目を見た感じは何かの骨のよじりですね」

「うん。キレイね。」

でも……一体これがどうして天空竜の化石だなんて言い切れるの？」

「つむ、そもそもワシジが天空竜の存在を確信したのは……ある出来事がキッカケだったのじや。」

あれは……そう。ワシジまだ考古学者として駆け出しだったころの話じや……」

「げつ……。何か語り始めた……」

「これは、また長くなりそうな感じですね……」

せりふと説明してくれるものと思ひきや……どうやらそれはフォウルの過去にまで遡るらしい。

老人がする若かりし頃の話ともなれば、長引くことは目に見えている。話をフツたのは確かにルルカだったが、まさかこんな展開に

なるとは予想だにしていなかつた。

揃つてゲンナリとした表情を浮かべるルルカとアドル。

「（ふわあ～あ……。ルルカ、おれもう寝るわ。

お前も寝ることになつたら、ちゃんとベットに移してくれよ）

「あつ……」の裏切り者！

もう付き合つてられんとばかりに一つ大欠伸だけ残すと、せつとフードの奥に引っ込んでしまうこんにゃく。

ルルカは抗議の声を上げるが、そんな彼女などお構いなしに、フオウルの話は始まつた。

その4

空には無限の可能性と浪漫が満ち溢れている。

フォウルは空に魅せられた人間の一人だった。

フォウルのような研究者だけでなく、行商、技師、空兵、果ては空賊まで……この空に惚れこんでいる者たちはたくさんいる。

人々は遙か上空に広がる大空に対して、大きな憧れを抱いていた。

そもそも……人々が大空に対して憧れと無限の可能性を抱くようになったのは、ある一つの王国の存在があつたからだ。

空の王都ウインダリア王国。

遙か大昔より、白嶺海の中に浮かぶ『浮遊大陸』に君臨する大王国である。

そこには確かに、大空に対する幻想が実在した。

だから人々は夢を見続けた。

自分たちが描いた幻想は、実在するのだ……と。

大いなる憧れを抱き、それを実現させようと、人々は必死で手を伸ばし続けた。

あれは……そう、フォウルが考古学者としてまだ駆け出しの頃だった。

技術革新が起こり、人々が大空へと舞い上がる翼を手にして間もない頃、研究チームとともに白嶺海へ初めて調査に行つたときのことである。

この世界には全部で七か所の白嶺海が存在する。

フォウルたちが調査に訪れた白嶺海は、通称『北の白嶺海』。七つの白嶺海のうち、最も北に位置する白嶺海である。

活動拠点として定めた、『ディエル＝ダーナ』の街に大量の物資や資器材を運び込み、満を持してフォウルたちの調査は始まった。

しかし……調査初日。

「フォウルたち研究チームの乗ったエア・シップ『シーボルト号』は、突然発生した未曾有の大嵐に巻き込まれた。

激しい烈風と雷の中に呑み込まれた機体は深刻なダメージを負つた。

翼が破れ、舵が壊れ、制御不能の状態に陥ったシーボルト号は、ただ猛然と吹き荒れる嵐に翻られ続けた。

もう生きた心地がしなかつた。

フォウルたちは死を覚悟し、全員で空の女神に対して祈りを捧げた。

果たして……その祈りが届いたのだろうか。

気付いた時には、先程までシーボルト号の外で轟々と吹き荒んでいた暴風は止み、ただ静寂のみが空を支配していた。

猛威を振っていた嵐が忽然と消え去っていたのだ。

嵐の中から脱したのだろうか……。

しかし……どうにも様子がおかしい。

嵐が止むにはあまりにも唐突過ぎたし、自分たちが見慣れた空が、

そこには存在しなかつたのだ。

前も、後ろも、上も下も、どこを見渡しても辺り一帯が真っ白。

一体ここがどこなのか……、何故自分たちがこんな場所にいるのか。放心状態だったフォウルたちには詐索する気力もなかつた。

嵐にやられた舵が効かないのは相変わらず。しかし、シーボルト号は静寂とともに白い空域の中を推進する。

「ここは……天国だらうか。

ああ、とうとう自分たちは死んでしまったのか、と……ついにはそんな境地にまで至つた。

しかしそのとき、それは突然姿を顯にした。

「フォウルたちは……我が目を疑つた。

白く剃り立つ壁が割れ、その中から目の前に現れた巨大な黒い影。シーボルト号がまるで豆粒に見えてしまつほど、まるで山のよう

に大きな影だった。

一体それが何なのか……フォウルたちには想像もつかなかつた。

その影は全体を大きくうねらせながら、シーボルト号に寄り添い、まるで導くかのように、白い空域をたゆたつて行く。

それは、まるで夢を見ているのではないかと疑つてしまふような幻想的な光景だった。

そして……そのときになつてようやく気付いた。

田の前の影が、今まで見たこともない……そして想像を絶するほど巨大な生物であるということに。

気付いた時には、そこには見慣れた空が広がつていた。

嵐は止み、つい先程まで静寂が満ちていたはずの空には再び激しい雨が降りしきつていた。

消息を絶つっていたシー・ボルト号を搜索していた空軍の救助船に助けられ、フォウルたちは、どうにかディエル＝ダーナの街に戻ることが出来た。

命からがら生還したフォウルたちは放心状態だったが……研究チームのメンバーたち全員が確信していた。

自分たちがかつてまでいたあの白い洋域は、まさしく白嶺海の中。
そして白嶺海の中にはまだまだ未知の生物たちが……そして多くの秘密が存在するのだといふことを……。

その5

「……で、そのときに見たのが、さつきのラクガキ……じゃなかつた、絵に描いた竜つてわけね」

睡魔との壮絶な闘いを繰り広げつつ、律儀にもルルカはフォウルの思い出話を最後まで聞いていた。

一方、隣で一緒に聞いていたはずのアドルは、己の欲望にあっさりと敗北し、いつの間にやら豪快な鼾をかいている。

「うむ。完全な姿ではないがな。ワシが見たのは、あの巨大な天空竜の一部のみ。後はワシの類稀なる想像力を駆使して描いたものだ」
そんなアドルのことは丸つきり無視し、自慢げに語るフォウル。だが、彼の偏屈な想像力とお粗末な画力のみで下界に存在が伝えられた天空竜も氣の毒である。

「その後、我々は『ティエル』ダーナに聳える靈山『リア』『グラン』で発掘調査を行つたのだが……そのときに発見したのが、この化石じゃな。

発見したのは標高五千メートルを超える地点。そこにはもう生物はおろか草木すら生息しない。そんな場所で発見される化石といつたら……」

「空から……白嶺海の中から飛来してきた生物のものとしか考えられない……ってわけね」

ルルカの言葉に、フォウルは満足げに頷いた。

「然様。白嶺海の真下にあるディエル＝ダーナの街にも、遙か古より天空竜にまつわる数々の伝説が残つておつた。

その全長は街を呑みこむほど巨大じやとか、干ばつの村に大雨をもたらしたとか……。

まあ確かに、ワシらがあの白い空域の中で見た天空竜の姿は見上げるほど巨大じやつたし、あの時の大嵐も天空竜が現れる予兆であつたと考へれば、これらの伝承にも信憑性が持てるな。

それから……天空竜が死ぬときは空が滅ぶときじやとも伝えられておる。

この化石が天空竜の物じやと確信したのはな、かつて天空より産み落とされたとされる天空竜の『卵』に、その色艶が似ていると現地の者に聞かされたからなんじや。もつとも、その卵についても、数ある伝承の中の一つとして言い伝えられてあるものに過ぎんが……

…

「天空竜がいるかいないかはおいといて……確かにこんだけす」いお宝なら誰かに、狙われたつておかしくはないわよね」

ルルカは感慨深げに頷いた。この化石が本当に何かの生物の化石であるならば、その学術的価値は計り知れないものであるはずだ。

「あの空賊たちはこの天空竜の化石を狙つて、あなたのことを付け回してたつてわけね」

「つむ、そうでもあるが……厳密に言えばそうではない

ルルカの言葉に、しかしひフォウルは静かに首を横に振る。

「奴らが狙つておるのは、この化石もそいつじやが、天空竜に関する

ワシの研究の全てじゃよ。

奴らは生きた天空竜そのものを狙つておるんじゃ」

「天空竜そのもの？」

「つむ……。奴らの……あの空賊団の首領の名は、ジエフ＝ルーガー。

金儲けのためならばどんな非道なことにも手を染める強欲な男じや。

天空竜という未知の生物を捕獲すれば……莫大な金がヤツのもとに転がりこむこととなる。奴らは天空竜をただの金儲けの道具としか見ておらんようじや。

……悲しいことじや あないか。当時ワシとともにティエル＝ダーナへ行き、あの白い空域を体験した者は……皆、死んだ。

その後、ワシは方々で天空竜の存在を主張し続けたが……信じてくれる者など誰もおらなんだ。

それが……初めて天空竜の存在に賛同してくれた者たちが、天空竜を悪用しようとする者たちじやつたなんてな……」

言いながらフォウルは少し寂しげな表情を浮かべた。

出会つてからまだ半日程度しか経つていないが、この老人のこんな表情を見るのは初めてだつた。

それだけ彼の天空竜に対する情熱が真摯で、本物であるといふことだらう。

「ここに来て、この偏屈老人の人間らしい部分が初めて垣間見れたような気がした。

「そつか……。

でも、よかつたの？ そんな大切なものを私たちなんかに見せちゃつて。

私たちが善人だなんて保証はどこにもないのよ。もしかしたら、そのジエフ何とかつていう空賊みたいに、あなたの研究を悪用しようって考えるかもしれないのに……」

「構わんよ」

しかし……ルルカの懸念など関係なしに、フォウルはあっさりと頷く。

確かに、ルルカは瞬間この老人を空賊から助けた。とはいってもそれは依頼を受けたからである。まだフォウルから信頼されるようなことは何一つしていない。

すると、フォウルはやおら宙を仰ぎ、恍惚とした表情を浮かべた。

「お主は似ておるんじや……。ワシが心から信頼し、敬愛してあるあの男に……。

昔出会った、あの畠田の剣士……カミオ＝シエルに、な

「…………えつ ？」

「ドクン……

突然の……そして、あまりに予想外の一言。

ルルカの鼓動が一オクターブ高鳴った。

カミオ＝シエル。

ずっと追い求めて来た、その名前。

「……人……父さんのことを知っているの……？！」

瞬間、ルルカは我を忘れてフォウルの胸倉に、ぐわしつ！ と
掴みかかっていた。

「あ……あああなた、父さんのことを知ってるの？！
教えてっ！ 父さんは今どこでどうしているの？！」

「くつ……苦しつ……！」

気付かぬうちに、その両腕に込められていた渾身の力。

フォウルの胸倉を締め上げ、その体を前後左右にブンブンと揺さ
ぶり始める。

「…………つ……！」

「どうして黙つてるの？ ちょっともつたいぶつてないで教えな

そこよー！

悶絶しているフォウルの表情になど、興奮の極みに達したルルカはまるで気付いていない。

「ち……ちょっと、ルルカさんー！」

「（お……おい、落ち着けってルルカー！）さんが窒息死しちまうよー。」

騒ぎに気付いて田を覚ましたアドルといふにやくが、慌ててルルカのことを止めようとする。

一人の必死の制止により、ルルカはハッとして我に返った。

「（うひ……）めんなれー！興奮しちゃって、つい……」

田を剥き掛けたフォウルの表情によく気が付き、慌ててその手を離す。

「げほー……！ げほげほげほげほげほー……！」

「や……やあねえ、オーバーなんだから。あは……あははは……」

やつと解放され思い切り咳き込みまくるフォウルを見て、ルルカは渴いた笑い声を漏らした。

その6

「ふう……。お前さん、カミオ＝シエルの娘であつたか。
これはまた……何とも数奇な廻り合せよ」

粗茶を淹れ直し、ようやく息を整えたフォウルは、突然のルルカの暴力行為に怒り出すこともなく、感慨深げに呟いた。

その双眸に恍惚とした光を宿している。

まるで……昔のことを思い出しているかのようだ。

「あなた……、父さんの……カミオ＝シエルのこと知つているの?
？」

ようやく落ち着きを取り戻したルルカも、今度は極力冷静に……
そして恐る恐る問い合わせる。

フォウルは深く頷いた。

「おつ……教えて！　あの人は……父さんは今どこにいるの？
！」

「知らん」

「…………は？」

「じゃから、彼の居場所など知らんよ。

ワシが彼に会ったのは、二十年前の『ドゴラ戦争』時のことじや。

亜人による空襲を受け、突如として戦場に変わった街で路頭に迷つておったワシは彼に救われたのじゃ。

いや……あれはワシだけではなかつたな。生き残っていた街の者たちも……そして、機体を落とされ死を覚悟していた亜人たちにさえ彼は救いの手を差し伸べた。

種族間の差異を跨ぎ、戦場を希望の光で満たしていくその姿は、まさしく『剣聖』の姿。

あれほど素晴らしい男を、ワシは未だかつて見たことがない

「も……もしかして、おじいちゃんが父さんに出会つたのって……」

「つむ。それ一回つきりじや」

ガックリ、と……ルルカは思い切り肩を落とした。

フォウルが父に会つたのは、ルルカの生まれる以前の話である。失踪前の父の話を聞いたところで、何の手掛かりにもならない。父の高評を聞くのは娘として鼻が高かつたが、いま彼女が知りたいのはそんなことではなかつた。

「しかし、二十年経つた今でさえあれほど見事な男のことは忘ることは出来ぬよ。生きているうちに、是非とももう一度だけ会いたいものじゃよ。

彼は……カミオ殿はお元気かの……？」

十三年前……父が突如として謎の失踪をしたことを告げると、フォウルは大層驚き……そして本当に残念そうに肩を落としていた。

父に再会したいといつ気持ちは彼も同じだったようだ。

「そうか……。あのカミオ殿がのう……。

カミオ殿が突然家族を見放すとは考えられぬ。何か……余程のことがあつたんじゃろうな……」

この偏屈な老人がここまで神妙な表情を浮かべるとは、ルルカは思わなかつた。余程父のことを尊敬しているようだが、それだけ父が戦場で多くの仁徳を築いてきたのだろう。

戦場での父の行動の詳細をルルカは知らないが、話だけ聞いてみると、とてもではないが自分の父親であるとは思えなくなつてくる。

「それでお前さんは一人力ミオ殿を探す旅を続けてあるといわけか」

「うん……そなんだ。探し始めてから今日まで全く手掛かりなんて掴めてないんだけどね……」

消沈気味に自嘲の笑みを浮かべるルルカ。

ようやく手掛けりを掴むことが出来た……と思つていた矢先、思い切り肩すかしを喰らう羽目になつてしまつたルルカの落胆は大きかつた。

しかし、そんな彼女を元気づけるかのように、フォウルはパツと笑みを浮かべる。

「な、に、そう悲観することもない。カミオ殿は顔も名も世間に知られてゐる。諦めずに探し続ければ、きっといつかどこかで廻り合

えるじゅ らひ

「やつですよ！ ルルカさん」

すると……やおら一人の話に聞き入っていたアドルが声を上げた。何やらつい先程までと比べても、随分と声色が高い。彼も消沈するルルカのことを元気づけようとしているのか……と一瞬思ったが、

「僕、いいことを思い付いたんです！」

今回の依頼の報酬ですが、現金はやめてうちの会社が発行する新聞の尋ね人欄にお父さんのことを掲載する……というのはどうでしょう？』

「（こ）こいつ……報酬ケチつてより安い方向に持つて行こうとしてやがるな）

「現金以外は受け付けません」

アドルの企みをあっさりと見破り、その申し出をきっぱりと断るルルカ。

浅はかな企みがばれたアドルは拗ねたように床の上に『の字を書き始めた。

「う～む、それではこんなところにいつまでも引き留めておくわけにもいかぬな。お前さんたちは明日にでも街を発つとよからへ」

「えつ、でもいいの？」

突然のフォウルの申し出に、ルルカは声を漏らした。昼間はあれ

だけ必死でルルカたちに助けを求めて来たといふのに、それがあつさりと引き下がるなんて少し意外だつたのだ。

「ワシのことなら心配するな。明日、近くの街に住む古い知人がレーヴォルの街に来てくれるこことになつとるんじやが、彼が用心棒をしてくれる。

あれくらいの規模の空賊団ならびにかやり過ごせるじやうりつ、お主たちが街から出るときにも、きっと協力してくれるじやうりつ」

「へえ、そんな頼りになりそつた人がいるんだ？」

「うむ。まあ、酒好き、女好き、ギャンブル好きの、顔も口も性格も悪いどうしようもない男じやが……、腕っ節は強いし機械技師としての腕も一流じや。心配することはない」

「そ……そいつ、口クな奴じやないんじや……」

一体どちらが空賊かと疑つてしまいたくなるようなその人物像に、ルルカは不安げにヒクヒクと頬を引き攣らせた。

しかし、彼がそう言つてくれるのなら、何も躊躇することはない。フォウルの研究を狙つてこよう空賊団も、昼間の連中を見た限りではあまり大したことはなさそうだ。

その『用心棒』という人物がいれば、おそらくどうにかなるだろう。

ルルカたちは、明日……この街を発つ。

その子は普通の人間とは違っていた。

肌の色も、瞳の色も、ちょっとした習慣や、言葉の訛りなんかも。でもルルカはそれを気にしたことはなかつたし、ルルカの住んでいたアストルーズの街には、その子と同じような人はたくさんいた。ルルカには世界のことあまりよく分からなかつた。

アストルーズが人間世界の中心的な都市から遠く離れた辺境の街だつたから……そんな理由もあつたかもしれないが、何故世界で争いが起こっているのか……、何故少し見た目が違うだけで憎しみ合うのかなんて、とても分かるはずがなかつた。

いつまでも争いのない、平和な世界が来ないかな……と、子ども心ながらそんなことを思うことも少なくなかつた。

そして……少なくとも、アストルーズの街だけはいつまでも平和なときが続くものだと思っていた。

お父さんがいる限り……そして、この街の人たちが温かな慈しみの気持ちを忘れない限り。

しかし……平穏は突如として打ち砕かれることとなる。

彼らは突然街にやつて來た。

彼らもルルカたちと同じ、正真正銘の人間だった。

しかし。

略奪、暴行……そして、殺戮。

アストルーズの街は、戦争に紛れて現れた突然の来訪者たちの手によつて非道の限りを尽くされた。

同じ人間なのに、何故そんなことをするのか……。ルルカには到底理解なんて出来なかつた。

ルルカたちは、必死で逃げた。

激しい炎に飲み込まれた街から少しでも離れるように、わけも分からず、とにかく逃げることしか出来なかつた。

その両手には、ルルカの手を強く握り締める一つの温もりがあつたような気がする。

お母さんは……一体何をしていたのだろう。

お父さんは……一体どこへ行つてしまつたのだろう。

二人とも、こんなこと絶対許さないはずなのに……。

気が付いたときには、ルルカたち以外に街の人たちの姿はなくなつていた。

代わりに自分たちの周りを取り囲んでいたのは……街を焼き尽くした非道な侵略者たち。

ルルカの後ろには……守るべき一人の姿があつた。

守らなくちゃ……この子たちだけは、絶対！

そんなハッキリとした……強い意識を持っていたことだけは、今でも覚えている。

自分はもうお姉ちゃんなのだから……この一人は自分が守つてい

かなければならぬのだと、お父さんと約束したのだから。

ルルカたちを取り囲んだ者たちの内、一人が彼女たちの前に歩み出た。

そして、口元に笑みを浮かべながら、彼女たちに……いや彼女だけに対して何かを囁きかけた。

それは、まるで悪魔のような……ゾッとするほど残酷な笑みだつた。

「その…………を…………せば…………けは…………やる」

ルルカの背筋は凍り付いた。

……もつ何度も同じこととなるだらう。

全身にじっととした嫌な汗をかき、背中に張り付いた冷たいシーツに不快感を覚え目を覚ますのは。

案内された客間の一室で、遅めの就寝に就いていたルルカとこんなやく。

しかし、折角の久し振りにベッドで眠ることが出来るというのに、どうにも寝心地が悪い。エア・ライドの固いシートの方がぐっすり眠れる貧乏症の自分が少し悲しかった。

大きく高鳴る鼓動。

瞼の裏に焼き付いた、ぼんやりとした陰鬱なイメージ。

またあんな妙な夢を見てしまったのは……父の話を聞かされたからだらうか。

夜も深いというのに、何だか気分が落ち着かず、目がハツキリと冴えてしまっていた。

何度か寝返りを打つてみるが、もつとでも眠ることは出来そうしない。

「…………」

ふう……と大きく息をつくと、ルルカは額の汗をぬぐい去つてベッドの上から半身を起こした。

枕元で静かに眠っているじんにゃくを起しやせぬように気を付けながら、ゆっくりとベッドから身を起こす。

落ち着かない気分を変えるため、少し夜風に当たりに外に出る」とにしたのだ。

しかし、

「どうか行くのか ？」

部屋の外へ出ようとしたらとき、突然背後から声を掛けられる。

ドキッとして振り返ると、ベッドの上で目をこすりつつ大きな欠伸をするじんにゃくの姿が。

「じめん……また起しちゃった ？」

「ん~にゃ……、ちょっと前から起きてたよ。

ど~もこの安物の固いベッドはセレブ肌のおれにゃ合わねーみたいだ

短い四肢をぐねぐねと回しながら、一歩前に進むことを厭がる事になってしまった。

思わずルルカはブツと吹き出してしまった。

お気楽なことにやくのおかげで、夢のせいだとひとつと重たくなつていた気持ちが少し軽くなつたような気がした。

「それなら……少し一緒に散歩でもする？」

フォウルの家は「じゅわや」じゅわやしているが、外観通りやたらと広い。夜風に当たりに外に出ようとしたつもりが、一人は屋敷内で完全に迷ってしまった。

「おい……ルルカ。」「じりじりだ？」

「……分かんないわよ。大体何だつて明りの一つもないのよ」

広い屋敷内の廊下を照らすのは、窓から差し込むおぼろげな月と星の光のみ。

周囲はほぼ漆黒に包まれ、ルルカたちは自分たちが今どこを歩いているのかも分からぬような状況だった。

フォウルはこの屋敷に一人で住んでいると言っていた。部屋には空き部屋も多く、どれが自分の部屋なのかの判断もつかない。これでは部屋に引き返そうにも引き返すことが出来ない。

「全く……家中で迷うヤツなんて初めてみたぜ。しつかりしてく れよな」

「あのねえ！ よく言つわよ、あんたずーっと私のパークーの一
ードの中に入つてるだけのクセに。じつせ誰もいないんだから、あ
んたも出てくりやいいじゃん」

「ばばば……バカな」と言つくなよな！ そんな油断しといて、も

しあの兄ちゃんに見つかってみろ！　すぐに記事されて、あつと
いう間にサークス行き決定だよー！」

「そんなわけ……あり得るわね、確かに。

……つたく、そんなに見付かるのが怖いなら少し黙つてればいい
じゃん。フードの中から無責任に文句ばっかり言わないでよね」

ブツブツ文句を言いつつ、パークーのポケットの中にズボッと両
手を突っ込むルルカ。

「……あれ？」

そこで妙なことに気付いた。

右手に触れる硬質の触感。

訝しげな表情とともに、ポケットの中からそれを取り出してみる。

川の中で拾つたあの石だ。昼間ポケットの中に入れっぱなしにして
しまっていたようなのだが……。

「どうしたんだ、ルルカ？」

「いや、この間拾つたあの石なんだけど……何だか少し大きくなつ
てるよ……」

「何だつて？」

石を目の前にまで近付け、小首を傾げるルルカ。ここにやくもフ
ードの中から這い出て、目をすぼめる。

しかし、暗闇に邪魔され、詳細に確かめることが出来ない。

「うーん……分かんねえな。気のせいなんじゃないのか？」

「ううかなあ……。それに、なんか心なしかあつたかいような気がするんだけど……」

「ずっとポケットの中に入れてたからだよ。それこそ気のせいだつて」

「うーん、そうなのかも……」

言われてみれば、確かに温かく感じるのは川の中で拾った時の冷たかったという印象が強過ぎたからなのかもしねり。

大きく感じたのも、指先の手の感触だけでの判断なので、おそらくただの勘違いだったのだ。

依然として腑に落ちないながらも、ルルカは再び石をポケットの中に戻した。

再び光を求めて一人が屋敷内をうろついていると……一室だけ明かりを灯している部屋を発見した。

「…………？」

その頃になると、ようやく暗闇にも田が慣れ、なんとなく周囲の状況が分かるようになつてきていった。

よくよく見てみると、そこは見覚えのある部屋だった。

『研究室』。

就寝前にフォウルが天空竜について説明してくれた部屋である。

フォウルがまだ起きているのだろうか……。もしさうであれば、部屋まで連れて帰つてもらおう……と、そんなことを思いつつ、ひょいと部屋の中を覗き込む。

しかし、そこにいたのはフォウルなどではなかつた。

「……あれ、アドル？」

「げつ！ ル……ルルカさん」

そこにいたのは、ルルカと同じく密間に案内されたはずのアドルの姿が。

寝巻姿ではあるが、その手にはいつも手にしているカメラと……そして、大きな黒櫻の机の上には、フォウルが大切に引き出しの中に戻したはずの、天空竜の化石。

『…………』

無言で見つめ合つ二人。

『気まぐれ』の空気が室内を支配した。

やがて……ルルカはアドルの姿と天空龍の化石とを交互に見比べ、顎に手を当て、目を細める。

「あんた……、『くらスクープ』がほしにからつて、まさか化石を盗むつとしてるんじゃないでしょーね？」

「しつ……失敬な！ 『くら僕だつておもでしませんよ！ ただ……ちょっと盗撮させてもらひおつと思つただけです！」

ルルカの指摘に、しかしみアドルは憤慨したかのように声を荒げた。

「あ……あのねえ、びつかりてひり堂々と言へる」とじやないじゃん。

「やめなさいば。そんなことしたらあのおじこちゃんに怒られるわよ？」

あんだけ大切にしてゐるつていつのに……」

呆れたように咳くルルカ。肩の力がガクツと抜けた。

対して、アドルは『』に来てようやく慌てて弁明を始める。

「だ……だつて、正直に撮らせてくれだなんて言つても絶対に撮らせてくれるわけないじやないですか！」

そうだ！ この写真を載せた新聞が売れたら、ルルカさんへの謝礼も上乗せしちましょつ。だからちょっとだけ目を瞑つていて下れい！」

「よし、じゃんじゃん撮りなさい」

謝礼の上乗せ。

その言葉を聞いた瞬間、ルルカの正気は吹き飛んだ。

白い化石を手に取り、撮影のしやすいように設置し直す。

「（おい、ルルカ。このケチやろうが謝礼上乗せなんてするわけねーだろ。つまごと丸めこまれてんだよー。）」

しかし、こんなやぐの一言で、ルルカはハッとして田を覚ました。

どうやら田先のわずかな利益に田が眩み、ほんの一瞬だけではあるが我を忘れてしまっていたらしい。

「い……言われてみれば……！ やっぱ盗撮なんてダメよ。 そのネガヨコしなさい！」

「や……やめて下さい！ 僕はこの『真』を何としても社に持つて帰るんだ！」

ルルカはカメラを奪い取るうとするが、対してアドルもカメラを守ろうと必死の抵抗を見せる。

狭い室内で壮絶な押し合へし合いを繰り広げ始める二人。

しかしそのとき、

『じゅつ ー！

突如として深夜の静寂を打ち破るかのような、爆音が周囲に轟いた。

「な……なに？！」

窓からおぼろげに差し込んでいた僅かな光が、圧倒的な光の束となつて周囲を眩く照らす。

暴風が吹き荒れているのか……屋敷全体が揺れていた。

圧倒的な光とともに現れたこの音の発生源は、外。

思わず耳を塞いでしまつほどこの轟音に、ルルカは聞き覚えがあつた。

誰でも一度は聞いたことがあるだろ？。あるいはターミナルで、あるいはエア・ステーションで……そして、あるいは街中の空で。

空から降り注ぐこの音は、エア・シップのハンジン音だ。

しかし、これだけの大音量で聞くとなると、この音の発生源であるエア・シップはかなり間近にいるといふことである。

「な……なんじや！ 何事じや？」

突然、戸惑いの声とともに研究室の扉が乱暴に開かれた。振り返ると、そこには血相を変えたフォウルの姿が。

近くの血室で眠つていたようだが、この爆音に叩き起されたようだ。

研究室内にいるルルカとアドルの姿を目に見て、フォウルの目の色が変わった。

「な……何をしておるんだ、せ、お主たの
一。」

まるで罪人を咎めるかのように詰め寄つて来る。

一瞬爆音のことも忘れ、その剣幕に押されたルルカは慌ててアド
ルを指差した。

「わっ……私は何もしてないわよ！ 化石を盗もうとしたのは
マイツ……」

「ちちちちちちちゅうと、ルルカさん！ そうじやないでしょ？
ややこしくなるようなことは言わないで下さい！
フォウルさん、心配しないで下さい！ 僕は六割方潔白です！」

「わ……わけの分からんことを……。それより、Jの騒音は一体何
じゃ?
? お前さんたちの仕業か
?」

「そんなわけないじゃないの！」

「そ……外へ……とにかく外へ出てみましょう……！」

「Jの爆音と混乱の中では、誤解を解こうにもそもそも話されない。」

音の正体を確かめるため、ルルカたちは誰に導かれる」ともなくバルコニーの方へ向かつた。

廊下の奥からバルコニーに出た途端、それまで響いていた音がさらに大きくなつて耳の奥を突き、思わず目を覆つてしまふほどの眩い光がルルカたちを照らし出す。

近くにいるものとは思つていたが、その巨大な影は予想していたよりもずっと近くに聳えていた。

大型飛空艦『エア・シップ』。

フォウルの屋敷より一回りも大きいそのエア・シップから放たれる膨大な量の光がルルカたちを……屋敷全体を照らしていた。

いや……、光を堪え目を凝らすルルカ。よくよく見ればその船はエア・シップではなかつた。

機体のあちこちに施された砲門や機関銃。

本来ならば空軍にしか所有が許可されていないはずの大型戦闘艦『バトル・シップ』である。

しかし……こんな場所、こんな時間に空軍のバトル・シップが現れるはずがない。

バルコニーには既に先客がいた。

一体いつからそこにいたのか……バトル・シップから照らされる光を背に佇む男が一人。

光に遮られ詳しい顔立ちは確認出来なかつたが、それでも目についたのは右目の大きな刀傷と、左腕に乱雑に巻き付けられたボロの布切れ、そして……長身瘦躯の全身から滲み出る研ぎ澄ませた刃物のように鋭い、殺気。

全身に纏つたその雰囲気は……明らかに異質であった。

「月の奇麗な夜だ。こんな夜に起こる惨劇は……ククク、さぞかし凄惨なものになるだろ？」

夜空にぼんやりと浮かぶ、刃のような細い月を見上げつつ、男はその細身の体とはおよそ不似合いのしづがれた低い声で呟いた。

「だ……誰つ……？」

大声で問い合わせるルルカ。その額にはじつとりとした脂汗が浮かんでいる。

突然の襲撃に心が動搖している……確かにそれもあつたかもしだれ

ないが、この男が放つ異様ともいいうべきフレッシュナーに完全に気圧されてしまっていた。

ルルカの問い掛けに答える代わりに、男の影からもう一人、別の男が姿を現す。

「ぐつふつふつふつふつふ。ついに見付けたぞ、フォウル＝グランバース」

ざらりとした耳障りな不快な声が耳をつく。

姿を現したのは、長身瘦躯の男と比べるとかなり背も低く、小太りでずんぐりとした体型の中年男。

金に物を言わせて着飾つたような、成金趣味のセンスの悪い格好をしている。

「ジエフ＝ルーガーかつ……！」

その男の存在を認めた瞬間、忌々しげに、フォウルはその名を呴いた。

「ジエフ……？」

ルルカとアドルは揃つて眉を顰める。少し前に聞いたばかりの名であつた。

それは確か……フォウルの研究を狙う空賊団の首領の名。

「それじゃあ、あいつが……？」

「全く手間を掛けさせおつて……こんな町外れに住んでいたとは、探し出すのに苦労したわい。

まあもつとも、見付けてしまえばもつあとはいつちのものだがな！

がつはつはつはつはつはつはつは ！

さあ、フォウルのじさんや。ワシリガに来た理由はもつとつぐの昔に分かっているだらう？

面倒な話はなしにしよう。わざわざと天空龍の化石と、その研究資料の全てを渡してもらおうか ！

「な……何度も言わせるな！あれだけは死んでもやらん！とつとこの場から立ち去れい！」

これまでを見せたことのないよつた劍幕で怒鳴り声を上げるフォウル。

その口調の中に込められたのは……明確な怒り。

天空龍を守るうとする強い意志、そして天空龍を食い物にし、金儲けの道具として利用しようとするこの空賊たちに対する激しい憤りがはつきりと現れていた。

「ふんつ、相変わらず答へは一緒か。本当に頑固なジジイだ。
あ……ワシらも最初からお前みたいな偏屈者と話しあおつなどとは思つておらんがな。

空賊が目的を果たすための手段は……論理に勝る暴力だ ！」

言ひながらジエフはそそくせと後ろに引き下がる。

「さあ、ミスター・ルードマン。あなたの出番だ。
氣の済むまで斬り刻んでやるといい」

ジエフに促されるかのように……ルードマンと呼ばれた長身瘦躯のその男は、白木柄の刀を左手に携え、ゆっくりとルルカたちの前に歩み出た。

思わず後ずさるルルカ。

いや……ルルカだけではない。

アドルも、フォウルも。

フードの中のこんなにやくもガタガタとその身を震わせていた。

男が放つ、圧倒的な威圧感。

隣りに佇むジエフ＝ルーガーなどとは比べ物にならないほどの、異常なまでの存在感。

まるで肉食の猛獸と相対したかのように、生物としての本能がそれを知らせていた。

この男は……危険である。

「昼間空賊たちを追い返した刀使いの女剣士とは……キミの」とだ

な？」

警戒心を剥き出しにするルルカたちに対し、ルードマンはまつむらと笑みを浮かべつつ、しづがれた低い声で問い合わせる。

「そ……そっだけど、だとしたら一体何つ？！」

返すルルカの口調が自然と強くなつた。

少しでも氣勢を張らなければ、この男が放つ不気味なフレッシュヤーに呑み込まれてしまいそうだったのだ。

しかし、動搖からか……自分でも声が上擦つてゐることが分かる。

ルルカの答へに、しかしルードマンはまるで落胆したかのようふう……と一つ溜め息をついた。

「ふむ……そつか。

だとすれば……これほど興醒めなことはないな。

久方ぶりに刀使いの剣士と一緒に交えることが出来るかと思えば……

何だ、まるで『剣氣』など感じない。

おまけに丸腰ではないか……。

女だてらに無能とはいへ一人の空賊を倒したとなれば、多少腕の立つ剣士なのかと思えば……やれやれ、どうやらキミもただの一端の剣士に過ぎないようだな。

キミに少しでも『力』があれば、刀を取りに行く猶予でも『えようかと思つたが……どうやらその価値すらないじこ

「…………？」

ルードマンが言つてゐることの意味がよく分からず、眉を顰めるルルカ。

しかし……一つだけ、はつきりと分かつたことが。

それは……この男が確實にルルカたちを殺そつとしているということ。

「お……お主、ほかの空賊たちとは少し毛色が違うな。

一体何者じや……？ ジョフ＝ルーガーの用心棒か何かか？

フォウルが恐る恐る問い合わせた。

フォウルの研究を付け狙つていた空賊団の首領は、ジョフ＝ルーガーのはずである。

それも、話を聞く限りではかなりの傲慢な男のはずだ。

しかし……そのジョフ＝ルーガーが目の前のこのルードマンという男に対してだけは、どうにも少し遠慮がちで、畏縮し、いや……それどころか恐怖さえ覚えているのだ。

「用心棒……？ ククク、そんな奇麗なものではない」

お喋りに飽きたのか……それとも痺れを切らしたのか、どうやらもうあまり会話をする気のないらしいルードマンは、フォウルの問

い掛けを素つ氣なく切り捨てる。

そして、ルルカたちに向かつて、ずいっと大きく一步を踏み出した。

「殺し屋だ」

ゾクッ！

瞬間、ルルカの背筋に冷たいものが走った。

ルードマンが刀を引き抜いたその瞬間、研ぎ澄ませたその殺気がルルカたちに突き付けられる。

ゆらり……と、ルードマンの姿が一瞬ゆらめいたかと思うと、闇の中に焼き消えた。

次の瞬間、その姿はルルカたちの目の前に。

「つ……！」

ひょうつ！

空気が鋭く斬り裂かれる。

反射的に、ルルカは側にいたアドルとフォウルを押し倒すかのように身を伏せていた。

「さすがにこの程度はかわせるか……！」

どうやら今のは手加減たつぱりに放った様子見の一太刀だったらしい。

不敵に言い放つルードマン。

どうにか紙一重でかわすことが出来たものの、ルルカは今の一太刀で瞬時に悟つた。

この男は……自分などより桁違いに強い。

「ククククク……。

久方ぶりの獲物だ、簡単には死んでくれるな。
少しでも……長持ちしてくれよ」

躊躇殺しにする……。そう言つているのだ、この男は。

不気味な殺人鬼を目の前にして、ルルカたちは完全にその雰囲気に呑み込まれてしまっていた。

どうにかして、この場を切り抜けなければならない。

アドルとフォウルを連れて、この場を逃げ出さなければならない。
しかし……どうにか考えをまとめようにも、焦りと恐怖のせいか、
思考は全く正常に機能しない。

体勢が入れ替わったせいで、光が遮られ、ルードマンの顔がはつきりと見てとれるようになった。

その表情に浮かべられたのは……まるで蛇のような、ねちつとした冷笑。

「…………」

刹那、ルルカの表情が凍り付いた。

『ククク……。本当にキミたちは野蛮な連中だな』

『殺すなら……もつとスマートに殺さなければ

『さうひり……こんな風に、
な……』

：：

「…………」

つ……

「

遠い追憶の中で……眠っていたはずの亡靈が、呼び起される。

まるで瞳の中で火花が弾けたかのように、目の前がチカチカした。

同時に襲い来る、激しい頭痛と嘔吐感。

意識が……朦朧とする。

今、この瞬間は……果たして、夢か、現実か。

そんな判断すらつかなくなるくらい、ルルカの中から正常な思考は失われていた。

「お……おい、ルルカ！ どうしたってんだよ、ルルカ！！」

突然動かなくなつたルルカを、人目も構わず必死で呼び掛けるこ
とにやく。

しかし、すぐ耳元のそんなこんなにやくの声すらも「ルルカには届
かない。

その瞳からは生氣が消え去つてゐる。

「恐怖で呆けたかっ……！」

そんなルルカに対し、ルードマンは容赦なく凶刃を振り被つた。

濃厚な殺意の色を含んだ銀光が、ルルカの眼前に迫る。

闇夜に鮮血が舞う。

気付いた時には、ルルカの体は地に倒れ伏していた。

体にべつとりとした血が纏わり付く。

しかし……体が痛みを感じる』とはなかつた。異常は……『じりじりはない。

ルルカの側にもう一人、別の誰かが倒れていた。

その身に、ルルカよりも夥しい量の血を纏わり付かせて。

ルードマンが振り下ろす凶刃の餌食になつたのは……ルルカの体ではなかつた。

「ぐつ……うあああああ……！」

右の肩口を抑えながら蹲り、苦悶の声を上げたのは……アドルだつた。

ルルカにルードマンの刃が迫る寸前、咄嗟にルルカの体を弾き飛ばし、自ら身代わりとなつて凶刃の餌食になつたのだ。

おかげでルルカは辛うじて命を繋ぎ止めることができたが、ルルカを庇つたアドルが深刻なダメージを負つたことは明らかである。

「ふん……そ、うか、そ、んなに早死にしたいかっ……！
ならば……貴様の血から吸つてやろう！」

蹲るアドルに向かつて、ルードマンは切つ先を垂直に振り上げる。

「よ……よせり　ーー。」

寸でのところで、周囲に制止の声が響き渡った。

アドルに突き立てかけたルードマンの凶刃が、寸前でピタリと止まる。

ギロリ、とルードマンは必死で叫んだ声の主を……フォウルの方を睨み付けた。

「未来ある若者の命を奪うことはなかろう。……！」

それに、お前たちが用があるのはこのワシのまじめぢや。彼らは何の関係もない。頼むから……見逃してやってくれ。この老こぼれの……老い先短い命一つと引き換えに……！」

言いながらフォウルはルードマンの前に歩み出る。

「ダ……ダメです、フォウルさん……！」

痛みを堪え、声を振り絞るアドル。

しかし、そんな言葉は頑固なフォウルの耳には届かない。

そして……もちろん、冷徹な殺人鬼ルードマンの耳にも。

何も言わず、……両者は互いにむづくつと歩み寄る。

ざんつ ！

間合いが接近した瞬間、有無を言わせずルードマンはフォウルの脇腹を斬り裂いた。

「がはつ……！ ぐつ……つうつう……！」

大量の血を撒き散らしながら、フォウルはその場に蹲つた。

そんなフォウルを、冷徹な表情で見下すルードマン。

「勘違いしてもらつては困る。老こさらばえた貴様の命一つ程度では何も救えやしない。

そんな安い命に、もはや何の価値もないのだからな。

……もつとも、そんなゴリのよつた命でも私はきつちりと奪わせてもらつがね。殺人は殺し屋の楽しみの一つでもあるのだからな」

「ぐつ……！ ぐ……ぐまでも、汚い連中めつ……！」

倒れたまま殺意すらこもつた眼差しでルードマンを睨み付けるフォウル。

しかし、ルードマンの表情は冷笑を浮かべたまま変わらない。

まるで最後の最後まで必死で足搔こうとする草食動物を弄ぶ凶悪な捕食者のように、倒れたフォウルを見下している。

そして……ゆっくりとその刃を振り被つた。

「死ね。妄想ともつかぬ夢に無駄な時間を費やした下らない人生だ
つたな」

もはや万事休すと覚悟を決めたのか……固く両の瞳を閉じるフォ
ウル。

このままでは……フォウルも、アドルも殺されてしまひ。

「おいルルカ！ 頼むから田を覚ましてくれって！」
……おい、ルルカっ！！

必死でルルカを呼び掛けることにやぐ。

窮地の事態が、光を失ったルルカの瞳にぼんやりと映つた。

ルルカは……知つてゐる。

この先には……こんな最悪の事態の先には、いつでも悲しい結末しか待ち受けていないと、「」と。

もう一度と、あんな悲劇を味わいたくはない。

もう一度と、あんな悲劇を引き起こしてはならない。

こんなやぐの必死の呼び掛けと、過去のトラウマが、意識を現実へと引き戻した。

「やつ…… やめてえええええええええええつ……」

「つ……！？」

初めてルードマンの剣に動搖が走る。

振り下ろされ掛けた刃が止まつた。

次の瞬間、空間が焼け尽くされんばかりの白い閃光が周囲に進る。

「ぐあああああっ……！……な……何だあつ……？！」

閉ざされた視界の中から伝わつて来る、ジョフの動搖の気配。

「…………！？」

正気を取り戻したルルカだが、突然の状況をすぐには把握することができなかつた。

その場にいた全ての者から視界を奪つた、バトル・シップの照明を覆い尽くすほどの眩い閃光。

ジョフがこれほど動搖するということは、この白い光は空賊たちが放つものではないのだ。

「飛び降りろ――！」

間髪置かず、聞いたこともない誰かの声が響き渡った。

果たしてその声は味方のものか……はたまた敵のものか。

判然としなかつたが、悠長にそれを選別しているだけの時間などない。

とにかく今はこの最悪の状況だけは脱しなければならないのだ。

傷付いたフォウルを担ぎ上げ、アドルの手を引き、ワケも分からぬうちに、ルルカたちはバルコニーから飛び降りた。

「ふんっ、逃げよつたか。

近くに仲間がいたらしいな……。

まあいい。これでゆっくりとヤツの研究資料を奪えるといつもの

だ

光が治まり、視界が回復したその後……遠ざかって行くエア・ライドのエンジン音を聞きつつ、ジェフは口元に再び獻らしい笑みを湛えて呟いた。

「…………

対して、ルードマンの顔からはつい先程まで浮かんでいた笑みは消え去り、代わりに何やら神妙な表情を浮かべている。

「どうかしたのか、ミスター・ルードマン？」

いつもとは様子の違うルードマンの表情を見て、怪訝な顔をして問い合わせるジエフ。

「私の田も董碌したものだ。
てっきり丸腰だとばかり思っていたが……」

ルードマンは右手で自分の頬を撫でる。

そこから流れ出るのは……一筋の鮮血。

自分の体から流れ出す血を見たのなど……一体いつ以来になるとか。

一瞬のうちに付けられた頬の傷。

自分を傷付けたのは……何のことはない。バルコニーに落ちていた小さな石ころだった。

ルードマンは無造作に足元の石ころを拾い上げた。

「ククク……ちゃんと持っているではないか。
研ぎ澄ました、鋭い牙を……」

拾い上げた小さな石ころを握り潰すその表情に浮かぶのは……先程までの冷笑などではない、嬉々とした高揚の笑みだった。

「……つたくよー、じこさん。

あんたも無茶が過ぎるぜ。空賊相手に真っ向から喧嘩しようなんてよ。

ちつたあ自分の歳考えてくれよな

バルコニーから飛び乗った搬送用小型エア・シップの操縦席で、操縦桿を握りながら、その中年男は振り返りもせずに荒っぽい口調でそう言つた。

その声を聞いた途端、朦朧としていたフォウルの瞳に、再び生気が宿る。

「は……はて……？ デイズ……か。

お……お主のよつたな性悪者がここにいるとこ、ひいじま、どうやらここは天国ではないようじやが……。

用心棒を頼んでおつたのは……明日からじやと想つていたんじやがの……」

「なーに。レーヴェル方向に不審なバトル・シップが飛んで行くのが見えたんで、妙な胸騒ぎがして予定前倒しでやって来たつてわけよ。

空賊絡みのトラブル起こしそうな変わり者なんて、この辺りじゃあんたくらいしか思い浮かばねえからな

言いながら、デイズと呼ばれた男は豪快に笑い声を上げた。

「用心棒……？ それじゃあ……この人が？」

在り合わせの救急用具で簡単にアドルとフォウルの応急手当をしながら、未だ状況が判然としないルルカはキヨトンとした表情を浮かべたまま問い合わせる。

「つむ……。ワシの古い知人、機械技師のデイズ＝フォードじゃ窮地を脱したことに安堵感を覚えたのか、フォウルはしつかりとした口調を取り戻してそう言つた。

先程のバルニーで巻き起こった白い光は、ビリヤードの男が放つた目眩ましの闪光弾だったようだ。

「よお、爺さん。この小娘と、もやしまで一な兄ちゃんは誰だ？ 偏屈なあんたに、俺以外の友人がいるとは知らなかつたが……」

肩越しにチラリとルルカやアドルに視線を送りつつ、不審めいた問い掛けるデイズ。

「彼らはワシの優秀な助手たちじゃよ」

「嘘つけ。あんたに助手が出来るわけがねえ」

「…………彼らは街で偶然出会い、ワシが無理を言って一時的に空賊から助けてもらつた恩人じやよ。」

お前さんたちには……本当にすまないとをしてしまつたのう。悪かつた、許してやってくれ……」

ディズの皮肉を憮然とした表情で聞き流し、フォウルは伏し目がちにルルカたちに頭を垂れた。

屋敷の中で同じように謝られたときは何の謝罪の念も込められていなかつたが……今度は本当に心の底から謝罪していくよひだつた。

「い……いいんですよ、気にしないで下せ。」ひしてみんな無事に生きていたんだですし……」

「うん……やうね」

言つてルルカとアドルは互いに微笑を浮かべた。

幸いアドルとフォウルの傷は浅く、到底致命傷となり得るようなものではないようだつた。

躊躇殺しにすゐ……といつよひなことを、あの男……ルードマンは言つていたが、どうやらこんな調子で浅い斬撃を繰り返し、ジワジワと傷付けていくつもつだつたらしく。悪趣味なことこの上ない。初太刀しか喰らつていなことが幸いしたが、もしあのまま助け船が来なかつたとしたら、きっと今頃生き地獄を味わつていたことだろう。

そう考へると、再び背筋がぶるりと震え上がつた。

「……となるとよ、関係ないこいつらはもうここに居つかまつてしまふわけだな」

不意に、素つ氣ない口調でディイズが吐き捨てる。

その言葉を聞き、神妙な表情でフォウルは頷いた。

「うむ……そうしてくれ。これ以上彼らを巻き込み、危険に曝すわけにはいかぬ」

「ち……ちょっと待つてよー。」

勝手に話が進められ、慌ててルルカは声を上げた。

「！」まで巻き込まれといて、今さら後はもつ知りませんだなんて言えないわ。

あいつらに今日やられた分だって十倍返しちゃってやらなきゃ気が済まないし……。

行くんでしょう……？ 北の白嶺海に。

私たちも一緒に行くわ！

「目的地は……僕たちも同じなんです。

僕たちも連れて行って下さい。

この船で行けばルルカさんのエア・ライドの燃料代を払わなくていいですし、何より空賊たちより先に天空竜を発見しないと、スクープの価値が半減してしまいます……」

「お……お前さんたち……」

二人の決意に深い感銘を受け、胸を詰まらせたフォウル。アドルが呟いた余計な一言は聞こえなかつたようだ。

ルルカはアドルと顔を見合させ、互いに決心したかのように頷き合つた。

彼が賛同してくれたのは意外だった。どうやらその裏には結構な

打算があつたらしいが……。

とはいえる、それはそれで好都合である。どちらにせよアドルから受けた依頼で白嶺海には行かなければならぬのだ。

ただ……ルルカの本音としては、これ以上あの空賊たちや殺し屋とは関わり合いになりたくないというのが正直なところだった。

強がりを言つたが、仕返しする自信なんでもうひとつあるわけがない。

あんな恐ろしい男と再会するのは……あんな死に田に會つのは、もう一度と御免であつた。

だが……。

遠い日の悪夢の中に……追憶の中に、あの殺し屋が浮かべた、あの蛇のようなねちりとした冷笑がフラッシュバックする。

もしかしたら……あの殺し屋は、失われたルルカの過去に何らかの形で関わっているのかもしれない。

父の失踪について……何か知つてゐるかもしねれない。

再会すれば今度こそ殺されてしまう可能性もある。何も知らない可能性も、何も語つてくれない可能性だつてある。

それは、見返りのぞきい危險な賭けだつた。

しかし、何も知らないしないまま立ち去れば絶対に後悔する。

父の失踪の理由を知りたいという強い思いだけがルル力を突き動かした。

「…………すまぬ

「やれやれ……。そんな二人を連れて行つて、一体何が出来るつてんだ。

ま、じーさんがあいつのなら俺は何にも言わねえがな」

呆れたように呟くディズ。どうやら彼は一人の同行について厄介なお荷物が増えたといった程度にしか思っていないらしい。

それでもフォウルの決断に反対しないところを見ると、余程彼のことを信頼しているようだ。

「屋敷には……もう戻ることは出来ん。

研究資料や天空竜の化石は……もう既に奴らに奪われてあるじやろうからな。

奴らは間違いなく天空竜を狙つてすぐに動き出すはず……。
もはや……一刻の猶予もない。

白嶺海を……北の白嶺海を目指すのじや

その1

『盲目の剣聖』 カミオ・シエル。

人々からそんな異名で呼ばれる父が、その一つ名に恥じることのない居合いの達人となり得たのには理由があった。

父がこの世に生を受けたとき、世界は戦争の真っ只中だった。

生まれつき目が見えなかつた父。

家族は……父が幼少時に戦火に飲み込まれてしまつた。

たつた一人になつてしまつた戦乱の世には、自分を守ってくれる者など誰もいない。

だから……父は自分を守る術を手に入れるしかなかつた。

自分の身を守り、荒廃した乱世を生き抜いていくために。

閉ざされた光の中で独自に磨き上げた剣術は、時と数多の戦地を経るにつれ、次第に洗練されていった。

いつしか、自分を守るためだけに振わっていた剣は、強きを挫く
ようになり始める。

それとともに、父が剣を振う理由は、自分以外の弱者を守るため
に変わつていつた。

ルルカの剣は、幼少時にそんな父から習つたものだつた。

人を傷付けるためではない……父と同じように自分自身を、そして弱き者たちを守つていくことができるようにな。

だからルルカが持つ刀に刃はない。

弱きを守るために、人の命までも奪う必要はないのだから。

数々の戦場を生き抜いてきた父が手にしていた刀も、同様だつた。
きっと今も、父は無刃の刀を携え、どこかでまた弱きを救う旅をして
いるに違いない。

誰も傷付けることの出来ない、無刃の刀。

それが父と娘の心を繋ぐ唯一の絆の証になつてゐる。

その2

「あ…………つ…………」

明け方に白み始める東の空。

誰もがまだまどろみにいる中……狭い機内に突如として大声が轟き渡った。

「ど…………うしたんですか…………？」

さすがに間近であんな大声を上げられ、目が覚めてしまったのだ
らう。

ぼんやりとした眼をこすりながら、アドルは大声を上げた張本人、
ルルカにまだ眠たげな口調で問い合わせる。

「刀…………！」

「刀…………？」

「刀…………うかしたんですか…………？」

「忘れちゃったのよ！おじいちゃんのお屋敷に――！」

言いながらルルカは頭を抱えてその場に蹲つた。

「な…………なんじゃ、なんじゃ…………？」

「何か忘れもんでもしたのかあ…………？」

騒ぎに気付いたフォウルやデイズも田を覚まし、怪訝な顔で、蹲るルルカの方を見遣る。

「あ……。ねじこちゃん、おつかん。実は……」

「忘れたつつてもな……。今さら取りに帰ることなんて出来やしねえぞ。

あの空賊の連中が資料だけ奪つて屋敷を手放したつて保証はどうにもねえんだ」

「うん……分かつてゐる」

とりあえず事情を説明することはしたが……どうしようもないことに変わりはなかつた。

デイズの言つ通り、刀を忘れたからといって悠長に取りに戻ることなんて出来るはずがない。ルルカたちは一刻も早く北の白嶺海を目指せなければならないのだ。

それに、デイズの言つた通り屋敷内にまだ空賊がいる可能性だつてある。

刀一本程度でそこまでのリスクを犯すことは出来なかつた。

「武器のいとなら心配すんな。

「この船にはハンドガンにマシンガン、ライフルや手榴弾だつて積んである。

刀みてーな玩具一本なくたつて不自由する」たねえよ」

「そんな心配してんじゃないわよ！あれば父さんからもうつた大事なものなの……！」

呑気なことを語つディズに、ルルカはだんだんつ！と思々しげに地団駄を踏みながら喚き散らした。

父にもうつてから昨日までずつと、肌身離さず大切に持つっていた大切な刀である。

突然の襲撃があつたからとはいへ、それを失つてしまつたルルカの胸中は穏やかではなかつた。

「そつか……あの刀はカミオ殿の形見じやつたか。それは困つたのう」

父やルルカの剣技のことを知るフォウルも、一緒になつて困り顔を浮かべる。

対して……事情を全く知らないディズだけはキョトンとしたような表情を浮かべていた。

「カミオ？誰だい、そりゃあ」

「……お主にはおそらく一生縁のない聖人じやよ。」
このルルカさんの父親でもある「

フォウルの説明を聞いてもティーズの表情は変わらなかつた。どうやら眞田の剣聖力ミオ＝シエルのことを露ほども知らないようである。

ただ、刀が大切な物であるということだけは理解したようだつた。

「ふうん、そうか……。親父さんの遺品だつたか。
そりやどうにかして取りに行かねえとな」

「遺品じゃないての！ 勝手に殺さないでよね」

無神経なティーズの一言に、ルルカは憤慨して鼻息を荒げる。

「ですが困りましたねえ……。刀がないルルカさんなんて、ただの
がめつくて横暴な質の悪い女の子じゃないですか。

一緒に行つたところでストレス要因にしか……いてててててつ
！！ 「こっ、こめんなさい[冗談です]！！ ゆゆゆ、許して上
げて下さい！！

「…………」コブラライストはコブラライストはやめてつ――

またも無神経なことを言い掛けたアドルの言葉を最後まで聞き届
けることもせず、ルルカは容赦なくコブラライストでアドルの体を
締め上げる。

しかしアドルから必死の高速タップアウトを受け、仕方なくそれ
を振り解いた。

「ふーっ！ ふーっ！ ……ふんっ！

……つたく、じつちはあんたの下らない[冗談]に付き合つてゐる場合
じゃないっての。ちょっと黙つてよね」

「まあ、ルルカさんや。心配しなそんな。
奴らも刀まで田敏く奪いはせんじやろ？。刀は後でゆっくつと取
りに戻ればいい」

ルルカを宥めるようにして、弦くフォウル。

いくら気持ちを逸らせても状況は何も変わりはしない。

そんなことよりも今の状況下でこの先どうしていくのかを考えた
方がよっぽど建設的である。

確かに彼の言つ通りだった。

フォウルの言葉で、少し気持ちの落ち着いたルルカの考え方の切り
替えは早かった。

しかし……フォウルの目はどこか遠くを見ている。

その表情は、本当に一空賊団や、あの殺し屋に相対して生きて帰
ることが出来るのだろうか……という疑念を……、その場にいた全
員の気持ちを代弁しているかのようだった。

その3

蒼天の元、機械技師デイズ・フォードの操縦する搬送用小型エア・シップ『セブン・ファーバー号』は、快調に空を飛び続ける。

エア・シップ内で一夜を過ごしたルルカたちは、途中、レーヴェルの街に停留させていたフライド・チキンを回収するのと、アドルとフォウルの傷を見てもらうために朝一番で病院に立ち寄った以外ではずっと空を飛び続けている。

幸い二人の傷はやはり軽傷だったようで、簡単に傷口を縫合してもらつただけで入院の必要まではなかつた。

だが、二人ともまだまだ無理は禁物である。特にフォウルは高齢である。何が体に触るか分からぬのだ。医者からは絶対安静が言い付けられている。

ただ、周囲の心配をよそに気持ちを逸らせる本人は全く安静にする気はないようであるが……。

デイズはフォウルの数少ない理解者だつたようだ。

レーヴェルの隣町で『アイゼン・ホール』というエア・ライドシヨップを営む機械技師で、空を愛するフォウルに共感する古い知人であるらしい。

用心棒を頼まれるだけのことはあつて腕つ節が強く、趣味で集め始めたという銃火器の扱いにも慣れているらしく、現状としては頼もしい味方が増えたといつてもよかつた。

刀を屋敷に忘れたルルカも、アドルもフォウルも護身用として小型のハンドガンを持たせてもらっている。だが……もちろん、全員銃など扱つたことはない。

ディーズの射撃の腕の程は定かではないが、こんなことで、もしも再びあの空賊や殺し屋と遭遇したときに、対抗することができるのか……そんな不安は払拭できないでいた。

「どう？ 傷の具合」

セブン・ファーバー号内で、手持無沙汰氣味にぼんやりと窓の外を眺めていたアドルに、ルルカは問い合わせる。

セブン・ファーバー号は、ディーズが製造したエア・ライドを客の元に搬送するためだけの役割を持つ船だった。本来旅客用として開発されたエア・シップとしては異例の小型さである。

おかげでルルカのフライド・チキンも積んで飛ぶことが出来るのだが、人が乗ることが想定されていないため四人で乗れば機内は少し窮屈さを感じた。

心配するルルカをよそに、アドルは呑気な笑みを浮かべる。

「ああ、ルルカさん。な、心配することはありませんよ。前にも話しましたが、体の丈夫さだけが僕の唯一の自慢ですからね。

これくらいの傷、何てことがありますよ」

「そつか……。まあ大した怪我じゃなくてよかつたね。

それから、えつと……。

あ、ありがとね。その……あのとも、助けてくれて」

照れ臭さも相俟つて多少口ごもりながらも、自分を身を呈して守つてくれたアドルに対して素直にお礼を言うルル力。

珍しく素直なルルカの態度に、アドルはキヨトンとした表情を浮かべる。

「いやいや、何を言つてるんですか。僕もこれで一応馬ですからね。女子の子を庇うのは当然のことですよ。

意外と女の子らしい部分があつたんですね！ 安心しましたよ。

「……さっきのありがとうは取り消すわ」

予想外に元気なアドルを見て、嘆息するルル。憎まれ口も健在である。

死に田に遭つたという自覚もないのだから。……。この歌に『心臓』という言葉は必要ないのかも知れない。

溜め息一つつきながら席を立ち、ルルカは少し風にでも当たるうと狭いデッキの方へ足を運んだ。

「なあ、ルルカ。一体何があつたってんだよ？」

吹き荒ぶ強い風を受けながら、ルルカが眼下の景色を眺めていると、周囲に人の気配がなくなつたのを確認して、フードの中からこんこやくがもぞもぞと這い出て来た。

「…………ん？ 何が」

「何が…………って、昨日の夜のことだよ。いきなつどつか遠くにでも行つちまつたみてーに、ピクリとも動かなくなるなんてよ…………。呼んだって全然返事もしてくれねーし。あの兄ちゃんは怖くて動けなくなつた、なんて言つてたけどよ…………あれは何か怖がつてるつてのとはちょっと違ひ感じがしたんだよな。

「何か…………ほかの理由があつたんじゃないのか？」

「…………」

よく見ているな…………とルルカは感心する。

自分でもそんな状態になつていたなんて気付かなかつた。

胸の奥に蟠る…………一番の大きなしふ。

「こんこやくにだけは、ちゃんと話しておかなければならぬ……など思つた。

「マジかよ……。あの殺し屋野郎が、もしかしたらルルカの過去に
関わってるかもしけないってのかよ……」

ルルカの話を聞き、こんにゃくは啞然として呟いた。

「うん……。もしかしたら私のただの勘違いかもしれないし、それ
を聞いても何も答えてくれないかも知れない……。

それに、もしも次に会つたら今度こそ殺されちゃう可能性だって
あるわ。

でも、やつぱり何もせずにいたら後で絶対に後悔すると思つから
……。

だから……私は、行く。

「こんにゃくは……それでも着いて来てくれる？」

躊躇いがちに問い合わせるルルカ。

これはあくまでもルルカ自身の問題である。先程も言つたように、
下手をすれば殺されてしまう可能性もあるのだ。

ルルカ自身の手でケリを着けなければならぬ。

いくら付き合いが長いとはいえ、こんにゃくまでも巻き込んでしま
うわけにはいかないのだ。

しかし……そんなルルカの懸念をよそに、こんにゃくは無駄にそ
の小さな胸を張る。

「な～に言つてんだ！ そんなの聞くまでもねーだろー！」

おれとルルカの仲じゃねーか！

おれは最後までルルカに付き合つよ」

考えや打算など、何もなく……こんなにやくは即答してくれた。

ルルカの危険な賭けに付き合つ覚悟をしてくれたのだ。

小さな彼がこのときだけは妙に頼もしく見えた。

「うんじゃ……ありがと」

やがて……北の空が徐々に白み始めて来る。

間もなく、大皇雲の連なりで出来る白き領域、白嶺海である。

『大空に白い海が広がっている』

初めて白嶺海を発見した開拓者が残した一言であるが、随分うまいことを言ったものだ……と、小さなエア・シップの中から壮大な大空を見上げてルルカは思った。

白嶺海へ来るのは彼女も初めてだった。

いつも見上げていた広大な青空は、そこにはない。

見渡す限り、天一面が真っ白。

大空に敷き詰められた純白のヴェールに隙間はない。いつもなら力強く降り注ぐ日の光は、分厚い雲の障壁に阻まれ、ぼんやりと弱々しく、頼りない光を地上に届けるのみ。

まるで自分はどこか別の世界に迷い込んでしまったのではないか……という妙な錯覚を覚えてしまった。そんな光景がそこにはあった。

「（うわあ……空が真っ白だ！）」

フードの中からこにゃくが声を漏らす。普段は美女のいる風景にしか興味を示さない彼も、さすがにこの景色を前にしては感嘆せざるを得なかつたようだ。

「白嶺海に入ったか……」

恍惚とした表情で呟くフォウル。

ルルカも「ククリと息を呑んだ。

「辽の広い雲の海のどこかに、天空竜がいるのね……」

「じいさん……どうすんだ？」

チラリと肩越しに視線を送りつつ、操縦席のディーズが問い合わせる。操縦桿を握る彼も白嶺海へは初めて来るようで、その口調に若干の戸惑いが感じられた。

「うむ。とりあえず『ディエル＝ダーナ』の街を目指そう。ワシが初めて白嶺海の調査を行ったときに拠点としていた街じゃ。あそこなら勝手も分かる」

「行つたあとはどうするんですか？ 天空竜を探そうにも、都合よくまた大嵐が発生してくれるとほほせんよ」

一心にシャッターを切りまくっていたアドルも、不意にその手を止めて疑問の表情を浮かべる。

とにかく白嶺海を目指すことを優先させていたが、思えばそこから具体的にどう行動するのかということは何も聞かされていない。

フォウル以外の全員が、初めて訪れる白嶺海。

誰もが戸惑いを隠しきれない中、しかしだだ一人、フォウルは落ち着いた様子で口元に蓄えた白い髭を撫でながら、

「それについては……ワシに考えがある。とにかくティエル＝ダーナの街へ行つて、準備を整えよう」

『神秘の都デイエル』ダーナ』

天高く聳え立つ靈山『リア・グランテ』をシンボルとする、標高高い山沿いの街である。

文化水準は決して高くなく、五十年前の技術革新の飛躍的な動力革命の影響も受けず、街は昔ながらの姿を保っている。

時代に取り残された秘境。

良くも悪くも、デイエル』ダーナはそんな街だった。

文明を受け入れることなく独自に発展を遂げた街は、建物の形状や人々の服装も独特な雰囲気を持つており、木枠の窓を持つ白いレンガ造りの家々が石畳の敷き詰められた通りに軒を連ね、人々は所々に民族的な刺繡の施された丈長の貫頭衣を身に付けている。

街にはエア・シップはあるかエア・ライドの停留場すらない。

「まさに辺境の地つて感じね……」

街外れの広場にセブン・ファーバー号を停め、窓の外の街の様子を見たルルカはポツリと呟いた。

標高が高く、そして日の光が直接届かないこともあるせいか、機内にいてさえ空気は少し肌寒い。

「帰つて来たか……」

ルルカの隣で昔を懐かしむかのよつて街を眺めるフォウル。

ヒロは彼にとつての思い出の街。

恍惚とした表情を浮かべるその横顔は、当時のヒロで色々と思つところがあるのかもしない。

「おー、じいさん。いい加減に教えてくれよ。こつから一体どうするつてんだ？」

セブン・ファーバー号のエンジンを停止させながら、ディーズが問い合わせる。

エンジンが止まるとともに機内の振動が止まり、徐々に冷たい空気が差し込み始める。外はかなり寒いようだ。

「あの山を見てくれ

フォウルは遠く窓の外、街のほぼ中央部に聳え立つ巨大な山を指差した。

「靈山リア＝グラント。ティエルダーナの民にとつては聖なる地じや。

元々ティエル＝ダーナの街は、リア＝グラントを守りつとする民族が集まって発展した街なんじや。

白嶺海へ入る方法は……長い歴史の中で研究者や冒険者たちの手によつて幾多の研究、実験がなされてきた。

もちろん、その全てがうまくいったわけではない。そこには数々

の犠牲があった。

じゃが……中にはかすかな可能性を残したものもある。

このリア＝グランデを利用するというのも、その一つじゃ

あの日……白嶺海の調査に行つた、あの大嵐の日……。

ワシらはいつの間にか白嶺海の中に紛れ込んでいた……。

おそらく大嵐で航路を見失つたワシらは、知らず知らずのうちに

リア＝グランデを伝い、白嶺海の中に入ってしまったのじゃね？

……。
確証があるわけではない……。じゃが、雲を突き抜ける高さを持つあの山に沿つて天に昇れば、理論的には白嶺海の中に入る「」とも十分に可能なはずじゃ」

「確かに……その方法ならば、あの分厚い雲塊に阻まれる心配はありませんね。

でもその白嶺海の中に入る方法、フォウルさんの研究資料の中には……」

「……記してある。あの空賊たちも、間違いなくこの街を訪れるじやるわ」

アドルの問い掛けに、フォウルは苦々しい表情を浮かべて答えた。

街にエア・シップの停留施設はない。フォウルの屋敷よりも大きなバトル・シップを停めるには、セブン・ファーバー号と同じように街外れの空き地を利用するしかないはずだが、周囲にはあのバトル・シップの影も形も見えない。

果たして、敵船の到着前か、はたまたその後なのか……。

少なくとも、ここからでは窺いることは出来なかつた。

「じゃが……白嶺海付近は気流の嵐。下手をすれば機体が粉々になつてしまつ可能性もある。いかに奴らが巨大なバトル・シップを保持しているとはいえ、そう簡単には入れんはずじゃ」

「げつ……でも、それって私たちにも同じことが言えるんじゃ……」

思わず声を上げるルルカ。

しかし、フォウルは落ち着いた表情で首を横に振りながら、操縦席の方をチラリと見遣る。

「案ずることはない。じゃからワジがもつとも信頼をおく機械技師に同行を願つたんじゃ」

矢庭に言われて、フォウルの視線の先、……操縦席にいたティーズは一瞬だけキヨトンとしたような表情を浮かべる。

しかし、すぐに向やら裏められたのだと悟ったのか、大威張りに胸を張つた。

「だつはつはつはつはつは、何でえそういうことだったってのか

!!

心配すんな、この俺様のセブン・ファーバー号が気流なんかに負けるはずはねえよ。大船に乗つたつもりでいやがれつてんだ！」

「見るからに小舟ですけどね

「な……何だと、このもやし小僧……！」

アドルの余計な一言を耳みみとく聞き付けたテイズは、額に青筋を浮かべながら思い切りその胸倉を掴み上げた。

軽く聞き流していた……といつも、今まで聞き逃していたらしくフォウルと比べると、かなり乱暴な反応であったが、おそらくこれがごく普通の一般人の反応だろう。

そんな二人の間に、ルルカは面倒臭そうに割って入る。

「はいはい、こんなところでケンカしないの。
でもそのリア＝グランデって、ここの人たちにとっては神聖な場所なんでしょう？ 勝手に入ったりして怒られたりしないの？」

「もちろん許可は必要じや。

無断で靈山に立ち入った者には厳格な罰が科せられる。
じゃが……心配はするな。ここは領主とはかつての研究で訪れたときに知り合つておる。事情を話せば快く許可してもらひえるじやうう

頼もしく胸を張るフォウルは、逸早く下船の支度を整え終えた。

「さあ、それでは早速準備を始めよう。もともとしてはおれんぞ。
外は思つてはいるより寒い。まずは街の仕立屋で防寒着の用意じや

表通りは思つた以上に閑散としていた。

フォウルの話によると、いつもならたくさんの露店が軒を連ね、多くの人々が行き交い大変な賑わいを見せているらしいのだが……人通りは、疎ら。

たまに人の姿も見掛けるが……皆そそくさと、どこか余所余所しげに通りを足早に過ぎ去っていく。

どうにも、その様子がおかしい。

この街には、他の街では当たり前のように見られた、笑顔や活気といったものがまるでないのだ。

通りを行きながら、家々の中をちらりと覗いて見ると、何か不安に駆られているのか……互いに抱き合つ者たち、天に向かつて一心に祈りを捧げる者たちなど……その様子はとても普通とは思えなかつた。

街全体が……何故だか騒然としている。

「何だつてんだ？ この街の連中はいつもこうなのか？」

そんな様子を目の当たりにして、眉間に皺を寄せて呟くディーズ。

フォウルも首を傾げた。

「はて……？ 以前来た時はこのような光景は見受けられなかつたんじやが……」

釈然としないながらも、四人と一匹は街の仕立屋に向かう。

数十年前にフォウルがこの街に訪れたときにも、そこで調査の準備をしたらしい。

数十年前の店が未だ健在なのだろうか……とルルカたちは半信半疑だったが、時の流れがゆつたりと進むこの街は『変化』という言葉に疎いらしく、驚いたことにその店はまだ残されていた。

ただ……一つだけ問題が。

店の扉が固く閉ざされているのだ。

「あつたことにはあつたけど……潰れちゃつてる？」

「中の明りは点いておる。人はあるはずじゃ」

ルルカの呟きを丸つきり無視し、フォウルは店の中に大声で呼びかけながら、乱暴に扉を叩き始める。

その横暴な行動に肝を冷やすルルカたち。

ややもせぬうちに、店の中に入る気配が生じた。

勢いよくその扉が開かる。

「何だつてんだ！ こんなときに！」

中から姿を現したのは、この店の店主と思しき一人の中年男。

どうやら開けていなかつただけで、店自体はまだちゃんと営業し

ているらしい。乱暴に呼び出されたせいで、その機嫌はすぐぶる悪いようではあつたが。

しかし……店主の男の姿を見たフォウルは、一人訝しげな表情を浮かべる。

「……誰じゃ、お前さんは？　ここはダーニルースの店じゃつたと思つが」

「ダニーは俺の親父だ。とつぐの昔にあの世に行つちまつてゐ。俺はアレク。この店は息子の俺が引き継いでいる」

「何と……。そうじやつたのか……」

アレクと名乗った男の説明を聞いたフォウルは、ガッククリと肩を落とした。

その反応を見るに、どうやらよほどこの店に……そして前の店主に思い入れがあつたらしい。

しかし、そんな事情など丸つきり知らない現店主のアレクは、勝手に肩を落とすフォウルの姿を見て、不審めいた表情で眉間に皺を寄せる。

「……一体何だつてんだよ。

あんたたち、他所者だな？

チツ、今日は他所者がよく来る日だぜ……。

一体何の用でここまで来たのかは知らんが、帰つてくれ。他所者はこの地に厄災しかもたらせん」

言い終えると同時に、アレクはルル力たちの反応も見ずに一方的に扉を閉めようとする。

しかし、

「ち……ちょっと待つて！」

慌ててルル力は扉の間に足を挟んだ。

「あなた今『他所者』って言ったけど……私たち以外にも街の外から来た人がいるってことよね？」
それって、もしかして……」

「あん、何だよ。あいつらのこと……心当たりがあるってのか？」
まつ……まさか……お前たち、あの空賊どもの仲間か？！」

アレクの言葉に、ルル力たちの表情に動搖の色が滲んだ。

その6

田の前に蟠つていたのは……たゞ、圧倒的な『闇』のみであった。

少女の瞳の中は闇で覆いぬかれていた。

暗く、深く、どす黒い憎悪のよつたものを纏つた深渊の闇。

数日前より、闇は少女の意識を侵食するかのように、深く、広く
蟠り続けている。

しかし……今日、そんな闇に抗うかのよつて、闇の奥底から浮か
び上がる、一つの『光』が現れた。

圧倒的な闇と比べると、ひどく儚く、脆弱な光。

だが、漆黒の中で唯一必死で輝いてゐるその光はとても頼もしくも思えた。

「…………」

「いかがなされましたか、メイリオ様？」

広い、広いその部屋の中で頭を擡げていた少女の側で、側衛官らしき男が問い合わせる。

自分の名を呼ぶその声に現実に引き戻された少女は、少し痛む頭を押さえながら側衛官の方に視線を向けた。

「……光だ」

「……光？」

「そう……光が見えた。

ひどく微弱で……不安定で、ともすれば消え入ってしまいそうなほど儂い光だ……。

だが、『闇』に抗おうとする確かな意志を持つている。
もしかしたら……我らの助けになるかもしだれぬ」

同じような『光』を、少女はどこかで感じたことがあった。

もつとも、以前感じた光と比べると、今回のものは圧倒的に小さな光ではあつたが。

「来たようだ……。『剣聖』の力を継ぐ者が」

「そうか……。あんた、親父の馴染みの客だつたのか。そりやあさつきはすまなかつたな」

ルル力たちがこのディエル＝ダーナの街を訪れた理由を説明するど、アレクは快く店の中へ招いてくれた。

天空竜…… という言葉を聞いても、アレクは少しも訝ることをしなかつた。この街には古くから天空竜に纏わる伝説や数々の目撃証言が残され、フォウルのような研究者もたくさん訪れていたため、天空竜の存在を信じている者も大勢いるらしい。

フォウルとアレクの面識はなかつた。どうやらフォウルが以前この店を訪れたのは、アレクが生まれる少し前のことだつたようだ。

「それよりも…… 詳しく教えて。空賊がこの街に来たの？」

店内で寒さにも耐えられる少し厚手のジャケットを見縫いながら問い合わせるルル力。ほかの三人も、思い思いの上着を選んでいる。

ルル力の問い掛けに、アレクは苦々しい表情を浮かべながら

「ああ……。あの空賊団が来たのは、今日の早朝のことだよ。はつきり言って、こんな辺境の地に空賊が現れることなんてほとんどない。

文化水準だつて低いこの街の、一体何を奪いに来たのかつて皆不安がつてた。だが、あの空賊団は街に立ち寄ることはしなかつた。代わりに…… 奴ら一体何を考えているのか、この街の領主である

メイリオ様の許可を得ずして、あの大きな船で勝手に靈山リア＝グランデを登り始めやがったんだ」

「ぐぬぬ……やはり奴ら、逸早く行動を起こしておつたか……」

歯噛みするフォウル。完全に空賊たちに遅れをとってしまったというわけである。

彼らが天空竜を見付けられるという保証はないが、やはり先をとつていた方が有利に決まっている。後手に回ってしまったことで、こちら側の不利要素が一つ確定してしまった。

「なるほど……。それで街の人たちの様子がおかしかったってわけね。

でも、その靈山を上がるのってそんなにとんでもないことなの？

この街の人たちの騒ぎよづは、ちょっと普通の感じじやあなかつたんだけど……」

滅多に現れるこの空賊たちにより、この街の人たちがあんなにも不安になっていたことは分かつたが、それにしてもあの騒えようは少し異様だった。

あれは、空賊などではなく、何か別のものに脅えているような……

…そんな感じがした。

「靈山リア＝グラントは、このティエル＝ダーナの民にとつて神聖な地だ。

勝手に足を踏み入れたら厳罰が科せられる。だが、相手は空賊。俺たちのルールなんて通用するはずがない。誰にも奴らの行動を止めることが出来なかつた……。

ただ、奴らが何も略奪をしないのなら、それでいい。皆自分の命や財産のことの方がよっぽど大切だからな。

この街の者たちがこんなにも不安になつて騒いでいる原因はなん…

…領主メイリオ様の先日の一発言にあるんだ」

「『メイリオ』？ この街の領主殿は、そんな名前じゃったかのう？」

アレクの説明を聞いて眉を顰めて宙を仰ぐフォウルだが、そんな彼の肩をディズがポンと叩く。

「じいさん、何十年も経てば領主ぐらに変わつてゐるだひつよ」

「いや、この地の領主さまは代々世襲によつて受け継がれてきた。フォウルさんが不思議がるもの無理はないよ。

前領主『シャー・ラジョンドラ』様は、一年前御病氣により退位なされた。

『ディエル＝ダーナの地は代々ラジョンドラ家によつて治められてきたんだが、十五代のシャー様には『子息があらず、領主の座は実質空位になつてしまつたんだ。

そこで、新しい領主をどうするか……という議題が生まれたんだが、前領主や街の者も満場一致の賛成で、代々側近として務めていた『メイリオ』家から、末の『リーファ＝メイリオ』様がわずか十一歳にして、この街の新領主に選ばれたのさ」

「じゅ……十一歳？！」

思わず声を上げる一同。『領主』と聞き、想像したものとは大きくかけ離れる幼さだった。

「まだ子どもじゃないですか。そんな子どもに領主の座を譲り渡すなんて、この街の人たちは正気なんですか？」

「確かに不思議がるもの無理はない。普通は十一歳のお子様に領主の座なんて務まるはずがないと考えるのが常識だ。

しかしながら、メイリオ家には……とりわけリーファ様には、それでも周りを納得させてしまつような、ある『力』をお持ちになられたいたのさ」

「力　？」

「ああ……」

眉を顰めるルルカたちに対して、アレクはきつぱりとした口調で告げた。

「『予知能力』さ」

「予知能力　？」

突然の突拍子もない発言に、ルルカたちはキョトンとした表情を浮かべる。

馴染みのない言葉を耳にして、アレクが何のことを言っているのかすぐには理解出来ないでいた。

しかし、

「はつはつはつはつはつは
ん。 !」
冗談キツイですよ、アレクさ

予知能力なんて、空想世界のお話じやあないですし……」

戸惑う一同をよそに、真っ先に口を開いたのは、やはり無神経人間のアドル。アレクが冗談を言っているものと軽い笑い声を上げ始める。

しかし、対してアレクは気分を害するわけでもなく、真剣な表情で首を横に振った。

「いや……メイリオ家の予知能力は本物だよ。祭祀にあつては常にその卓越した能力を持つて、この地の吉凶を占つて来られた。だからこそ代々領主であったラジヨンドラ家の側近として務めてきたんだ。

特に……末のリーファ様の能力は、一族の中でもとりわけ強い。一年前のヴァングレイド戦争の終結のことも、十五代シャー様のご病気のこともピタリと言い当てられた。

それだけに……今回街の者たちが不安に騒ぐれて当然だったんだ。空賊たちが来る、ほんの数日前のことだ。

アレクの目は真剣そのものだった。

当初皆、冗談めいた発言を半信半疑に聞いていたが、知らず知らずのうちにその真剣な眼差しに引き込まれ、ゴクリと息を呑む。

「リーファ様は大聖壇にてその御神託を告げられた。
『空が落ちる』……と」

自分の胸の中の鼓動が強く脈打つのを、男は感じていた。

こんなに気分が高鳴るのは……一体いつ以来のこととなるだろ。脈打つ鼓動は、自分が間違いなく生きているとこり」と強く感じさせた。

本来ならば、一度は失っていたはずの命。

男は生かされた。

自分以外の誰かの助けを得て。

もしも『あのとき』一人だったら……男はきっと死んでいた。

だが、それ以来『生きる』といふことが一体どういうことなのか……自分は一体何のために生きているのか……といふことを強く感じじるようになった。

自分を殺そつとした者たちも、自分を助けた者たちも……皆、死んだ。

片や人の命を奪おうとしたし、片や人の命を救おうとした者たち。

両者の中に宿る『魂の色』は全く異なるものだったはずだった。

だが……無惨に命を散らした最期は、両者とも全く同じ。

一体何が善で、何が悪なのか。

何も分からなくなつた。

生き永らえた男は、生を得るとともに激しい苦痛に苛まれ続けることとなる。

「…………」

耳の奥が痛む。

徐々に窓の外が白み始めてきていた。

どうやらもう既にかなりの高度まで昇つて来たらしく。

機はもつすぐ白嶺海の中に入るだろ？

高鳴る鼓動は『生』を認識されると同時に、おぞましい程の嫌悪感を自分に感じさせた。

「血だ……。血が足りんな」

ボソリ……と低い声で呟きながら、男は……ルードマンは手元の『一本』の刀に視線を落とす。

自分が斬った人間から流れ出す血を見ているだけは、唯一苦悩から解放された。

血の臭いだけが、自分を激しい乾きから癒してくれる。

その瞬間にそが、至高の瞬間だった。

「奴らは間違いなく雲の中にやつて来る。

ククク……今度こそ、よき殺し合いが出来そうだ」

激しい殺意を湛えながら、空賊ジェフ＝ルーガーや殺し屋ルードマンを乗せたバトル・シップは白嶺海の中を飛揚す。

『空が落ちる』。

その言葉は抽象的過ぎて、一体何を意味しているのか窺い知ることは出来なかつた。

街の者たちの大半は、やはりそれが悪いことを意味しているのだ
と予想しており、だからこそ街全体は騒然としていた。

推測はいくらでも出来る。だが、していけばそれこそきつがない。

そんなことよりも、とにかく今はリア＝グランデへと登る許可を得なければならないのだ。

空賊たちよりも後手に回つてしまつてゐるといふことは既に確定済みである。

これ以上もたもたしてなどいられない。

ルルカとこんにゃく、そしてフォウルは、領主リーファ＝メイリオが住むという『大聖壇』という建物を目指していた。

アレクの話では、先日リーファ＝メイリオが受けた不吉な神託のせいで大聖壇には人々が殺到し、周囲には厳戒態勢が敷かれているらしい。

その神託が、今朝突然現れた空賊団と何か関連しているかも知れない……というのが、この街の者たちの大多数の意見。今日は特に混雑しているだろう。

大人数でぞろぞろ押し掛けるわけにもいかないし、エア・シップの整備やほかの準備もあるため、アドルとディーズには先にセブン・ファイーバー号に戻つてもらつている。

ただ……少人数で行つたからといつても、領主に会える可能性は低い。

「先代領主であるラジエンドラ家の者じゃつたら、ワシも多少なりとも面識があつた。事情を話せばリア＝グランデへの登頂許可ももうええと思つていたんじやが……」

大聖壇を目指し大通りを歩きながら、力無く呟くフォウル。

想定外の事態の発生と、空賊たちに遅れをとつたことにより、その表情には若干の焦りが見られる。

アレクから聞いた話によると、新領主リーファ＝メイリオはとにかく人嫌いで、滅多に人前に姿を現すことはないし、謁見にもほとんど応じないらしい。

人々が押し寄せる今の状況であれば、会うのは本当に至難の業だらう。

「困つたわね。いつのこと、私たちも勝手に登つちやうつてのはどう？」

「（おつ、そりゃいい考えだな。さつすがルルカ。悪知恵が働くぜ）

「

「そ……それだけは絶対にならん……！」

ルルかとこにやくがグッドアイディアだと思つた考え方、しかしフオウルは激しく唾を撒き散らしながら否定した。

「何度も言つが、靈山リア＝グランデはこの地の民にひとつでは聖なる地……。

無断登頂が知れたら市中引回しが、はたまた縛首か……。
とにかく厳罰を受けることは必至。登頂許可是絶対に得なければならぬ。

それに……いくら急いでいるとはいえ、あの汚い空賊どもと同じ卑怯な手段など絶対にすることは出来ぬ」

「じゃあどうする？　このまま大聖壇に行つたって、絶対に呑わせてもらえないわよ」

「つ～む……確かに、この状況下で謁見を申し出ても、取り合つてもらえる可能性は低いじゃね？……。

そうじゃ！　お前さんの無駄に高い身体能力を生かして、大聖壇に侵入するところのはじりじゃ？」

「……それって勝手に山登りしちゃうのと何が違うのよ。大体、そんなことして領主さんに会つたとしても、こっちが何か言つ前に摘み出されるに決まつてんじゃん」

「や……やうか……。

「つ～む……本当に困つたの？……」

頭を抱えるフォウル。

考えが纏まらぬまま、一人は歩を進める。

やがて……二人の視界の先に、他の建物よりも一際背の高く、大きな建物が見えてくる。

大聖壇。

ディエル＝ダーナ領主、リーファ＝メイリオの住む屋敷である。

その9

「……来たか」

闇に抗つかのようこそ、瞳の裏で輝く光の気配が近付いてくる。

近くにあつてさえ、ひどく不安定で、夢い光。

しかし、やはりそれは確かに『意志』を持つている。

少女は田を見開くと同時に、控えていた側衛官に向かつて田配せずする。

「連れて参れ。ここへ。
剣聖の力を継ぐ者を」

「（ハヘエ……すつげえ人、ハハ）」

「「いや、やつぱり事情の説明すら出来る状況じゃないわね」

目の前でごつた返す人混みを見て、ルルかとこんにやくは拗つてゲンナリとした表情を浮かべる。

外壁で覆われた大聖壇の正面門は見上げるほど高い。

その前に……ざつと見ておよそ百人程度だろうか。とにかく、表通りで見掛けた人たちよりも圧倒的に多い人々がそこに群がっている。

「やはり忍び込むしかないか……」

そんな人ゴミを田の当たりにして咳くフォウルの目は本気だった。大聖壇の周りをキヨロキヨロと見渡し、侵入できる場所を探そうとしている。

「てかさ、街がこれだけ混乱してるんだったら、やつぱりこっそり登っちゃっても誰も気付かないんじゃない？」

しかし、そんなフォウルの意見を遮つて何気なく咳くルルカ。

表通りに人の姿はほとんど見られない。外に出ている人は、大半がこの大聖壇の前に集まっている。残りは各々の家の中で恐れ、戦き、天に向かつて一心に祈りを捧げるばかり。

街の人たちの注意力は散漫になつていて、今なら無断でリアリグランデに登つても、気付かれない可能性が高い。

「いや、やはり許可は得ておかねばならぬ。忍び込もう」

しかし、フォウルは頑として考えを曲げない。意地でも自分の意見を通そうとするようだ。

「だから、そんなことしたって取り合つてもらえないってば！事情が事情なんだから、勝手に登つても後でちゃんと説明したら許してもらえるって」

「嫌じや、嫌じや！ バレたら厳罰じやぞ、厳罰！ わしはまだ死にとうない！」

意見が噛み合わず、人目もばからず言い合いを始めるルルカとフォウル。

もつとも、正門の前で大騒ぎする群衆の中に一人のやりとりを気にする者など誰もいなかつたが。

しかし、

「……『盲田の剣聖』の関係者ですね？」

そんな男の声と同時に、突然背後からポンと背を叩かれた。

ルルカの肩がビクンと跳ね上がる。

振り返ると、そこには周りの群衆たちが身に付けている貫頭衣よりも少し多めの装飾が施され、上等な生地で作られた衣装を纏う人の男が。

一見してこの街の有力者と分かる格好だ。領主家の関係者が何か
だらうか。

瞬時に冷や汗を搔き始めるルルカ。

『忍び込む』、『勝手に登る』等の物騒な話をしていた最中である。もしかしたら会話の内容を聞かれ、咎められる……だけならまだいいが、最悪街を追い出されてしまうかもしれない。

しかし、男が発した言葉をよくよく思い出し、ルルカはキヨトンとした表情を浮かべる。

「えつ……、い……いま何て……？」

「あなた方は眞田の剣聖の関係者の方たちですね？」

念を押すかのように、再び全く同じ文言で問い合わせる男。

「え……？　えつと、その……」

「いかにも、この娘は眞田の剣聖カミオ＝シエル殿の実の娘さんじやが……。

お主、一体何故それを？」

戸惑い口調もるルルカの代わりにフォウルは問い合わせるが、しかし男はフォウルの言葉を確認すると、満足げに頷き、答える代わりに手を差し伸べる。

「これからです、ついて来て下さー。領主リーファ＝メイリオ様があ
会こになられます」

「…………？」

何がなんだか分からず、キヨトンとして顔を見合わせるルルカと
フォウル。

事情は全く分からぬ。

一体何故、男はルルカがカミオ＝シエルの関係者であるということを知つてゐるのか。

一体何故、厳戒態勢が敷かれる中、ルルカたちを大聖壇に招くのか。

しかし、こちらとしては好都合である。

領主がルルカたちに一体何の要件があるのかは定かではないが、
こちらは是が非でも領主に会わなければならぬのだ。

ルルカたちは戸惑いながらも、先行する男の背に続いた。

大聖壇、謁見室。

領主家の関係者と思しき男に案内され、地道から大聖壇の中へと招かれたルルカたちは、その部屋の中に案内された。

広い室内の中央には、黒檻造りの大きなテーブルが置かれ、その周りに十ほどの椅子が並べられている。

そして、部屋の入口の反対側……ルルカたちはテーブルを挟んで対面に位置する椅子の上には、既に誰かが腰を下ろしていた。

大きな椅子に、ふんぞり返るように座る一人の少女。

特別その椅子だけが大きいというわけではなかつたが、少女の体が小さい分随分大きく見えた。

「来たか……。剣聖の力を継ぐ者よ」

ルルカたちの姿を認めるや、その少女は年齢相応の幼い声色で言葉を紡ぎ出す。

可憐な容姿と同様に可愛らしい声だ。

それだけに、偉そうな口調とのギャップにルルカは違和感を覚えた。

この少女が、ディエル＝ダーナの領主リーファ＝メイリオ。

一年前の十一歳で領主の座に着いた……といつことは、現在十三歳。

年齢のことは予め聞いていたが、実際に本人を目の当たりにすると、やはりその幼さを実感せざるを得なかつた。

領主リーファ＝メイリオは部屋に入つて来た一人……特にルルカのことを、品定めするかのようにジロジロと眺め回す。

「ふむ……。儻げな力の持ち主だとは思つていたが……何だ、まだ子どもではないか。

剣聖の力を受け継いでいるはずなのだが、期待外れなことにならねばよいが……」

一体どんな用件があるものかと思いきや、自分で招いたルルカたちを椅子に促すこともせずに、いきなり好き勝手なことを言い始めるリーファ。

リーファが一体何のことを言つているのかはルルカにはよく分からなかつたが、少なくとも自分が侮られているのだといつことは理解できた。

初対面であるにも関わらず、その失礼な発言にルルカは顛かみを引き攣らせる。

「ちょっと、何生意気言つてくれちゃつてんのよ。
あなたの方が完全に子どもでしょーが」

「お……おこおこ、よさんか！」

「『……』！ リーファ様に対して、何たる口の聞き様だ！」

しかし、ルルカが反論するや、すぐさまフォウルと、ルルカたちを案内してきた男が声を荒らげた。

叱責され、慌てて口を噤むルルカ。

容姿に惑わされ忘れかけてはいたが、相手はこの街一番の権力者なのである。

ただでさえ普段敬語を使う習慣がなく、ついタメ口を使つてしまつたのもマズかったのだろうが、ましてや彼女に対しても口答えなど許されるはずがない。

「よし、そのままで。その方が話やすから！」

しかし、声を荒らげる男たちをリーファが制した。

意外な反応に眉を顰めるルルカ。

その発言や態度はとにかく偉そうであつたが、どうやらその分年齢にそぐわぬ寛大さも持ち合わせているようだ。

そして、じじじようやくルルカたちを椅子に促す。

「この街の領主リーファ＝メイリオといふ。

御足労感謝する。腰を掛けてくれ。

お前たちには話があつてじじじまで招き入れた。

少し長くなるかもしれません……。やつべばらんに話をしよう！」

「あ、なんだ。じゃあ普通に話せてもいいわよ」

言いながら、促されるままにじりかりと椅子に腰掛けるルルカ。

彼女がそういう風に申し出してくれるのなら、こらとしてはそれに従うだけである。

使い慣れていらない敬語などでは、確かに彼女の言つ通り話しづらいことこの上ない。

もつとも、そんなルルカの素直な対応に対し、ただ一人ルルカたちを案内して来た男だけは嫌な顔を浮かべていたが。

「さて……順番が前後してしまったな。とりあえず、お前たちの名を聞かせてくれぬか？」

リーファの付き人と思しき男は去り、謁見室にはルルカ、フォウル、そしてリーファの三人だけが残された。

リーファに問われて、ルルカたちは妙な違和感を覚える。

ルルカとフォウルは、この街の領主であるリーファの名前は知っていたし、リーファもカミオ＝シエルの娘であるルルカのことを知っているような口ぶりだったので、お互い初めて会ったような気がしなかつたのだが、これは初対面なのである。

「ルルカよ。ルルカ＝シエル。何でも屋よ」

「ワシはレーヴェルの街で考古学者をやつているフォウル＝グランバースと申します」

「ルルカとフォウル……だな。突然呼び出してくれてすまなかつたな。悪く思わないでほしい。

だが……事は急を要する。この街に今、大いなる災いが訪れようとしているのだ」

「この間の『神託』ってやつのことね。どういう意味なの、『空が落ちる』って？」

神妙な口調で語るリーファに対して、ルルカは何気なく問い合わせ

た。

外で大騒ぎするこの街の住人たちをよそに、他所者の自分たちだけがその真相を知ろうなんて抜駆けのような気もしたが、せっかくこうして聞く機会がある以上、聞いておかなければ損である。

ルルカの問い掛けに、しかしリーファは静かに目を閉じ首を横に振つた。

「それは……私にも分からん」

「分からんって……んな無責任な。あんたの一言のせいで、街の人たちはこんだけ混乱してんでしょう？」

「そう言つてくれるな。私とてこの予言の力をもて余している。予言の力は代々メイリオ家の人に受け継がれてきたのだが……誰一人として自在に使いこなせた者はいなかつた。この私ですらそう……非常に不安定なものなのだ。

神託はいつも突然訪れる。

こちらの都合などまるでお構いなしに、予期せぬ時、予期せぬ場所でな。

そして、必ずしもこちらが望んだ答えが得られ、好きなときに好きなことが知れるという都合のよい力でもないのだ

「ふうん。随分曖昧な力を持つてんのね」

『予知能力』と聞いて、それが便利な能力だとばかり思っていたが、どうやら実際には何でも都合良く知ることができるもののような能力ではないらしい。

しかし、椅子に深く腰を掛け何気なく呟いたルルカの言葉を聞き、リーファはクスリと悪戯っぽく笑みを浮かべた。

「それはお前ほどではないがな。ルルカ＝シエル」

その笑顔は年に似合わぬほど妖艶で、思わず見惚れてしまうほど優美なものであった。……が、ルルカにはリーファの発したその言葉の意味がよく分からなかつた。正直なところを言うと、先程からリーファが一体何を言つてているのか、イマイチよく理解出来ないでいた。

つっこまないとこりを見ると、フォウルもあまりよく話を理解出来ていないうらしい。

キヨトンとしているルルカたちの表情に気付いたのか、リーファもそれ以上話を広げよつとはしなかつた。

「まあ……その話はいい。

それよりも、私がお前たちをこの屋敷に招いた理由だ。その話をしようつ」

「あつ……。そ、それもそうね！

大体あなた、一体どうして私がカミオ＝シエルの娘だって分かつたの？ それも神託つてやつ？」

「神託とは少し違うが……まあその話は今はよそう。今それを話したとしても、また混乱を招くだけだ。それよりも、この街に空賊が現れたことは知つているな？」

「え？ ええ、もちろん」

質問をあつさりとスルーされ、惑うるルカだが、逆に返された問い合わせには反射的に答える。

「そやつらは先日、ワシの家から天空竜に関する研究資料を奪い、この街にやって来たのです。リア＝グランデに登り、白嶺海へと曰指す理由は間違いないく天空竜を狙つてのことでしょう」

空賊という単語を聞き、フォウルは身を乗り出した。

リーファは、ふうっ……と大きく息をつき、俯向き加減に頭を横に振った。

「愚かな者たちよ。あれは人が手にするには、あまりにも巨大な存在。人智を超えし神の御使いなのだ。人間などに到底どうにか出来るものではあるまい」

「や……やはり、天空竜は実在するのですか？！」

興奮気味に問い合わせるフォウル。

しかし、対してリーファは興味もなさそうに冷たく鼻を鳴らす。

「それは私の知るところではない。確かにこのディエル＝ダーナには天空竜に纏わる数多くの伝説が残っているが、実際に私がこの目で実物を見たというわけではないからな。

存在の確証は想像の域から脱することは出来ぬ。

だが……今は天空竜の存在などどうでもいいこと。

私は確かに見たのだ。この広大な空が崩壊する瞬間を。

一度下った神託が覆ることはない。空が落ちるという神託が下れ

ば、間違いなく空は落ちるのだ。

それが……あの空賊たちの行動と直接結び付いているという確証はないがな」

口調の中に緊迫感を漲らせ、神妙な表情で語るリーファ。

その幼い声色から紡ぎ出される言葉には、不気味なほど説得力があり、危機感に満ちた現実をルルカたちの前に示し出した。

ルルカたちは「ゴクリ……と息を呑む。

「どうやう……思つていていた以上にとんでもないことが起こりつつあるらしい。

確かにそんな神託が下されたら、街の人たちがパニックに陥ってしまうのも無理はないだろう。

すると……。

リーファは徐に顔を上げ、真っ直ぐな視線でルルカの両の瞳を見据える。

「お前たちをここへ招き入れたのは……ほかでもない。リア＝グラントへの登頂を許可する。空賊たちを追つてくれ。そして……叶つことなら、この空を守つて欲しい」

「え……？ ええつー？」

突拍子もない申し出。

ルルカは一瞬耳を疑う。が、すぐに言葉の内容を理解し、思わず声を上げた。

「ち……ちょっと待つてって。そんな勝手な期待してくれちゃって……。
そんな仰々しい話をした後で、私にどうにかしらだなんて……そりや無茶つてもんよ……！」

しじるもじるになりながらも、ビリビリとか言い返す。

確かにリア＝グラランデへの登頂はルルカたちが望んでいたことである。そのためにここめで来たのだ。しかし、そんな不吉な神託の事実を聞かされた後に登頂許可を得られても、気が引けてしまうだけであった。

リア＝グラランデへの登頂を切望していたフォウルでさえ、おろおろとして戸惑っている。

しかし、リーファは自分の意見を曲げる気はないようであった。強い意志を秘めた視線がルルカの瞳を捕えて離さない。

「いや……お前だからこそ頼むのだ、ルルカ＝シエル。
ディエル＝ダーナの街にメイリオ家が仕えて数百年……。誰一人として神託を覆すことが出来た者はいなかつた。
我らディエル＝ダーナの民はこの神託から逃れる術を知らぬ……。
だが、お前なら……剣聖力ミオ＝シエルの血を継ぐお前なら持つているかもしねり。

運命に抗う力を……」

そこでリーファは椅子を立ち、徐に片膝を着き、ルルカに対して

頭を垂れた。

「ほかに頼むことが出来る者などいようはずもない。
この神託が下されたのと同時に、お前が現れたのは間違いなく運命であると思つていてる。

だから……頼む、ルルカ＝シール」

側衛官を引き払ったのは、最初からこいつするためだったのだろ？
領主が頭を垂れる姿を、部下や街の者に見せられるはずがない。

いくら領主であるとはいえ、こんな年端もいかない少女がこの街のことを……この街に住まうすべての民のことを危惧し、憂い、そして不吉な神託を授かつたことに対して責任を感じているのか、たつ一人でどうにかしようとしているのだ。

『見える』ことに対して、たつた一人で責任を感じる必要はないはずであるし、健気……という言葉はこの少女には不似合いであつたが、彼女が抱えている大きな苦悩が、痛いほどルルカの胸の中に伝わってくる。

はつきり言って、こんな状況を黙つて見過ごすことのできるルルカではなかつた。

瞳の奥に決意を秘め、跪くリーファの側に寄り添う。

「分かったわ……その話、引き受けあげる。だからもう顔を上げて、ね？」

「（あ……おいおい、マジかよルルカ……）」

「だ……大丈夫なのか……？ ルルカさんや」

ルルカの発言を聞いて、不安げに戸惑いの声を上げるフォウルと
「こんにゃく。

彼らが不安になるのも無理もなからぬことであった。

正直、ルルカ自身、リーファの言う『空を守る』だとか『神託に抗う』とかいうようなことが出来る自信などまるでない。

しかし、この街に来た目的は空賊たちを止め、天空竜を守る』など。
そして……あの殺し屋と再会し、ルルカの過去について尋ねること。

一つの目的を達成するためには、どちらにせよリア＝グランデには登らなければならないし、もしも神託に空賊たちが関わっているのであれば、神託に抗うことに対する何らかの光明は得られるかもしれない。

ルルカは不安げに表情を歪ませることにやくやフオウル、そして
ようやく顔を上げたリーファに対して、笑みを向けた。

自信などまるでなかつたが、人を励まし、元気づけるような、いつもの明るいあの笑みを。

「ただし……何でも屋である私に対する正式な依頼として、ね
！」

ディエル＝ダーナの商店街で、ルルカ、フォウルと別行動をとり、リア＝グランデへの登頂に必要な物資を購入したアドルとデイズの二人は、一足早くセブン・フィーバー号に戻り、登頂の準備を整えていた。

アドルは長時間の飛行に備えての食料の準備を。そしてデイズは特にエンジン周りを中心としたセブン・フィーバー号の綿密な整備を。

誰もが、白嶺海へと進入するのは未知の体験。不安からか、自然と二人の間の会話は少なくなっていた。

「戻つて来ませんねえ……。ルルカさんとフォウルさん」

沈黙に耐えられなくなつたという訳ではなかつたが、帰りの遅い二人のことが気に掛かり、窓の外を眺めながらポツリと何気なく呟くアドル。

黙々と機体を整備していたデイズも、作業の手を止め、額の汗を拭いつつアドルと同じ方向に視線を送つた。

「そりやあそうだ。大聖壇の周辺は大混雑してるつて話なんだ。
そう簡単には戻つて来れねえだろうよ」

「そうですよね。

う～ん……。ルルカさん、また考えもなしに無茶なことをしていなければいいけど……」

「じいさんも天空竜のこととなると、年も考えずに無茶苦茶しやがるからな……。大聖壇に無断で潜入して、とつ捕まつたりしてねえだろうか……」

揃つて顔を見合わせる二人。

互いに見合わせるその表情の中には、あの二人を大聖壇に行かせたのはやはり失敗だったのではないか……という心情が如実に現れていた。

「ただいまーー！」

すると、そんな一人の不安をかき消すかのように出入り用の下部ハッチが開き、聞き慣れた声が機内に響く。

入つて来たのは二人。先程まで話の話題に登つっていたルルカとフォウル。

ようやく帰つて来たその姿を認めて、アドルとティーズの表情に少しだけ安堵の色が滲んだ。

「あ、おかげりなさい。ルルカさん、フォウルさん。帰りが遅いんで、そこそこ心配していましたよ」

「そこそこつて……。はいはい、中途半端に心配させちゃつてゴメンなさいでした。

ま、いいや。さあ、上がつて」

ルルカに促され、一人の後に続き、上質なヴェールで顔を隠した

一人の少女が機内に乗り込んで来た。

突然の、予期せぬ三人目の登場に、アドルとディズは揃つてキヨトンとした表情を浮かべ、見知らぬ少女の方を見遣る。

「……誰ですか、この女の子は？」

「何だあ？ 街で迷子でも拾つて來たつてのか？」

しかし、興味を示す二人のことなど視界の中に入つていなかのように丸つきり無視し、少女は顔を覆つていたヴェールをはぎ取りつつ、険しい表情で機内をキヨロキヨロと見渡し始める。

「小さき船だな……。本当にこのような小船で白嶺海の中を田指すつもりか？」

「あ。狭いしそこら中散らかってるから気を付けてね、リーファ」

『げえつ！』

瞬間、揃つて大声を上げるアドルとディズ。

突然出てきた、予想外のビッグネーム。……そしてまさか目の前に現れるはずのないと思っていたその姿。

「ま……まさか、リーファ＝メイリオ？」

「てつ……てめえら、拉致つたな！？」

リーファが混乱する大聖壇をわざわざ抜け出し、こんなところにまでやつて来たのは、特に同行を申し出た訳ではなく、白嶺海を目指すルルカたちが乗るエア・シップを一目見ておきたいと言い出したからだった。

白嶺海の中へ潜入するのは、まさに至難の業。かつて多くの冒険家、研究者たちがその中にロマンを求め、白嶺海を田指したが、その悉くが分厚い雲海の前に阻まれ、無惨に散つてきている。

空を守る。

自分たちの街の運命を託したルルカたちの載るエア・シップが、目的を達成する前に先代の数々のエア・シップと同様、白嶺海の中に辿り着く前にあっさりと崩壊してしまわないかと不安に思い、人目を忍んでここまでやつて來たリーファの気持ちももつともであった。

大聖壇での出来事や、リーファから依頼を受けたことを告げると、拉致と勘違いしていたアドルとティーズの完全に血の気が引いていた表情にも落ち着きが戻っていた。

もつとも、セブン・ファーバー号の小ささを見たりーファは逆に始終不安そうな表情を浮かべていたが。

しかし、船はこれ以外ほかにない。文明に取り残されたこの街で、ほかのエア・シップなど調達出来るはずもない。この船で白嶺海の中を目指さなければならぬのだ。

「本当に大丈夫なのか……？ ルルカ＝シエル」

セブン・ファイバー号に来てから、少しそわそわしながら何度も同じ質問を繰り返すリーファ。かつて白嶺海を目指し、目的果たせず沈んできた何機もの大型工ア・シップを見てきているのだるう。

今のリーファは、少し前に大聖壇で見た、年不相応の落ち着き払った表情を浮かべていた少女とはまるで別人のようであった。

しかし、そんなリーファの不安を払拭するかのように、ディーズがその頭の上にポンっと手を乗せる。

「な、大丈夫だつて。心配すんな！
小せえが、頑丈さだけは一級品だ。雲の塊なんかに負けやしねえ
よ！」

全く根拠のない一言だったが、今は機械技師の彼の腕と、リア＝グラントを伝えれば白嶺海の中へ進入出来るというフォウルの仮説を信頼しなければならない。

大きな笑い声を上げながらリーファの頭を乱暴に撫で回すディーズだが、機体の窓の外から突き刺さる、お付きとして付いて来た側衛官の痛烈な視線を感じ、慌ててその手を離した。

「うーん……なんかまだちょっと不安もあるけど……。
アドル、おっさん。準備の方は出来てる？」

「お、おう。整備の方はバツチリだぜ」

「もちろんです。長期飛行に備えての食料や寒さ対策の防寒具、予備のフィルムも十分だし、カメラのレンズもキレイに磨いておきました。何も問題ありません！」

「それは別にどうでもいいけど……。おじいちゃんも心の準備はいい？」

「うむ……。屋敷を出たときから、既に決心は付いてある」

フォウルの視線は、既に空へ……雲の中へ向けられている。口調は落ち着き払っているが……数十年振りの、白領海。気持ちが逸つていることは明らかであった。

「それから……」

最後にルルカは、そつとフードの中に視線を送った。

「（つたりめーだろ、おれはいつでも準備オツケーだ！ さつさと出発しよーぜー）」

こつものよつて元気一杯の口調で答えることにならぐ。

誰もが既に、不安や戸惑いを払拭し、未知の世界へと臨む決意は着いているようだ。

あとは……ルルカの気持ちのみ。

ルルカは目を閉じ、すう～っと大きく息を吸い込んだ。

自分の過去……そして、父の失踪の手掛かりが、そこにある。

恐怖心は捨て去った。

リーファの気持ちも受け取った。

瞳の奥に決意を秘め、ルルカは両の眼を見開く。

「あ……行くわよ！　白嶺海！」

その1

故郷の街アストルーズは俗世間から半ば隔離されているような街だった。

しかし、かといって訪問者が全くない訳でもなく、剣聖力ミオ＝シエルを慕い街には人間、亜人間わず多くの人々が訪れた。

人間、亜人間の戦争真っ只中だったにも関わらず、両種族が共存するこの街の現状を世界政府が知れば……一体どうなつただろうか。

アストルーズは人間世界から見放されたに違いない。アストルーズが辺境に位置していたことが唯一の救いであった。

父に感化され、自分たちの世界に戻った者の亜人の中には、亜人世界にもアストルーズと同じような人間と亜人が共存できるような街の創設を目指した者たちもいたようだ。

そんな者たちが増えれば……長きに渡る人間、亜人間の戦争は、終息に近付いていったかもしれない。

しかし、共存の考え方を持つ者たちは、この広い世界から見れば、どうしようもないほど僅かな数に過ぎなかつた。

アストルーズの街の外れには、大きな川が流れていた。

『ルド川』。

流れが早く、かなり水深も深い川だ。

父や母からは絶対にルド川に近付いてはならないと口酸つぱく言われていた。

まだ幼く、遊び盛りだったルルカたちだが、両親の真剣な言葉を理解し、ルド川の近くでは絶対に遊ぶことをしなかつた。

漂流者があつた。

ルド川はアストルーズを遠く越え、様々な地方へ伸び続けていたため、他所の土地からの漂流者があつてもおかしいことではなかつたが、かといってそう滅多に現れるというわけでもない。

街の者たちも当初は皆戸惑っていた。しかし、まだ息のあるその漂流者を放つてはおけなかつた。

全身に激しい傷を負い、衰弱しきつていたその者に手厚い治療を施し、意識が戻るまで街一丸となつて看病した。

特に、その左腕に負つていた傷がもつとも深く、激しかつたといふことだけはルルカも何となく覚えている。

ただ……

それから先のことが、よく分からぬ。

漂流者が一体何者だったのか。何故アストルーズの街に流れ着いたのか。

その後……一体どうなつたのか。

幼い日の記憶は……紅蓮の業火の中で焼き尽くされる。

気付いたときには、ルルカの周りには誰もいなかつた。

いつもルルカと一緒に遊んでいた仲のよかつたあの二人も、

まるで家族のようだつた温かい街の人たちも。

そして……いつもルルカの側にいてくれた、心優しい父でさえも。

もう何も残されていなかつた。

ただ、ただ、胸の奥がきつへ締め付けられるかのように苦しくて、どうしようもなく悲しくて……母の胸の中でわんわんと声を上げて泣きじやくつっていたことだけは覚えている。

一体、そのとき何があつたのか……。

思い出すとしても、心の奥から滲み出る、足が竦み上がつてしまいそうな、どす黒い恐怖心に邪魔をされる。

出でぐるのは……ただ、空虚な悲壮感だけだつた。

ルルカの中で、ずっと綴り続けてきたページの一枚が……そのとき、途切れ、消えた。

どれだけ探し求めても、どれだけ追い続けても、もう決して戻ることのない一ページ。

消えてしまった父と……途切れてしまった記憶の一ページを探し求めること。

それが、ルルカが何でも屋となり、世界中を駆け巡っている理由である。

冷たく強い風が、まるでセブン・ファーバー号を取り巻くかのように吹き荒ぶ。

かつてこれほどまでに、『空が迫る』といつ感覺を覚えたことがあつただろうか。

機体が上昇すればするほど、天高く広がっているその白き領域が、どんどん眼前へと近付いてくる。

不思議と高鳴る、胸の奥の鼓動。

未知の世界へ足を踏み入れることに対する不安と、期待。先代の冒險者たちは、皆、このよつたな高揚感とともに大空へ舞い上がって行つたに違いない。

不安要素の方が多いはずなのに、それでも自然と心が高揚してしまつのは、空を愛する者の証なのだろう。

「つまおおこ、おじおい！ 大丈夫なのか、ルルカ？ 雲がどんどん近付いて来るぞ」

その圧巻の光景を田の頭たりにして、狭いブリッジの上で思わず大声を上げるこんにゃく。美女がいる光景以外で彼がここまで騒ぐのは珍しいことだったが、それも無理はない。

雲に近付けば近付くほど、これまで白い塊にしか見えなかつた雲が、まるで生き物のように大きくなっているのが分かる。確かに

それは、中に何か生き物が棲んでいるのではないかとも思いたくなるような、壯觀たる光景であつた。

「わっ……私に聞かないでよね！　私だつて初めてのことなんだから！」

こんにゃくが潛んでいるパークーが吹き飛ばされないよう、全身を抱え込むかのようにして押さえながらルルカは叫び返す。

大きくうねりながら迫り来る眼前の白き雲海を見れば、ルルカもこのままではそこに吸い込まれてしまうのではないかと疑いたくなつた。

しかしフォウルの仮説通り、リア＝グランデは広大な白嶺海の底を突き抜け、広大な雲の中に続いている。

順調に行けば……おそらく、白嶺海の中に進入出来るはずである。

かつて、このリア＝グランデの頂上部を確認した者はいない。一体、この山がどれほどの高さを誇るのか……それはディエル＝ダーナの街が生まれる以前からこの山を守り続けてきた麓の民たちでさえ知るところではなかつた。

最悪、白嶺海に入つてすぐ途絶えているという可能性だつてある。もしそうであれば、先に白嶺海へ向かつた空賊たちを追う必要はない。彼らの船も分厚い雲に阻まれ、先代の冒険者たちの船と同じようく大破しているだろうからだ。

しかし、それでもルルカたちが白嶺海を目指さなければならなかつたのは、リーフアの神託があつたからだ。

『空が落ちる』。

その言葉は抽象的過ぎて、一体何を意味しているのか伺い知ることは出来なかつたし、空賊たちの行動と結び付いているという確証はどこにもなかつたが、フォウルが教えてくれたディエル＝ダーナに伝わる伝説には、こうある。

天空竜が死ぬとき、それは空が滅ぶとき……と。

この伝説の信憑性は定かではないが、空賊たちが天空竜を狙つている以上、黙つてそれを見過ごすわけにはいかない。

空賊たちはルルカたちよりもかなり先に先行しているはずである。もしも分厚い雲に阻まれ、白嶺海への進入に失敗したのであれば、その残骸が山沿いに散らばっていそうなのであるが、その形跡はどこにも見当たらない。

フォウルの仮説通り順調に白嶺海の中に進入したのか、はたまた進入は無理と諦め撤退したのか……。

次第に強くなる強風に耐えかね、ルルカとこにゃくはブリッジを後にし、機内に戻った。

「す……すごい！ すごすぎるっ！！ かつてこれ程までに白嶺海に接近し、その姿を捉えたジャーナリストがいたでしょうか

? いや、いない !

これはレイナーズ新聞社史上最大のスクープとなりかねませんよ
！ 僕は何てツイているんだ ！」

興奮気味なアドルの声とカメラのシャッターを切りまくる音が響く。

機内ではアドルが鼻息を荒らげつつ窓にかじり付いていた。窓の外に広がるその圧巻たる光景に対する撮影意欲はあるようだが、冷たい強風が吹き荒れるブリッジにまで出る根性はないらしい。しかし、いくら白嶺海を撮影したとはいえ、こんなに間近で撮影したのでは現像された写真是真っ白であることは明白であるのに、テンションをマックスにまで上げるアドルはどうやらそんなことすら気が付いていないらしい。彼も幸せ者である。

「ティーズよ、船の調子はどうじゅうや ?」

「どうつて、爺さん。なんこと聞くまでもねえだろ ?
念入りに整備したんだ。快調に決まってんだろーよ !」

「そつかのう……。うーむ、何やら先ほどから壁や床がギシギシと軋んでいるような気がするんじゃが……」

「氣のせいだ、氣のせい ! ボケて空耳まで聞こえるようになつたんだよ」

「ば……ばかたれ ! ワシャの耳はまだイケイケじゃない !」

機内は随分賑やかなようだ。その様子から察するに、どうやら壁、床、天井など微塵も感じていないうらしき。

そのお気楽さにルルカは辟易して溜息を漏らすが、ここまで來たらもう不安に駆られる方が馬鹿らしい……と開き直ることにする。どちらにせよ、もう後には戻れないのだ。

ルルカたちの乗るエア・シップ、セブン・ファーバー号は、空賊たちの後を追い、快調に白き雲海の中を飛翔す。

その3

次第に、遠く……遠く。遙か天高く昇るエア・シップの姿が見えなくなるまで、リーファはその姿を見つめていた。

そうする」としか、彼女たちには出来なかつた。

出来ることであればリーファ自身もあのエア・シップに同乗し、彼女たちとともに白嶺海を目指したい。この空の行く末を、ともに見届けたかつた。

しかし、領主である自分が混乱の渦中にあるこの街から離れる訳にはいかない。

今の彼女たちには出来るのは、空の女神に対して祈りを捧げつつ、その姿を見送ることだけであつた。

やがて、自分たちの願いを託したその船が、白き大海と同化するかのように見えなくなるのを確認してから……リーファはゆっくりと街の方へと踵を向けた。

「戻る……。最早我らに出来ることは何もない」

「承知致しました」

リーファに付き添い、ともに街外れまでやつて来ていた側衛官が、その後に続く。お忍びで一時的にではあるとはいえ、厳戒態勢が敷かれている大聖壇を抜け出しているのだ。もしも不在が明るみになれば、混乱に拍車が掛かることは必至だらう。

もちろん、まだ不安要素は多々ある。

まず、彼女たちが未踏の地である白嶺海へ順調に進入することが出来るのか。

空賊たちに追い付き、あの少人数で空賊の一団を止めることが出来るのはか。

そして……運命に抗い、神託にあつた『空の崩壊』を止めることが出来るのか。

どれも困難なものばかり。これらを同時に解決することなど、不可能に近い。

だが……信じるしかない。剣聖力ミオ＝シエルの娘である彼女なら、奇跡を越しつる、かすかな希望を持ち合わせているのだ。

「かの者たちなら、きっとやつてくれる。我らは大聖壇に帰り、成功した暁に与える報酬の準備でもしておけ!」

「剣聖力ミオ＝シエルの娘は何でも屋でしたね。ただで街の大事を引き受けなかつたのはさすがに抜け目がありませんが……領主から直々の依頼となれば、街を上げた謝礼を与えなければなりませんな」

「……食事などでは誤魔化せそうにないな、あの者は。
そうだな……。国宝珠でも与えることにしよう。あれならさすがに満足するだろ? 一つずつ用意しておけ。大きさは……お前の誠意に任せる」「

「分かりました」

言いながら街へ向かつて一步を踏み出した、そのとき、

「…………つーーー？」

頭の中に突如として閃く、鋭い雷光と、凍てつく旋風。

何の予告もなしに現れた二つが激しく交錯し、頭の中を蹂躪する。

「リーファ様…………どうかなされましたか？」

突然蹲つたリーファの側に、慌ててしゃがみ込む側衛官。

「う……うう……」

そんな側衛官の声も、どこか遠くにしか響かなかつた。

激しい頭痛と嘔吐感に堪えかね、その場に蹲つたリーファは弱々しげ呻き声を漏らす。

「また……何か見えたのですか……？」

その体を側衛官に振り起しられ、リーファは正氣を取り戻した。

突如として頭の中に浮かんだ漠然としたイメージが、次第に鮮明なビジョンとなつて現れ始める。

「あ……嵐だ……」

「え……？」

「嵐が、来る……」

痛む頭を押さえ、立ち眩をどつに堪えながら、リーファはようようと立ち上がつた。

エア・シップが消え入った空を、ゆっくりと仰ぎ見る。

頭上に浮かぶ広大な雲の領域は、いつもと同じように静寂を保つてゐる。

しかし、リーファの脳裏に浮かんだビジョンは、間違いなく荒天の空を現していた。

この街に嵐が訪れるることは、滅多にない。最後に嵐が訪れたのは……果たして、一体いつのことだつたろうか。記憶を深く辿らねば行き着かぬほど、それは極めて稀な現象であった。

しかし……神託に誤りはない。嵐のビジョンが見えれば、どんなに今の空が穏やかでも、間違いなく嵐がやって来るのだ。

「空が……荒れるぞ」

この状況での嵐の予感は、偶然か……。将又、必然か。そこまでは判然としなかつたが、空高く舞い上がったエア・シップに異変を伝えようにも、通信手段などこの街にはない。

結局彼女たちには、また空の女神に対して無事を祈ることしか出来ない。先を『見る』ことしか出来ない自分たちの無力さが恨めしかつた。

しかし、それでも……。

静かに目を閉じ、両の手を握り合わせ、リーファは天に向かって一心に祈りを捧げる。

「空の女神リーアノンよ……。どうか……どうか御加護を……。
かの者たちに……幸いを……」

「（まつしゆまつしる高原で）丹精込めたおれのため
お口でとろとろとうけちやうへ

まつたりまつたり、はいチーズ！」

「……ちゅうと、こんなにやく。さつきから耳元で変な歌歌わないで
よね」

顛かみをヒクヒクと引き攣らせつゝ、ルルカはフードの中のこんな
にやくをギロリと睨み込んだ。

気流が安定しつつあるのか、それともティーズの操縦技術がいいせ
いか、セブン・ファーバー号はトラブルもなく順調に白嶺海へと迫
りつつあった。

そのせいか、皆の緊張感も次第に解れ始め、こんなにやくに至つて
は人目もばからず呑気に歌い始める始末である。

舵を取るティーズを除き、アドルもフォウルも呑気に居眠りをこい
ていたため幸い周りの耳に入ることはなかつたが。

当初緩やかな山道続きだつたりア＝グラントも、高度を増すに連
れて次第に傾斜が増していく。

反り立つよつとに聳える斜面は、もはや崖といつてもいい。ここま
で来たら自力での登頂はまず不可能だろう。

ルルカの苦情に、こんなにやくは憮然とした表情を覗かせた。

「（なんだよなんだよ、おれが作った『アイラヴ・チーズの歌』が
気に入らないってのかよー！）」

「氣に入るも何も……音程メチャメチャじゃん。そんな歌、耳元で
お絆みたいにずっと聞かされ続けたんじゃイラライラも募るつてもん
よ」

「（つたくよー、文句ばっか言いやがつて。せつかく暇潰しでもし
てやるうと思つたのに……。）

それじゃあ仕方ねえ。新曲の『金色美女の歌』でも披露してやつ
かなー！」

「だ〜か〜ら！ 選曲の問題じやないってのー！」

あんた音痴なんだから、もう滅茶苦茶な歌はやめてー！」

「（おつ……おれの美声をつかまえて音痴だと……？！
ばかやうーつー！ ルルカの聞く耳がねえだけじゃねえかつー！）」

「なつ……何ですつてえー！？」

こつものトらない言い合ひが、またはじまりんとしていた、その
とき、

ガクンッー！

「つ……！」

突然、機体の高度が大きく落ちた。バランスを崩し、床に転がるルル力たち。

と同時に、外から何か無数の石礫のようなものが激しく機体を叩き付け始める。

機体に穴を開けんばかりの勢いで降り付ける礫の衝突音が、まるでマシンガンの発砲音のように機内に響き渡った。

「な……何じゃ、何事じゃ？！」

「まさか、デイズさんが操縦ミスして墜落したんですか？」

寝入っていたアドルやフォウルも、その衝撃と音の大きさでさすがに目を覚ましたようだ。

しかし、問われても、ルル力にさえ未だ何が起きたのか現状が把握出来ていない。ただただ、激しく揺さぶられる機内で、転がり回らぬよう必死で座席にしがみ付くばかりである。

「あ……嵐だ！　いきなり空が荒れ始めやがった！」

操縦席から、デイズの緊迫した声が響いた。

気流に翻られるセブン・ファーバー号は、まるで大地震に見舞わ

れたかのように激しく上下左右に揺れ動く。もはやまともに立つていることすら儘ならないような状況であった。

降り頻る雨は、ながら弾丸の如くけたましく機体を打ち続ける。

「さっきまで、あんなに氣流が安定してたのに……」

座席にしがみつきながら叫ぶルルカ。先程までの天候は決して悪くなかったはずだ。いきなりこんな大嵐が発生するだなんて、想像することすら出来なかつた。そして、ここまで大きな嵐を経験したこととは、ルルカは未だかつてない。

「フ……フォウルさん、窓の側は危険ですよ！ 下がつた方が……」

暴風は窓を突き破られんばかりの勢いでに激しく吹き付け続ける。アドルは一番窓際の席にいたフォウルを引き戻そうとするが、何故かフォウルはその場から離れようとしなかつた。

「ち……ちょっとおじいちゃん！ 何してんのよ！？」

腰を抜かして動けなくなつたような様子でもなかつたが、フォウルにはルルカたちの言葉などまるで届いていないようだつた。ただ、座席にしがみつきながらも、必死で窓の外を見つめている。

その目に……恍惚とした光を宿しながら。

「同じじや……」

「な……何がつ ？！」

「同じなんじや ！ あの日、あの時と ！
まさしくこれは、シーボルト号を突如襲つた大嵐と同じものじや
！」

伝承には、こうある。『天空竜は……嵐と共に降臨する』……と。
今日この日、この瞬間……この大嵐が発生したのは、紛れも無く
必然 ！

ワシらは導かれておる……！ 白嶺海の中へ…天空竜の元へと
！！

天空竜は、必ず現れる……。現れるぞ ！！

この状況下で、今まで見たことないくらいテンションを上げまくる
フォウルの心情などルルカにはまるで理解出来なかつた。

しかし……フォウルの瞳は輝いていた。まるで夢を追い求める純
粋な少年のよう。

すると、突如、嵐に翻られていたセブン・ファーバー号の速度が
急速に上がつた。

「お……おっさん、どうするつもり ？！」

「こんなバカでかい大嵐に揉まれ続けりや 機体がもたねえ ！ バ
ラバラにされちまう前に一気に白嶺海の中を田指すぞ ！
それに、ここまで来ちまつたからには、もつ後戻りは出来ねえ…
…。振り落とされねえように、しつかり掴まつてろ ！」

操縦席から響くディーズの口調に余裕はなかつた。体が吹き飛ばさ
れないよう踏ん張りながら、必死で操縦桿を握っている。

しかし、機はまるで真っ直ぐには推進しない。

吹き寄せる暴風を前に、どうしようもなく無力でしかなかつたセブン・ファーバー号は、気流に押し付けられるかのように、まるみるうちに崖に吸い寄せられていく。

「ち……ちよつと、ぶつかるわよ」

「いや、デイズ！ 白領海はもつての前じゃ！ しつかり上を田指さんか……！」

「……しかし、ついでに、ディーズさん……」

「ぐう、うつへ、か……舵が効かねつ……」

勝手なことを言いまくる外野を完全に無視し、必死の形相で歯を食いしばるティーズ。

だが次の瞬間、

うん！

一際大きい衝撃が機体を襲つた。

一瞬、ルル力たちの体が宙に浮く。

衝撃に堪え切れなかつた両手は必死になつて掴んでいた座席から離れ、弾き飛ばされたルルカたちは床の上に転がり回る。

氣流に弄ばれ続けるセブン・ファーバー号の下腹部は、荒れ狂う暴風に押し付けられるかのように崖面に叩き付けられたのだ。

ルルカのフードの中でうずくまっていたこんなにやぐの小さな体も、外に投げ出された。

「さやああああああつ　！　し……死ぬう～～～死ぬならせめて絶世の美女の腕の中がいい～～～！」

「ほんにやく！ それなら私の腕の中に飛び込んでおいで！」

「絶世の美女つづつたろ！ よく聞いたけつ

「ぬわあ～んですつてえつ？！」 だったら嵐に呑まれて死ぬ前に、私が絞め殺しちゃる！――」

メキメキメキ
メキメキメキ

しかし。

転げ回りながらもルルカの両手がこんなにやくの体をやつと捕まえた瞬間、周囲に嫌な音が響く。

機を叩き付ける激しい礫の雨音の中でも、その音は不思議とやけにハッキリとルルカたちの耳に届いた。

恐る恐る音の聞こえた方に田を向けると……、先程崖と衝突した機体の床につつすらと入った、小さな、小さな亀裂。

だが……小さな亀裂は、メキメキといつ音とともにみるみるうちに大きく広がっていく。

「や……やべえんじゃねえのか……？」

その光景にぼんやりと田を奪われている暇などなかつた。

「んにゃぐが呑いた、次の瞬間、

「ハハハ！」

機の外で荒れ狂っていた暴風が、一瞬にしてセブン・ファーバー号の中に侵入し、機内を激しく掻き回す。

激しく吹き荒れる強風を前にして、抗う術など持たぬルルカたちは、弄ばれ、もつれ合いながら、あつという間にその意識までも奪い取られてしまっていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8337f/>

LuLu～風の軌跡～？幻の天空竜

2011年11月23日18時54分発行